
銀河伝説 鋼鉄の咆哮

C - 62

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀河伝説 鋼鉄の咆哮

【Z-コード】

N4770V

【作者名】

C-62

【あらすじ】

西暦2205年、新たなる侵略者に歴戦の名艦、宇宙戦艦ヤマトと修復竣工されたSDF-1 マクロスが立ち向かうが…

プロローグ（前書き）

初めまして、C 62と申します。このたび宇宙戦艦ヤマト 超時空要塞マクロス 機動戦士ガンダムシリーズのクロス小説を書く事になりました。

はつきり言ってどうなるのか作者次第ですので、気長に楽しんでいただければ幸いです。
それではお楽しみ下せこませ。

プロローグ

無限に広がる大宇宙…

そこは様々な生命に満ち溢れる世界…

我々の地球もまた、そのほんの一部に過ぎない…

22世紀末以来、度重なる異星人の侵略を宇宙戦艦ヤマトの活躍によつて退けた地球は今、繁栄の一途をたどつていた。

だが、史上最大最強の侵略者がその魔の手を伸ばしつつある事を人類は今だ知らない…

時に西暦2205年6月…

地球の守護神宇宙戦艦ヤマトと修復新造されたSDF-1マクロスが新たなる侵略者に立ち向かう！そしてニュー・タイプ部隊として知られるロンド・ベルと協力して戦う彼らの運命は！

第1話 ミステリアス・プレート（その1）

A · D · 2205 6 · 1 15 : 00 火星空域 ヤマト第1

艦橋

西暦2205年、宇宙戦艦ヤマトは艦長 古代進の指揮の下、第3輸送船団護衛艦隊旗艦として、太陽系から4・3光年離れたアル

ファ・ケンタウリ星系第4惑星リンボスからの帰途についていた。

「火星空域を通過した。相原、地球連邦軍本部に打電してくれ、

“ 我が艦隊は明日AM11:00に帰還予定”とな。

「了解…でも古代さん、連絡先はそこだけでいいんですか？何か大事な所を忘れてません？」

通信班長の相原義一の一言で、古代はいぶかしげな表情で彼に聞いていた。

「何だ？他に連絡するといふつてあるのか？」

「とぼけないで下さいよ！大事な婚約者の所でしょーが！」

「お前なあ…口を開けばそればかり！少しほの心配しきつての！」

第1話 //ステリアス・プレート（その2）

古代の発言で、第1艦橋の中は笑い声で満ち溢れていた。勿論、古代としても婚約者である森ユキの事を忘れていた訳ではなく、この航海を最後に輸送船団護衛艦隊から、地球本星第1軌道艦隊に配置換えされたのを機会に気持ちの整理をしておこうとあえて触れてはなかつた。

それよりも気になるのはリンボスで発見された一枚の古いプレートの事であった。そのプレートはリンボスの科学者から言わせると、かなり古い物で少なくとも50万年以上の物で、その頃にはすでに文明が栄えていたのではないかとの事だ。

（もしこれが事実ならば、人類の歴史を変える物かもしれない……とにかく科学局の真田さんに見てもらえれば何か分かるかもしれない……）

古代がそう考へていると隣の操縦席にいる航海班長の島大介が話かけてきた。

「おい古代、どうしたんださつからボーッとして……さうは愛しいユキちゃんの事でも考へてたのか？三ヶ月ぶりに顔を合わせるんだ、それはアノ事でも……」

「お、おい島～！お前まで俺をおちよぐのか～！」

古代の発言で再び第1艦橋の中は爆笑の渦に満ち溢れていた。

第1話 ミステリアス・プレート（その3）

同日 同時刻 東京 連邦軍本部

その頃、森 ユキは連邦軍本部で忙しく仕事をこなしていた。ここ最近は地上勤務に専念しており、以前のように宇宙に出ることもなかつたものの、それでも三ヶ月おきに帰つて来る古代とは順調に愛を育み、この一週間後には念願だつた結婚式を挙げることになつていた。

そんなユキの後ろからいつもの如く、アナライザーがそつと近づき盛大に彼女のスカートをめくつていた。

「ちょっとアナライザー！いい加減にしてよ～っ！」これは司令部なんだからそういう事止めてつて何度も言つてゐるでしょ～が～！
「イヤー ユキサン今日モ一段トオキレイデ！」
「ダメよアナライザー！そんなとぼけた事言つても無駄よムダ！」
「アツソウデスカ！人ガセツカクイイ話ヲ持ツテキタノニ聞キタクナインデスカ？」

アナライザーが親切心でユキに何か言い出しそうになつた時、彼女は先手を打つて先に切り出していた。

「もうとっくに知つてゐわよ～ヤマトが明日の午前中に帰還するんでしょ？私が何年この仕事していると思つてんの～」
「……ハア～アナタノ仕事ブリニハ参リマシタ……」

アナライザーそれだけ言つとす”す”とその場を離れ、その様子をユキはクスクス笑いながら見送りながら考えていた。

(いよいよ明日、古代君が帰つてくる…早く顔が見たい…)

第1話 //ステリアス・プレート（その4）

A · D · 2205 6 · 2 11 : 00 東京湾上連邦軍宇宙港

翌日、ヤマトを含む護衛艦隊は定時に東京湾上の連邦軍宇宙港に着陸していた。

到着ゲートにはすでに大勢の人々が出迎えに来ており、ユキも古代の姿が現れるのをひたすら待ちわびていた。

（遅いなあ…艦長だからいつも最後に降りて来るのは分かるけど、たまには真っ先に降りて来てくれてもいいのに…）

ユキがそう思つていると後ろから誰かが彼女の肩を叩いてきたので振り向くとそこにはクローディア・ラサールと早瀬 未沙が立っていた。

「あら、どうしたの？ あなたの大事な彼氏、まだ降りて来ないの？」
「あ、クローディアさん、それに未沙も…ひょっとして今から南アタリア島に？」

「ええ、本部での最後の打ち合わせが終わったので今から行くんです。」

「まあ、もつともあのタヌキ親父艦長は本部のお偉方と今夜は飲み会だらうけどもね！」

クローディアの発言で一同が笑い声を上げているところに古代がようやく姿を現していた。

「古代君！ お帰りなさい！」

「ただいまユキ！ あ、それにクローディアさんに早瀬君もお久しふ

りです！」

「お疲れ様古代君！久しぶりに会うけど相変わらずね！それよりも
今夜はたっぷりユキと二人、たっぷりお楽しみなさい！じゃあね～
～！」

そう言つとクローディアは未沙を連れて真っ赤になつた二人を置いてさつさとその場を後にしていった。

「クローディアさん、言つだけ言つてさつさと行つてしまつた…全く余計な事言つて…」

「や、そうよね～変に氣を使つちゃつて…」

第1話 //ステリアス・プレート(その5)

同日 11:30 地球連邦科学局

それから30分後、古代とユキは科学局にいる真田 志郎を訪ね、リンボスの科学者から預かっていたプレートを彼に手渡していた。

「どうでしよう真田さん、このプレートを見て何か感じませんか?」「いや…特に何も感じないが…何か気になるのか古代?」

「ええ…リンボスの科学者はただの過去の遺物だと言つてましたが、僕には何か引っ掛かるものがあつて…もしかしたら何かのメッセージじゃないかと…以前にも似たような事がありましたよね、イスカンダルのスター・シャさんやテレサ…それに二年前の水惑星アクエリアスの存在を記した石版など…」

「ちょっと古代君、それはいくらなんでも考え過ぎよ…これはただの遺物にしか見えないじゃないの?」

古代の発言に横からユキが口を出していた。実際四年前にも宇宙の彼方からメッセージが入り、古代達ヤマトクルーは命令を無視してまでヤマトを発進させたのであった。

「まあユキの言つ通りただの遺物かもしれないしな…あまり考え過ぎると熱が出来るぞ古代…とにかくこれは俺が預かつとくから後は任せろ。それより古代、せっかく帰つて来たんだ、少しほはユキにサービスしたらどうなんだ?そのうちユキに愛想尽かされるぞ…」

「さ、真田さん!…あなたまでそんな事言つんですか〜〜!」

第1話 //ステリアス・プレート（その6）

同日 13:25 横浜中華街“明謝樓”

それから約2時間後、古代とコキは横浜中華街のレストラン“明謝樓”で食事をとっていた。ここは一人がデートする時に決まって立ち寄る場所の一つであった。ひとしきり食事も終わり、この店のオーナー夫婦が食後のデザートを持って一人の前にやって来た。

「古代さん、コキさん、いつもこの店を」「利用いただきありがとうございます！いかがでした今日の料理は？」

「ええ、とても美味しくいただきました。……それより今日は娘さんのミンメイさんは？いつもなら真っ先に姿を見せるはずなのに？」

古代が不思議そうに尋ねるとオーナーは慌てふためきながら「あ、すいません！ちょっと奥の方が忙しいので私はこれで……と、それから奥の方に向かつて行った。

オーナーが奥へ行ったのを確かめたその妻は小声で古代とコキに説明していた。

「実は…三ヶ月前に私達と喧嘩して家を出ちゃったんです…それも、“歌手になりたい、ミス・マクロスコンテストに応募して最終選考に合格したからそれに出たい”なんて言って…それを聞いた主人は手がつけられないくらい怒りまくつて…私も考え直すように言ってその場を何とか納めたら…その夜置き手紙を置いて家を出ちゃったんです…」

「え…それで今何処にいるか心当たりはあるんですか？」

「はい…実は一週間前に私の携帯電話にメールが来まして…今、

南アタリア島の叔父さんの店にカイフン兄さんと一緒にお世話をなつてゐる…心配しなくていいけどお父さんには内緒にしといて”と…」

その話を聞いた古代とヨキはいたたまれない気持ちになつてゐた。あれほど両親と仲の良かつたミンメイが家出してまで歌手にならつとは思つていなかつた。

「あらいやだ…こんな話するつもりなかつたのに…せつかく来て頂いたのに嫌な話聞かせて」めんないね…」

第1話 //ステリアス・プレート（その2）

同日 21:00 東京都内 古代進のマンション

“明謝楼”を出た後、一人は横浜ベイエリアを散策し、その後都内にある古代のマンションに戻っていた。古代とユキは二年前の暗黒星団帝国との戦いの後、互いの傷ついた心を癒すかのように自然と同棲を始めたのだった。

古代は、ユキがバスルームにいる間に今度の配置換えに伴う人事異動に関する資料に目を通していた。

「ええと…俺はヤマト艦長と第1軌道艦隊司令を兼任…真田さんは副長で復帰…おっ！揚羽と土門が戻つて来るんだ！おまけに土門の奴、生活班から戦闘班に動いてしかも戦闘班長つて…大丈夫か？それで後は…な、何だ？ユキまで復帰つて、しかも第1艦橋レーダーオペレーター専任つて…お～～いユキい～～これ一体どういう事だ～～～？」

古代はバスルームからリビングに戻つて来たユキに向かつて叫んでいた。

「ちょっと古代君、そんなに大声出さなくともいいじゃない…見ての通り私もまたヤマトに乗り組みますのでよろしくお願ひします古代艦長！」

「しかしながら…一週間後に結婚するんだぞ、何も夫婦で同じ艦に乗り組むつてのはちょっと…」

「あらいいじやない！結婚しても仕事は続けるんだし、それに旧姓

の森ユキで通すから問題は無いはずよー。」「

「だけどなあ……」

それでも何か言いたげな古代の様子を見て、ユキは何も言わずに自分の唇を彼の唇に押し当てていた。

「…………ねえ…………そんな事よりも…………久しぶりに…………いっぱい愛してくれる…………？」

ユキの妖艶な眼差しに古代も根負けし、彼女の体を抱き上げると元で囁いていた。

「了解、お姫様…………今夜はたっぷり楽しめますよ…………」

その夜一人は情熱的な一夜を過ごしたといつ……

第1話 ミステリアス・プレート（その2）（後書き）

次回、マクロスキャラが本格的に登場の予定…

番外編（その1） 世界観設定 ヤマト・マクロス編

1 この物語で彼らが所属するのは“地球連邦軍”。どちらかと言うとヤマトシリーズに出て来る“地球防衛軍”的な感じ。

2 当然ながらヤマトクルーにも階級はあります。主なクルーの階級は以下の通り。

大佐：古代 進 真田 志郎

少佐：島 大介 山崎 稔

平田 一 幕ノ内 勉

大尉：森 ユキ 南部 康雄

太田 健一郎 相原 義一

加藤 四郎 坂巻 浪夫

中尉：徳川太助 仁科春夫 赤城大六

少尉：土門竜介 揚羽武

3 今回の主な舞台は地球と、「ヤマト3」に出てきたアルファ・ケンタウリ第4惑星です。この惑星をOVA「YAMATO 2520」に出てきた「リンボス」と名付けました。（マイナー過ぎる作品なので誰も知らないと思つ…）

4 今作品限定でヤマトの全長を原作の265mから「実写版ヤマ

ト」の534m（映画パンフレットより）になります。（やうしないとガンダムシリーズの戦艦に比べると小さ過ぎて見劣りするんで…）同様にマクロスも少しサイズUPして1200mから1500mに延長します。

（劇中のマクロスは両腕にアームドバー&アームバーを接続した劇場版）

5 マクロスキャラのロイ・フォッカーは以前、ヤマトに乗り組んでいたという設定。

…以上、世界観設定その1でした。多少の変更は少しづつ劇中で明かします。

主に前回書き忘れた話です…

6 時代設定…この物語は「ヤマト3」及び「ヤマト完結編」後の設定です。但し「ヤマト3」第18話でガルマン・ガミラスのフラウスキー少佐が行つた太陽制御作戦は成功している設定のため、ボラー連邦との最終決戦がないおかげで土門と揚羽は生き延びています。（同様に平田さんも死んでません）

さらに「完結編」で起きるはずだった銀河大異変も起きて無いのでガルマン・ガミラスやボラーはそのままですが、アクエリアスの地球接近はあります。しかしこれも寸前で阻止成功。ヤマト自沈は無し。（完結編本編での古代の艦長辞任も無いため、沖田十三の復活も無し！ 少し強引かも…）

7 マクロスが地球に落ちて来たのは西暦2190年。修復まで15年かかったのはガミラスを始めとする異星人の侵略もそうだが、地球の大企業が同艦の修復を巡つて激しい競争をしていたため。（すごいリアルな展開）

8 今作品でのヤマトの艦載機はマクロスに搭載されたバルキリーVF-1シリーズ。当然劇場版に登場したスーパー・バルキリーも出ます！（それにしても、ヤマト復活編に出て来たコスモバルサーつて何かスーパー・バルキリーに似ているような…）

何か取つて付けたような設定でいいません……
次回、やっと第2話へ……

第2話 フーピー・トラップ（その1）（前書き）

この小説書くために初代マクロスをレンタルして見てますが、各話ごとにキャラの顔が違い過ぎて違和感ありまくり…

第2話 ブーピー・トラップ（その1）

翌日、南アタリア島では修復新造されたSDF-1マクロスの進宇宙式が行われていた。この艦は15年前の西暦2190年、地球近辺に突然出現し南アタリア島に落下した全長1500mにも及ぶ巨大な宇宙船であった。

その当時、地球はガミラスからの攻撃を受け始めており、全力でこの艦の修復作業を進めてはいたものの攻撃が激しくなるにつれて作業は中断に追い込まれていた。

結局、修復作業が再開されたのは、ヤマトがイスカンダルから帰還してからであった。そして今、マクロスは宇宙に向け飛び立とうとしていた。

A · D · 2205 6 · 3 9 · 15 南アタリア島マクロスメインブリッジ

「早瀬中尉、グローバル艦長が式典会場に入られたそうです。」マクロスメインブリッジオペレーターのヴァネッサ・レイアードが未沙に報告していた。

「式典開始まで後15分…艦長つたら今朝方東京から帰つてそのまま会場入りするなんてどういう事かしら？」

未沙が半ば呆れた表情で自席の端末を調整しながらボソリと呟くと、同じく隣席で調整していたクローディアが言い返した。

「ビーセ朝方まで飲んだくれてたんでしょう？あのタヌキ親父艦長…」

「あなたじゃあるまいし…フォッカー少佐との朝帰り、ちょっとした名人よ？」

「大丈夫！私もロイもまだまだ若いんだから一晩寝ないでも平気よ！それとも何？そんなに気になるんならあげるわよ？何ならのし紙つけて！」

「あ、あなたねえ…」

未沙が呆れた表情でクローディアに詰め寄ると、同じオペレーターのキム・キャビロフとシャミー・ミリオムが合意の手を入れていた。

「へえ～つ！中尉も男性に興味津々なんですねえ～知らなかつたわ～」

「えええ～つ～嘘お～つ～？」

「もうつ～！そんな事言つ暇あつたひそかに発進準備してちょうだい！」

「は～い～！解で～～す～～！」

第2話 ブーピー・トラップ（その2）

同日 同時刻 月軌道

それは、突然の出来事であった。月軌道周辺に重力異変が発生し、おびただしい数の正体不明の艦隊がその姿を現していた。その大きさは小型でも2000m、大型ともなると4000m級であった。その艦隊の先頭に立つ旗艦のブリッジでは一人の巨人がモニター越しに前方に見える地球を凝視していた。

「あの惑星か？監察軍の連中が乗つた艦が墜落したと言つのは？」

二人の男のうち、背の大きな隻眼の男が呟くと、もう一人の背の小さな赤い髪の男が手元の端末を操作しながら答えていた。

「はい…報告によれば、15周期前に監察軍の生き残りが乗つた艦隊のうちの一隻があの惑星に墜落したとの事だそうで…」

「ふむ…ただの脱落艦かも知れないが万一と言つ事もある…直ちに先行艦隊を出し、前方の惑星を調査せよ…」

その隻眼の男…ゼントラーディ軍第67分岐艦隊司令ブリタイ・クリダニクは傍らにいた赤髪の副官の男…エキセドル・フォルモを通して命令を下すと、艦隊から一隻の小型艦が地球へと進路を取つていた。

「……ありますから、このUFO - 1 マクロスは、我が揚羽コンツェルンが心血を注いで修復新造された希望の星となる艦であります……」

南アタリア島の進宙式会場では、揚羽コンツェルンの総帥にして連邦議会の議長を務める揚羽 蝶人の演説が行われていた。その後ろでは居並ぶ来賓と共にマクロス艦長であるブルー・ノ・・・グローバルが落ち着かないそぶりで演説を聞いていた。

するとそこに一人の士官が彼に近付き、そつと耳元で報告していた。

「艦長、月基地より入電です……月軌道周辺に重力異変と発光現象を確認……さらに未知の大艦隊出現……との事です……至急ブリッジに向かって下さい……」

「重力異変……15年前と同じだな……分かつた、すぐにブリッジに行こう……」

グローバルはすぐに決断するとその場を離れた。それと同時に演説していた揚羽会長が後ろを向いてグローバルを紹介しようとしていた。

「と言う訳で、栄光あるこの艦の艦長である……つてどこ行つてしまつたんだあの男……」

第2話 ブーピー・トラップ（その3）

同日 9:25 マクロスメインブリッジ

その頃、メインブリッジではある異変が起きていた。マクロス修復時に発見された異星人の防衛システムが突然作動を開始していた。

「何これ！閉鎖したはずのシステムが勝手に…！」

「そ、そんな事ある訳ないでしょ！？とにかく出力をカットできな

いの！？」

クローディアの発言に末沙が、隣席の端末やスイッチ等を操作したもの、システムは相変わらず点滅を続け、さらに間の悪い事に艦首前方の主砲発射システムまでが作動を開始していた。そこにようやくブリッジにたどり着いたグローバルが慌ただしく一人に聞いただしていた。

「一体どうした！何が起きているんだ！」

「閉鎖したはずの旧システムが勝手に…艦首主砲発射システムまで動き始めて！」

クローディアが報告している間にも、艦首部分が左右に分かれ、その間をプラズマ粒子が輝き始め、その粒子エネルギーは臨界に達しつつあった。

「主砲が…発射されますっ！？」

クローディアが叫ぶと同時に主砲が発射され、その強大なエネルギー

ーの束はしばらく海上を走り、やがてそのビームは上空に舞い上がり衛星軌道周辺に近付きつつあつた二隻の小型艦に命中し撃沈していった。

同日 同時刻 月軌道周辺

「先行艦隊、撃沈されました！」

観測員の報告を聞き、パネルに映し出された映像を見たブリタイは即座に命令を下していた。

「やはりあの惑星に潜んでいたのか…全艦隊に発令ー第一級戦闘配備！」

「了解！全艦隊戦闘配備！バトルポッド隊は全機出撃準備に入れ！」

第2話 ブービー・トラップ（その4）

同日 9:28 マクロスメインブリッジ

「主砲管制システム……元に戻りました……」

クローディアが呆然とした表情で報告すると同時に、ヴァネッサも監視衛星からの入電をキャッチしていた。

「監視衛星からの報告によると、主砲ビームは大気圏外400km地点で宇宙艦らしき物体を撃破。さらに後続の艦隊が接近中との事です！」

その報告に騒然となる中、グローバルはぽつりと一言呟いた。

「ブービー・トラップだ……どうやら我々は嵌められたようだな……」

「……ブービー・トラップ……それってどういう事ですか艦長……？」

「かつてこの星で250年ほど前に行われていた世界大戦で、旧ドイツ軍がよく使っていた手だ……戦場で目立つ物……ぬいぐるみや万年筆などに爆発物を仕掛けておき、それを敵が拾い上げると……という訳だ……大方、この艦もそんなものだろうな……」

グローバルはそう言つと胸ポケットからパイプを取り出し火を付けようとした時、シャミーが立ち上がるなりヒステリックに叫んでいた。

「艦長……ブリッジは禁煙です……！」

「わ、分かっとするわい！くわえてるだけだ！総員第一級戦闘配備！
並びにマクロス発進準備だ！」

「了解！全艦戦闘配備！本艦はこれより異星人との交戦に入る！」
「これは演習ではない！繰り返す、これは演習ではない！」

第2話 フーピー・トラップ（その5）（前書き）

今回は、ヤマトクルー側からの話です。

第2話 フービー・トラップ（その5）

同日 9:15 東京 連邦軍ドック ヤマト第1艦橋

東京湾上の連邦軍ドックに停泊中のヤマト第1艦橋では、第1軌道艦隊の業務引き継ぎと新たに配属になつたクルーの顔合わせが取り行われていた。

「艦長、お久しぶりです！ またお世話になります！」

土門 竜介が古代に着任の報告をすると、古代もまた感慨深げに土門に話かけていた。

「土門、またよろしく頼む。今度からは念願の戦闘班所属… それも戦闘班長だ。とにかく頑張つてくれよ！」

「はい！ ありがとうございます！ 頑張らせていただきます！ それに森さんとまた一緒に働くなんてうれしいです！」

土門のその一言に古代以外のクルーから笑い声が上がり、その様子を見ていた島が土門にクギを刺していた。

「おい土門、あまりそんな事言つなよ！ 約一名嫌な顔をしている奴がいるからな、気をつけておけよ！ ？下手すりや射撃の的になるぞお～！」

その一言にまた一同から笑い声が上がると、アナライザーが土門に向けて言い放っていた。

「オイ士門！ ユキサンハ俺ノ女ダ！ ヘタニ手ヲ出スンジヤネ！」

そう言つとアナライザーはユキの側に近付き、やおり彼女の制服のスカートを盛大にめくついていた。

「もへへへアナライザー！ いい加減にしてよへへへ！ ねえ古代くうへへん、艦長としてアナライザーにその癖止めるよつにか言つてやつてよ～！」

「あ、いや……その……俺としてはだな……」これはもうヤマト艦内名物の一つだし……その……」「……」

「はい！？ 何か言いました？」

ユキの鋭い視線に圧倒された古代は思わず咳ばらいした後アナライザーに命令していた。

「あ～あのうアナライザー……今後一切このよつな事はやらないよううに……」

「ハイハイ！ 分カリマシタコ古代艦長ドノ！」

アナライザーの一言で第1艦橋内は再び笑い声に満ち溢れていた。その時、航法レーダーを担当している太田健一郎が緊迫した表情で報告を入れていた。

「艦長！ 南アタリア島から放たれた高エネルギー弾が、大気圏外の所属不明艦に命中！ さらに所属不明艦隊多数接近中！」

「何だつて！ 相原、連邦軍本部からの指示はあるか！？」

「はい、今入りました！ ヤマト率いる第1軌道艦隊は直ちに出撃との事です！ 増援として、土星空域で待機中の主力艦隊が間もなくワープするとの事です！」

「分かつた！本艦は直ちに出撃する！土門、発進総指揮はお前に任せる！」

「了解！全艦発進準備！」

次々と指示を出す土門の声を聞きながら、古代は艦長席で一人想いを巡らせていた。

（また始まるのか戦いが……俺とユキが結婚を決めようとする度にいつもこの有様だ……）

第2話 フーピー・トラップ（その5）（後書き）

土門がユキに憧れている様子は他の一次創作でよく取り上げてますが、この小説でも取り入れました。

ちなみに、今回ユキの制服はヤマト本編で着用していたボディースーツタイプの艦内服ではなく、「永遠に」「完結編」で着用していたタイトミニのスーツです。（いくら何でも未沙や三人娘達には、ボディースーツを着せる訳にはいかないし、第一彼女達に似合つかどうか…）

第2話 ハーピー・トラップ（No.6）（前書き）

リン・ミンメイの登場です！

第2話 フーピー・トラップ（その6）

同日 9:25 南アタリア島進宙式典会場

南アタリア島マクロス進宙式典会場の一角にある控室では、式典後に開かれるミス・マクロスコンテストに出場する参加者がその出番を待つており、その中にはリン・ミンメイの姿があった。

ミンメイは幼い頃から歌手に憧れ、中学を卒業後高校に通いながら歌のレッスンを始めていた。そして三ヶ月前に両親に内緒でミス・マクロスコンテストに応募して最終選考に見事合格。その事を両親に伝えると当然の如く反対され、大喧嘩の末に家を飛び出したミンメイは南アタリア島の叔父夫婦の経営している中華料理店に転がりこみ、同じくミュージシャンを田指して家出していた兄のカイフン共々世話をになっていた。

「ミンメイ、もう少しでコンテストが始まるけど大丈夫なのか?」「うーん……何か緊張して来た……ちょっとトイレ……」「あいやまた行っちゃつたよ……本当に大丈夫なのか……これで三回田だぞ……」

カイフンがミンメイの消えた先を見ながら呟くのと同時に外からけたたましい轟音が鳴り響き、強い揺れが控室を包み込んでいた。

第2話 フーピー・トラップ（その6）（後書き）

今回、ミンメイとカイフンは劇場版同様兄妹の設定です。

本当はTV版仕様で反戦活動家として出演させて、地球の守護神たるヤマトに反感を持つ人物にしたかったのですが、ストーリーがややこしくなるので止めました。

次回、一条輝とロイ・フォックターがやっと登場…
輝は最初から軍人として登場です。

第2話 フーピー・トラップ（その7）

同日 9:31 南アタリア島基地格納庫

『デルタ1より基地航空隊へ！現在本艦は異星人と交戦中です！速やかに各機体の出撃準備を済ませ、直ちに出撃して下さい！』

マクロスメインブリッジの未沙からの指示により、新鋭可変戦闘機のバルキリーVF-1が出撃準備を急いでいた。

中でも航空部隊長である、ロイ・フォッカーはこれまで数多くの敵機を撃墜してきたエースパイロットであり、かつてはヤマトにも乗り組んでいた猛者でもあった。

（久しぶりの戦闘か……まだ腕は鈍つて無いだらうな……）

フォッカーがそんな事を考えていると、機内のモニターにこの度連邦軍に入隊したばかりの一条輝からの通信が入っていた。

『先輩！何か緊張して来ました！大丈夫ですかねえ？』

「下手に緊張しても仕方ね～だろ輝！もづきょつとリラックスしろ！」

『は、はあ……』

輝がなおも不安気なまま返事をすると同時に、再び未沙からの通信が入つて来た。

『こちらテルタ1！スカル大隊は直ちに出撃して下さい！』

「了解！スカルリーダーより各機へ！聞いての通りだ、これより出撃する！」

「了解！！！」

第2話 フーピー・トラップ（その8）（前書き）

未沙の父、早瀬提督の登場です。

マクロスTV版では「提督」の肩書を持つてたものの、実際艦隊を率いるシーンは無でした。

今回は、土方さんの後任として地球艦隊司令にしましたが、実力のほどはいかに……

第2話 フーピー・トラップ（その8）

同日 9:40 月軌道周辺

「ワープ終了！現在位置、月軌道より10宇宙キロ地点です！」

改アンドロメダ級戦艦ブルーノアを旗艦とし、ドレッドノート級戦艦を中心とする連邦軍主力艦隊は土星空域からのワープ終了と同時に情報収集を開始していた。

その旗艦ブルーノアのメインブリッジでは、未沙の父で艦隊総司令である早瀬 隆司中将が現時点での状況報告を見て溜息をついていた。

（…………しかし、マクロスが先制攻撃をかけたと言つのはどうこう事だ……以前の会議で決定された事を忘れてた訳ではあるまい……）

この時点で、マクロスの旧システムが勝手に作動を始めた事を早瀬は知る由もなかつた。

「提督、第1軌道艦隊旗艦ヤマト艦長古代大佐から通信が入つてます！」

「分かった、メインに繋いでくれ。」

通信員が操作すると、パネルには古代の姿が映し出されていた。

『お久しぶりです早瀬提督、お元気そうで何よりです！』

『うむ……ところでそちらでもキヤッチしていると思うが、敵の出

方が分からん……」こはひとまず様子を見てからだ……マクロスが無事に大気圏外に出るまでは充分警戒するよつに……』

『了解です！また何かありましたらこちらから連絡します！』

パネルから古代の姿が消えると同時に観測員からの緊張した報告があつた。

「提督！南アタリア島に敵の地上部隊が上陸！基地守備隊と交戦の模様！」

第2話 フービー・ラップ（やの8）（後書き）

劇中登場した改アンドロメダ級戦艦は、「ヤマト2」に登場したアンドロメダを拡大改良したもので、主な武装は「1連マルチモード波動砲」です。これは拡散・集束モードを任意で選択できると言つて、ある意味優れた兵器の一つです。

アンドレッジノート級戦艦は、「復活編」に出ていた主力戦艦を拡大したもので、この戦艦にもマルチモード波動砲が装備されています。

次回、やっとマクロス発進ですが……

第3話 スペース・フォールド（その1）（前書き）

「ヤマト3」に一度だけ出ていた揚羽会長の登場です。この人、これから度々出で来ますが、かなりのトラブルメーカーになりそうな予感……

第3話 スペース・フォールド（その1）

A · D · 2 2 0 5 6 · 3 9 · 4 4 マクロスメインブリッジ

マクロスメインブリッジでは、発進準備と島内にいる市民の避難状況の対応に追われていた。そんな慌ただしい状況の中、一人の男がブリッジ内に入つて来た。

「グローバル君、一体いつになつたらこのマクロスは飛ぶんだね！」「これはどうも揚羽会長…」

揚羽会長は入るなり、持つていした葉巻にライターの火を点けようとした時、シャミーが自席から立ち上がり叫んでいた。

「申し訳ありませんが、ここは全面禁煙ですッ！！」

揚羽会長はシャミーをジロリと睨むとグローバルに言い放つていた。

「グローバル君、こここのクルーは教育がなつとらんな！来客に對して口の聞き方が悪いぞ！」

「はあ……ですが……」

「言い訳は聞かんぞ！第一、この艦は我が揚羽コンツェルンが心血を注いで建造したのだ！南部重工で作られた出来損ないのアンドロメダ級やドレッドノート級…廃艦寸前のヤマトとは違うのだよ！もし私が連邦軍司令長官ならば、これらのクズ鉄艦はさつと廃棄してマクロス級を数多く建造して……」

揚羽会長の発言を黙つて聞いていた末沙が口火を切つて反論していた。

「演説の最中申し訳ございませんが、本艦は現在警戒態勢の最中です！直ちにここから退出して頂けますか！？」

末沙の発言に揚羽会長は臆する事もなく、彼女を睨みながら反論に転じていた。

「貴様！口の聞き方がなつてないぞ！事と次第によつては貴様を含めたこの艦のクルーを全員クビに出来るんだぞ！名前を名乗れ！」

「…………早瀬末沙…………中尉であります。」

「早瀬…………あの連邦艦隊提督の…………娘！？」

末沙の名前を聞いた揚羽会長は言葉を失つていた。それに追い撃ちをかけるようにグローバルが切り出していた。

「…………とにかく、我々は発進準備中です。一般市民を守るのが我々の任務ですから。今ここでクビを切られれば、マクロスは発進出来ませんぞ！ここはとにかくおとなしくお待ち願えますかな？」

グローバルのその一言に揚羽会長はすゝりすゝりとブリッジを後にしていた。

第3話 スペース・フォールド（その2）

同日 9:51 地球衛星軌道

地球の衛星軌道周辺に接近していたゼントラーディ艦隊旗艦のブリッジでは、ブリタイとエキセドルが地上に展開中の部隊から送られて来た映像に見入っていた。

「一体何だ……この規律性のない土地の使い方は……全くの未開種族らしいなこの星の住人達は……やはりここに潜んでいたのかあの艦は……」

「はて……私の記憶にはあのタイプの艦には見覚えがありませんが……」
「何！？記憶に無いだと……記録参謀のお前がか？」
エキセドルのその発言にブリタイが驚いていると、レーダー要員から報告が入った。

「艦隊後方よりミサイル群多数接近中！」

「直ちに迎撃せよ！」

このミサイル群は月軌道周辺に展開中の地球連邦主力艦隊より発射されたもので、ヤマトの装備している波動エネルギートリッジ弾を改良し射程距離を大幅延長した代物であった。ゼントラーディ艦隊の一部は波動エネルギーの熱効果により大爆発を起こし、消滅していった。この様子を見ていたブリタイとエキセドルはしばらくの間、言葉を失っていた。

「な、何だ……今のは……」

「ま、まさか……幻と言われる反応兵器では……」

「馬鹿な……こんな未開種族が失われた修復技術や反応兵器を保有しているなどとは信じられん！」

「これはまだ相手を一方的に殲滅する訳にはいかなくなりましたな……ここはとにかく調べる必要が出て来たようですね……」

第3話 スペース・フォールド（その3）

同日 9:55 マクロスメインブリッジ

その頃、マクロスメインブリッジでは、発進準備が次第に整いつつあつた。

「メインエンジン、間もなく最大出力に到達…重力制御システム作動開始！」

「早瀬君、島内の市民の様子はどうかね？」

「はい！現在の所、95パーセントまでの市民がシェルターに待避しているようです！」

「そうか…島の人々が無事に待避完了してくれればそれでいい……」

「重力制御システム、最大出力に到達しました！」

「よし！マクロス浮上開始！」

「了解！マクロス浮上開始します！」

全長1500m、総重量2000万tの巨体は15年振りに大地を離れ、遙かなる空へとその艦体を向けようとしていた。だが艦自体に大きな揺れを生じるとブリッジクルーは床面に投げ出された。

「な、何があつたんだ！？」

グローバルが叫ぶと同時に、未沙が信じられないといった表情で前方を凝視していた。

「艦長！重力制御システムが…」

グローバルが艦首方向に目をやると、甲板を突き破り数本の重力制御システムが回転しながら空へ上昇していった。

「こんな馬鹿な事が… 総員ショックに備えろー地面に叩きつけられるぞ！」

グローバルが叫ぶと同時に、マクロスはもの凄い轟音とともに地表に叩きつけられていた。

「全員……怪我は無いか…？」

「はい……何とか…」

「とにかく、本艦の被害状況を調べてくれ……全くこの艦は酷い艦だな…」

「宇宙から落ちてきたものを拾つて使つかうです…」

第3話 スペース・フォールド (その4) (前書き)

一条輝とコン・ミンメイの初めての出会いです。

第3話 スペース・フォールド（その4）

同日 10:01 南アタリア島市街地

ゼントラーディ軍の攻撃により、市街地はもはや瓦礫と化していた。その中をミンメイはひたすら走り続けていた。シェルターに避難する途中、忘れ物に気付いた彼女は兄のカイフンと叔父夫婦に先に行くよう頼むと、進宙式会場にあるミス・マクロスコンテスト控室に戻っていた。

控室にたどり着き、化粧台の上に置き忘れた一枚の写真を手に取り持っていたポーチの中に入れたミンメイは、すぐに外に出てシェルターに向かおうとした時、バトルポッドの一群に取り囲まれてしまつた。

（ 私、もう駄目かも……）

ミンメイがそう思った時、一機の戦闘機が現れてたちまちのうちにそのバトルポッド群を撃破していた。その戦闘機のコクピッドが開くとパイロット……一条輝がミンメイに声を掛けていた。

「大丈夫ですか!? 早くこれに乗つて下さい……」

「えつ……でも……」

「いいから早く! 敵がまたやつて来るんだ!」

輝の催促にミンメイが従い、ナビシートに座ると前席の輝が自分のヘルメットをミンメイに手渡した。

「あの~私がこれを被つたらあなたはどうするの?」

「僕は大丈夫！すぐに発進するからしつかり掴まつて！」

輝がそう言つと同時にいきなり一機のバトルポッドが現れ、彼のバルキリーに攻撃を加えていた。輝はすぐに回避したものの、ビルの残骸に機体を打ちつけてしまつた。それでも輝はガトリング砲を撃ち続けると、ようやくそのバトルポッドは崩れ落ちていた。

「フーッ……やつとの事で撃ち落としたよ……それより後ろの女の子、大丈夫かな……」

輝が後ろに手を向けると、ミンメイは先程の衝撃で気を失つていた。
「ありや……氣絶しちやつてるよ……仕方ない、とにかく近くのシェルターに連れて……え、ええつ！？」

先程撃墜したはずのバトルポッドの中から身長10m以上はあるかと思われる宇宙服を着た巨人が現れていた。

（……やつぱり……以前士官学校で教えられた通りだ……つてそんな場合じゃない！）

輝は反射的にガトリング砲のスイッチに手を伸ばし、押そうとしたものの反応がなく弾切れである事によつやく気付いていた。

「や、やつぱ～！」

輝がそう叫ぶのと、その巨人が輝のバルキリーに襲いかかるのと同時に一髪で駆け付けたフォッカー機のガトリング砲が火を噴き、その巨人はその場で息絶えた。

「せ、先輩！ありがとうございます！」

「なーに、いいって事よ…………しかし…………ここまで“奴ら”が俺達人類にそつくりとはな…………」

第3話 スペース・フォールド (その4) (後書き)

次回、ヤマトキャララとマクロスキャラの本格的な絡みですが…ひとつなる事やう…

第3話 スペース・フォールド（その5）

同日 10:15 マクロスメインブリッジ

「技術部より報告です！重力制御システム再設置完了！並びに破損箇所の修復も完了したとの事です！」

「よし！直ちに発進準備を再開してくれ！」

グローバルの決断に未沙が不安気な表情で切り出していた。

「艦長、今度は大丈夫でしょうか……」

「心配する事はない……今度設置した物は地球上で製造された物だ早瀬君……いたずらに心配しても始まる訳でもあるまい……」

「そうですね……あ、連邦軍本部より入電です。“当艦は、大気圏外にて待機中の第1軌道艦隊と合流せよ”との事です……」

「分かった。それでは本艦は直ちに発進する！バルキリー隊に直ちに集結するように伝えてくれ！」

「了解！マクロス発進します！」

さすがに今度は何事もなく、マクロスはその巨体を浮上させ宇宙へと進路を向けていった。

同日 10:20 南アタリア島上空

輝とフォックターの一機のバルキリーはマクロスからの通信で、南アタリア島市街地から飛び立ち今は上空6000m地点を飛行中である

つた。

「先輩！マクロスが第1軌道艦隊と合流するって言つてましたけど、確か旗艦は…」

「そうだ！ 地球の危機を何度も救つたあのヤマトだ！ そして昔、俺が乗つていた艦でもあり、お前が乗艦を希望していた艦だ！」

「何処の誰かは知りませんけど、余計な事をしてくれたおかげでマクロスに乗る羽目になっちゃいましたけどね！」

輝のその一言のおかげで今まで氣を失つていたミンメイが目を覚まし、辺りをキョロキョロと見ていた。

「あの…………」は今何処なんですか？」

「あ、やつとお田代め？ 当機はただいまマクロスに向けて飛行中！」

「えへへへっ！ ？ 島には帰らないんですか～～～？ ！ 島のシェルターには私の兄と叔父夫婦がいるんですけど～～～！ ？」

不安気に輝に尋ねるミンメイに通信を聞いていたフォックナーが、彼女を安心させるように諭していた。

『シェルターなら問題無い！ あそこなら水素爆弾が落ちようが隕石が落ちようが大丈夫だ！ 戦闘が終わつたらこの私が島まで送つて行きますよ…』

「その方が余計危険ですが先輩！ ？』

フォックナーの発言にすかさず輝が突つ込みを入れると、当のフォックナーは咳払いをして輝を睨み返していた。

『あ～輝～！ 何か言つたか！ ？』

『い～え！ 別に何も！ …… あ、先輩！ 第1軌道艦隊が見えて来ま

したよー!』

輝が話題を逸らすとすぐやじまで、ヤマトを始めとする第1軌道艦隊が姿を現していた。

『よーしー。ちょっとやらヤマトの連中に挨拶でもしどくか!……こちらDF-1マクロス航空隊所属、スカル大隊のロイ・フォツカーだ! ヤマトの連中、聞こえるか!』

第3話 スペース・フォールド (その6) (前書き)

輝と未沙の初遭遇です。

第3話 スペース・フォールド (その6)

同日 同時刻 ヤマト第1艦橋&アマ・マクロスメインブリッジ

その頃、ヤマト第1艦橋では接近していくマクロスの姿をメインパネルに映し出していた。

「いやあ～でっかいよな～ヤマトもでかいと思つてたけど、いつやつて見るとマクロスもかなりでかいよな～～！」

砲術班長の南部康雄がメインパネルを見ながら溜息をついていると、隣席の相原がマクロスからの通信をキヤッチしていた。

「艦長！マクロスのグローバル艦長から通信が入っています！パネルにチョンジします！」

相原が操作すると、メインパネルにはグローバルの姿が映し出されていた。

「お久しぶりですグローバル参謀次官……あ……すいません艦長！」

古代が慌てて言い直すと、グローバルは苦笑しながら切り出していた。

『いや構わんよ古代君……何しろ参謀本部に長く居過ぎたおかげで現場に慣れないで無理も無い……』では経験の長い君の指揮に従つつもりだ。よろしく頼む……』

「い、いえ……」じりじりとよろじくお願ひします！

この一人の会話を聞いていたマクロスメインブリッジのシャミーはキムにこいつそりと話し掛けていた。

「やつぱりいー古代艦長つて格好いいわーーファンになっちゃいそーー！」

「あんたねえ……こんな時に何言つてんのよ……」

「だつてえー格好いいのは確かでしょー？ いつその事ファンクラブ作っちゃおうかな？ 当然会長はこの私で決まり！」

「はいはい……勝手にすれば……」

そんな中、ヤマト第1艦橋にフォッカーからの通信が入つて来ていた。

『「じゅうじゅうマクロス航空隊所属、元ヤマト艦載機科クルーのロイ・フォッカー少佐だ！ ヤマトクルーの諸君、元氣か！？』

ヤマトのメインパネルにはフォッカーの姿があつた。第1艦橋の一同は思わず呆然とした表情で彼を凝視していた。

『「よつ古代ー相変わらずだな！ 元氣にしてたか！？」』

「フォッカー、お前まだ現役の戦闘機乗りをしてるのか！？ 何処かの艦の艦長か教官でもやつてるのかと思つてたが……」

『「なーに、前にも言つた事があるだろうが！ 僕は生涯一パイロットでやつて行くつもりだつてな……ところで話は変わるが……古代、ゆうベコキちゃんと……シタのかー？」』

フォッカーの発言にヤマト第1艦橋一同は元より、マクロスメインブリッジの一同の表情は凍りついていた。中でも三人娘は顔を手で覆いながら叫び、グローバルは思わず椅子からずり落ち、クローディアは内心舌打ちをしていた。

ヤマト第1艦橋では、ユキがこれ以上無いくらい顔を真っ赤にしながら艦長席の古代を見ると、普段着用しない艦長帽を田深に被っていた。

この様子をフォッカーは自機のモニターで見ながら思っていた。

（図星だな古代の奴……相変わらず分かりやすい男だ……こにはとにかく話題を変えるか…）

『そ、うだ、俺の部下を紹介しよう！今度ウチの部隊に配属された新人だ！』

『初めまして！スカル大隊所属の一条輝少尉であります！古代先輩の事はフォッカー先輩からよく聞いています！』

輝が敬礼していると、ナビシートにいるミンメイが身を乗り出していた。

『あ～っ、古代さんん！お久しぶりで～す！お元気ですか～！』

『ミンメイ！？何で君がそこにいるんだ～？』

『あははっ！それは～色々あります～』

『ちよつとミンメイ！何が“あはは～”よ～あなたご両親に……』

ユキが身を乗り出して発言しようとした時、未沙が通信に割り込んで来た。

『 いわば「 ルタ 1 」スカルリーダー並びにスカル 1 1 番機、着艦していないのはあなた方だけです！ 早くアームド 0 1 に着艦して下さい！ 』

『 先輩、誰ですか？ 』の おばさん ？

『 お… おば… ！ 』

輝の発言に未沙が絶句して 『 』 と フォッカー が笑いながら説明していました。

『 マクロス航空管制オペレーター の 早瀬 未沙 中尉 さ… しかし、早瀬も輝から見ればただの おばさん か… ！ 』

フォッカー の発言で、 ヤマト と マクロス の 両 クルー は 呆氣 にとられていた。 未沙 は 咳払い をして 指示 を何とか出していた。

『 とにかく！ 無駄話してな いで さっそく 着艦 して下さ い！ 』

『 了解！ 指示頼ん ます よ、お・ば・さ・ん！ 』

『 了解！ そちらも死なない程度に 気をつけて… それから 古代艦長！ あなたも指揮官 さ しくして下さ い！ それでも 荣光ある ヤマト の 艦長 ですか！ ？ 』

『 …… 了解しました、早瀬 中尉 … 』

通信が切れる と、 古代 は どつと 疲れた 表情 で思つて いた。

（ はあ …… 疲れた …… これだからお 固い 女つて …… あれで ユキ より 年下つて 信じられる かよ …… ）

第3話 スペース・フォールド (No.6) (後書き)

輝の末沙に対する「おせさん」発言でした。でも、マクロスTV版放映当時にこの二人が愛し合つ関係になると誰も思ってなかつたはずです。

第3話 スペース・フォールド（その7）

同日 10:25 衛星軌道上ゼントラーティ艦隊旗艦

「敵大型戦艦、惑星軌道上に展開している艦隊と間もなく合流する模様！」

ゼントラーティ艦隊旗艦のブリッジでは、観測員がブリタイに報告していた。

「いかが致しますかブリタイ司令？」

エキセドルが、先程から腕組みをしたまま前方のパネルを凝視しているブリタイに切り出していた。

「うむ……あの大型戦艦には興味がある……ただ潰すには勿体ない……よし……あの戦艦を手に入れよう……その前に邪魔な敵艦隊を叩く！全艦隊砲撃用意！ただし、戦艦には当てるな！」

ブリタイの指示の下、展開していた艦隊から砲撃が開始されていった。

同日 同時刻 ヤマト第1艦橋

「高熱源体多数接近！敵艦隊からの砲撃です！」

「キの報告に古代は即座に反応していた。

「全艦隊！急速回避！島、右舷下方に転舵！」

「了解！右舷下方に転舵！」

島の的確な操作で、ヤマトは何とか危機を乗り切ったものの、第1軌道艦隊の半数以上の艦が砲撃で撃沈されていた。

「本艦の被害状況は！？」

『左舷装甲板大破！』

『左舷パルスレーザー3番、6番大破！！』

「機関室！被害は無いか！？」

機関長席の山崎奨が機関室に連絡を入れると、即座に副長の徳川太助から連絡が入っていた。

『波動エンジンには異常ありません！』

真田はとくに出て来たデータをチェックしていた。

「うむ……不思議だな……あれだけの砲撃にも関わらず、マクロスには直撃弾がない……もしかしたら敵はマクロスを無傷で手に入れるとつもりらしい……」

同日 10:29 マクロスメインブリッジ

マクロスでも同様の報告がなされ、グローバルはしばらく考えた後命令を下していた。

「クローディア君！進路を南アタリア島に向けてくれ！島に着陸すると見せかけて上空で空間転移に入る！」

「空間転移……フォールドですか？！それも上空で…？まだテストもしていらないのに…？」

「やむを得ないだろ？…このままでは敵にやられるだけだ！」

「でもこのシステムは異星人のものですよ！我々にはまだ未知の部分が…」

「クローディア君！最初はみんなそうだ！かつてイスカンダルから提供された波動エンジンだつてそうだつたじゃないかね！？」

「了解しました…」

押し問答の末、クローディアは渋々了解し、フォールドの準備に入つた。

「全艦非常態勢！本艦はこれよりフォールド航行に入る…テフォールド地点は月軌道周辺に設定します！」

「動力システムチェック！降下態勢に入る！」

「ヴァネッサ君！ヤマトの古代艦長に打電してくれ！“本艦はこれより島上空でフォールド航行に入る。それまでの護衛を頼む”と…」「了解！」

マクロスは再びその艦体を南アタリア島に向け降下を始め、やや遅れてヤマト率いる第1軌道艦隊も降下を開始した。

「フォールドシステム作動まで後3分！現在位置、島上空3000m！」
「島上空2000mでフォールドを開始する…」

やがてマクロスは目標地點である島上空2000m地點に近付きました。

「フォールド突入秒読み開始…5、4、3、2、1、ゼロ…フォールド突入！」

マクロスを中心に赤い光が広がりつつあった。それは南アタリア島を包み、上空を護衛していた第1軌道艦隊も包み込み、その光は全てを巻き込んだまま消え失せて行つた。

同日 10:40 衛星軌道上ゼントラーティ艦隊旗艦

マクロスがフォールドした様子は、遠く離れたゼントラーティ艦隊でもキャッチしていた。

「な、何だ…地上付近でフォールドするとは…」
「さあ…彼らは何を考えているやう…」
「とにかく奴らのデフォールド地點を割り出せ…」
「了解しました！」

第3話 スペース・フォールド (その8)

同日 11:01 マクロスメインブリッジ

宇宙空間にそれは突然現れた。フォールドを終了したマクロス、南アタリア島、第1軌道艦隊がそつくりそのまま出現していたのであつた。

マクロスメインブリッジでは、一時的に気を失っていたクルーがようやく目覚めていた。

「ゼ、全員無事か…？」

「はい…何とか…」

グローバルが未沙に尋ねると、彼女はふらつきつつ前方に目をやるとそこにはいるはずの無い第1軌道艦隊が姿を見せていた。

「艦長！ 前方に第1軌道艦隊が…おそらくフォールドの巻き添えになつたと思われます！」

「何だと…？ そんな馬鹿な…？」

グローバルが信じられないといった表情で前方を凝視していると、ヴァネッサが報告を入れていた。

「艦長！ 本艦下方に物体が…」

「当然だろ…ここは月面基地上空だ…」

「いえ…それよりも小さな物で…とにかくパネルに投影します…」

メインパネルに映し出されていたのは南アタリア島…それも周囲を

凍りついた海水が浮遊していた。誰が見てもマクロスのフォールドが全てを巻き添えにしたのは明らかであった。

「それにしてもこんな事になるとは……連邦軍本部とは連絡はついたのかねシャミー君？」

「何度も呼びかけてはいるんですが繋がらないんです……」

「通信機器の故障ではないのかね？」

「いえ……第1軌道艦隊の各艦とは連絡がついています……」

グローバルとシャミーの会話にキムも加わり現状報告していくと、ヴァネッサが信じられない表情で加わっていた。

「あの……現在位置が判明したんですけど……」

「それで……今の位置は！？」

「それが……バーナード星系とアルファ星系のほぼ中間地点かと……」

「ええ！？ そんなあ～」

「だからフォールドなんて……」

「艦長！～」

「」

シャミー、クローディア、キム、未沙が口々に叫びとグローバルは一同を制していた。

「まあ待ちなさい。ここまで来れたんだ、もう一度フォールドすれば必ず帰れるはずだ……」

その時、艦長席のインター・ホンが鳴り響きグローバルが出てしづらか話していたが、やがて気落ちした様子で受話器を下ろしていた。

「機関室からだつたのだが……フォールドシステムが消滅したそうだ

…おまけにメインエンジンの出力が上がらんそつだ…

「そ、そんなあ～」

「消滅つて…艦長…」

シャミーとキムが次々叫び声を上げると、未沙がそれを制していた。

「キムにシャミー、まだ望みはあるわー・マクロスがフォールド出来
なくとも第1軌道艦隊はワープ出来るはず…だからあの人達にワー
プしてもらつて地球にある予備のシステムを取りに行つて貰えれば
…」

未沙がそこまで言った時、ヤマトから通信が入つていた。グローバ
ルが一連の出来事を古代に話していたものの、続いて彼が衝撃的な
発言をしていた。

『実は…ヤマトを含めた第1軌道艦隊の波動エンジンの出力が上
がらないんです…その原因が不明でワープ出来ず…切り札の波動砲
も発射不能で…』

「そ、そんなの嘘でしょ…」

「それじゃ地球に…」

「帰れない…」

三人娘が口々に叫ぶのを聞きながらグローバルは溜息をつきつつ咳
いていた。

「長い旅に…なりそうだな…」

第3話 スペース・フォールド (その8) (後書き)

フォールド失敗の巻き添えを喰らい、ワープも出来ず切り札の波動砲も撃てなくなつたヤマト……

という設定にしました。

一度くらい伝家の宝刀を使えなくとも構わないかと……

できればこの状態でラストまでお送りします！

古代進

「それだけは勘弁してくれ~」

第4話 リンボス・エクスプレス（その1）

A · D · 2205 6 · 3 12 · 46 地球衛星軌道上ブリタ
イ艦

地球衛星軌道上では、ブリタイ艦隊が今だ居座りを続けていた。近くには監視を続けている地球連邦艦隊が航行し、それを横目に見ながらブリタイは南アタリア島で繰り広げられた戦闘映像をチェックしていた。

「これは……この星の住人はマイクローンではないか！？」

「はい、そのようですね……どうやら我々は来てはならない場所にたどり着いたようです……」

「それはどう言つ事だ……？」

「“手を出してはならぬ場所には近付くな、手を触れたる者は必ず滅びる”と言い伝えが古くからあります。我々はもうこの星には関わらない方がよろしいかと……今後はあの戦艦だけにターゲットを絞るのがよろしいかと……」

エキセドルの忠告をブリタイは受け入れる他なかつた。下手に手を出せば自分達が滅びると思ったからであつた。

「とにかく、例の戦艦だけを追撃した方が良さそうだな……奴らのデフォールド地点は分かつたのか？！」

「はい、ここから約5光年離れた星系にいるものと思われます！」「よろしい！全艦隊直ちにフォールド開始せよ！」

ブリタイの指揮の下、ゼントラーディ艦隊はすぐさまフォールドして行った。

同日 12:51 地球衛星軌道上旗艦ブルーノアブリッジ

「敵艦隊、全艦フォールドした模様！」

旗艦ブルーノアブリッジでは、レーダー要員が早瀬提督に伝えていた。地球本星に手も出さずに早々に姿を消した謎の艦隊の行動に違和感を感じつつ、早瀬提督は内心安堵の表情を浮かべていた。

「マクロスの消息は分からぬのか？」

「はい……それに第1軌道艦隊と南アタリア島とも連絡がつきません……」

通信員の報告に早瀬提督は深い溜息をついていた。マクロスに乗っている娘の末沙の事を何よりも心配していた。

（こんな事になるのならマクロスに配属せぬのではなかつた…末沙…とにかく無事でいてくれ……）

第4話 リンボス・エクスプレス（その1）（後書き）

次回、雑誌「マクロスエース」に連載中のリメイク版マクロスに登場している技術士官のジーナ・バルトロウ少佐が登場！真田さんと一緒に何かやらかすかも！？

そしてあの名せりふが出てきます！

第4話 リンボス・エクスプレス（その2）

A · D · 2 2 0 5 6 · 3 1 7 · 1 4

マクロス艦内大会議室

太陽系から5光年離れたその場所では、マクロスを中心にしてヤマト率いる第1軌道艦隊が南アタリア島の残骸の回収作業を行っていた。また、島内にあつたシェルターに避難していた延べ8万人もの民間人もマクロスに収容されており、同艦と第1軌道艦隊の将兵と合わせると何と10万人規模の大所帯となっていた。

将兵はともかく、民間人の扱いをどうするか

マクロス艦内の大会議室では第1軌道艦隊各艦の艦長、並びに各セクションのスタッフが議論を交わしていた。

中でも、進宙式典に出席してフォールドの巻き添えになつた揚羽コンツェルン会長の揚羽蝶人は、強硬に地球への帰還を主張していた。

「……であるから、先程から何度も申し上げるように、一刻も早く地球に帰らなければならんのだ！お前達は何故それが分からんのだ！」

上から目線の揚羽会長の発言に、各艦の艦長は辟易としていた。

現場の苦労も知らないエリートがその場を搔き乱すのは止めるべきだと進言しようつものなら、かえつて彼の怒りを買つため誰も発言を控えていた。

そんな中、今まで会議の席で端末を操作していた真田が沈黙を破り、

揚羽会長に切り出していた。

「会長、今すぐ地球に帰り着きたいお気持ちは分かりますが、ここはとにかく一番近いアルファ星系のリンボスに進路を取りましょう。ここからなら一ヶ月半で到達出来ます。そこでエンジンの修復をすれば地球には一ヶ月目に帰り着きますがね…」

真田の発言に揚羽会長を除く一同が感嘆の声を上げていた。だが揚羽会長は納得せず、反論に転じていた。

「……と言つ事は、あの企業に修復作業を依頼するとでも言つ事がね？我社の最大のライバルである“アナハイム・エレクトロニクス”に……冗談ではない！敵に塩を送るとしても言つのか！？我社が心血を注いで建造したこの艦を他社に修復をせるとでも言つのかね！？グローバル艦長、君の意見はどうかね！？」

揚羽会長に意見を聞かれたグローバルは既に態度を決めていたらしく、即座に切り出していた。

「私としては、アナハイムに頼つても構わないと思いますがね。この際自社がどうの、他社がどうのと言つてはいる場合ではありません。利用出来る物はしたほうがいいと私は思いますが？」

「私もグローバル君の意見に賛成だな…」

そう発言したのは、やはり進宙式典に出席し揚羽会長同様騒ぎに巻き込まれた連邦軍司令長官の藤堂平九郎であった。

「……とにかく、議論していくは何も始まらん…」これは一致団結しなければならんのですよ会長…

「……分かった……君らの好きにすればいい…」

ようやく揚羽会長の了解が得られると、藤堂は真田に切り出していた。

「早速だが真田君、アナハイム社に連絡をとってくれるかね？」

「大丈夫です長官！ 実はこんな事もあろうかと、先程アナハイムには連絡をしておきました！」

この真田の発言を聞いていた古代は内心ガツツポーズをとりながら思っていた。

（さすが真田さんだ……いつも一步先を見据えている……これなら何とかなりそうだ……）

第4話 リンボス・エクスプレス（その3）

同日 18:28 マクロス艦内技術開発部

その頃、マクロス艦内にある技術開発部では一人の女性技術士官が目前のパネルに映し出されたマクロスの全体図を前にして何かを計算していた。

そこに会議を終えたグローバル、古代、真田の三人がやって来た。

「どうかねバルトロウ技師長、主砲は使えそうかね？」

グローバルに尋ねられたその女性技術士官…ジーナ・バルトロウ少佐は三人に敬礼すると、パネルに目をやりながら説明を始めた。

「はい…結論から申し上げると現状のままでは発射は不可能です…これを見て頂くと分かりますが、メインエンジンと主砲発射システムの間を特殊金属のパイプがフォールドシステムを介して繋がつていた訳ですが…」

「そのフォールドシステムの消滅で主砲が撃てなくなつた…と言う事ですね。」

ジーナの発言を古代が繋ぐと、彼女は頷きさらに続けた。

「ええ…これ程大きなエネルギーパイプの予備は艦内工場でも作れません…ですが、マクロスの船体がいくつものブロック構造で構成されているので、これを利用します…」

ジーナがパネルに映し出していたのは、各ブロックを組み替え、戦

艦の形から巨大な人型へと変わっていく映像であった。古代はこの映像を見て思わず口に出していた。

「何かこれ……大昔のロボットアニメに出て来そうですね……」

「古代艦長がそう思うのも無理ありませんわ……あれこれ動かしたらまたまこうなっただけでして……今後はこの変型を“トランسفォーメーション”と名付ける事にしました。」

「しかし……主砲を撃つ度にこれを行うのはいいが……これから建設する市街地に多大な被害が及びのではないかね？」

心配顔のグローバルに、ジーナは余裕の表情で答えていた。

「大丈夫です！多分こんなこともあるんじゃないかと思つて、市街地の建設は被害を少しでも出さないようにと企画しています！あ、それと単に主砲と言うのはつまらないので、勝手に“マクロス・キヤノン”とネーミングしました！」

「ま、まあ……君が名付けたのならそれでも構わんよ……」

グローバルが苦笑しながら答えていると、古代の携帯電話が鳴り響き、しばらく話した後血相を変えて走り出していた。

「おい古代、どうした！？」

「今ユキからだつたんですが、避難民の中にユキのご両親がいたんですね！これから会いに行つてきますんで後の事はよろしくお願ひします！」

第4話 リンボス・エクスプレス（その4）

同日 18:40 マクロス艦内

「あ、古代君…」

大勢の避難民で溢れ返つてゐるマクロス艦内の中で、ユキはよつやくたゞり着いた古代に手を振つていた。

「ユキ、どうして船の『両親が』ここに？」

「私達マクロスのフォールドに巻き添えになつたこと、一応ママ達に連絡しておこうと思つてダメ元でケータイからメールしたの…そうしたらすぐ返事が返つて来て“この艦に乗つてゐる”って…」

二人が話してゐるそばから、ユキの両親…森 浩一と晴美が近付いて來た。

「おや進君、君もこの船に巻き込まれたのかね？」

「は…僕とユキはヤマトに乗つていて、この艦のフォールドに巻き込まれてしまつて…と書つてお一人がここに…？」

古代の間に浩一が答えるとすると、晴美が凄まじい勢いで話し始めていた。

「やうなの…パパの退職記念に世界一周しようつたことで一ヶ月前から世界中見て回つて！パリにローマ、ロンドン、ニューヨーク…それで最後の締めに南アタリア島のマクロスを一度でいいから見た

いと思つて立ち寄つたのよ！以前から宇宙戦艦を間近に見てみたくてユキに何度もヤマトを見せてくれつて言つてゐるのに、この娘つたら全然……」

「ちょ、ちょっと待つてママ！前から言つてるでしょ！？ヤマトを始めとする艦船は原則として一般公開してないの！マクロスの場合は、たまたまああいう状態だつたから仕方ないんだけど……それよりもさつきの旅行の件、私全然聞いてなかつたんだけど？」

「あら？ そだつたかしら？ 私はあなた達の家にメールしたはずだけど……もしかして家のパソコン、見てないの？」

「あ……もしかしたら見てないかも……」の所残業続きで帰りが遅くて、帰つてからはすぐ寝てたし、それに古代君もずっと宇宙にいたから……」

ユキは自分の行動を棚に上げ、母親の晴美を責めた事を反省し顔が赤くなつていた。

「ちよづどや！」に、ミンメイを連れたフォックナーと輝がその場にやつて來た。

「古代、じいにいたのか……わつも真田さんに聞いたらいじだつて言われたんでな……」

フォックナーが言つと、後ろからミンメイが申し訳なさそうな表情で古代とユキに切り出していた。

「古代さん、ユキさん……心配かけてすみませんでした……昨日、横浜の私の実家に行つたそうで……」

「ああ……でも良かつたよ無事でいてくれて……でもまさか君が家出す

るとは思つても見なかつたよ……」

「ホント……でもあなたのお母様なんか涙ボロボロじめじめしていらっしゃるわ
よ……」

コキの発言に、ミンメイの田から涙がこぼれていた。それを見ていた古代は自分のハンカチを渡しながら呟いていた。

「……とにかく、艦隊が無事地球に帰つたら、一度横浜の家に顔を
出した方がいい……その時は俺達もついて行くから……」

第4話 リンボス・エクスプレス（その4）（後書き）

ユキの両親、ヤマトパートナーで一度出て来ましたが、特に第10話で母親が何枚ものお見合い写真を見せて、ユキを困らせていたのが印象的でした。

ヤマトが地球に帰還した後、ユキが古代の事をじつじつと紹介し婚約まで漕ぎ付けたか…あの強烈な性格の母親をじつじつと説得したか、一度本編で見たかった…

第4話 リンボス・エクスプレス（その5）

同日 21:02 ヤマト艦長室

ヤマト艦長室で、古代は航海日誌を記入しつつ、今日一日で起きた出来事に想いをはせていた。

（……今日ほど色々あった一日は無かった…今朝自分の家で目覚めたら、夜にはバーナード星系とアルファ星系の中間地点…おまけに延べ10万人もの人々がいる…）の人々の命が俺の肩にのしかかると思うと…）

そう考へていると、目に見えないプレッシャーが艦長室の窓外から押し寄せて来るような感じであった。古代は思わず身震いし、デスクの上に置いてあるティー・ポットからレモンティーをカップに注ぎ、一息に飲み干していた。これは先程ユキが艦内食堂から持参したものだつたが、一人で考えたいからとユキを帰していた。

そのティー・ポットを見つめながら、再び物想いにふけっていた。

（以前の航海では、ヤマト単艦だったからヤマトクルーの事だけを考えていれば良かった…だが、今回の航海は10万人もの人々がいる…生半可な気持ちだけでは航海の成功はない…ここは僕が全てを掛けてやるしかない…あのイスカンダル遠征時の沖田さんの気持ちが良く分かる気がするよ…とにかく、誰かに頼つているのでは駄目だ…ここは自分の力だけでやって行こう…）

第4話 リンボス・エクスプレス（その5）（後書き）

古代のレモンティー好きは、他の一次小説でも有名なのでここでも取り上げました。それよりも、ユキの煎れるコーヒーは、完結編以降もマズかったのではないかと…復活編での別居の理由はひょっとしてそれもあつたりして（笑）

次回、やっとガンダムシリーズのキャラ登場です！

番外編（その3） 世界観設定 ガンダムシリーズ編（前書き）

ガンダムシリーズ編突入前の予備知識（？）です。

番外編（その3） 世界観設定 ガンダムシリーズ編

1 次回からの舞台、アルファ星系第4惑星リンボス、……ここに宇宙世紀ガンダムシリーズのキャラが揃っています。

2 出て来る作品は次の通り。

機動戦士ガンダム0080

ポケットの中の戦争

機動戦士ガンダム0083

スター・ダストメモリー

機動戦士ガンダム

機動戦士Ζガンダム

機動戦士ガンダムΖΖ

逆襲のシャア

……の5作品ですが、多分増えるかも？

（ちなみにシャアはクワトロ・バジーナとしてロンド・ベルにいます。）

3 この部隊はラー・カイラム、ネエル・アーガマ、アルビオンを中心とした艦隊です。
(ネエル・アーガマの艦長はヘンケンさんにしました。)

4 この部隊に敵対する勢力はネオ・ジオン。ただし単なるテロリストでかつてのジオン軍の栄光は微塵もなし！
(ティターンズも出ます)

5 ガンダムシリーズの艦船にも波動エンジンを搭載しているので、ワープは可能。ただし波動砲は装備してません。（理由については後ほど劇中で）

番外編（その3） 世界観設定 ガンダムシリーズ編（後書き）

うだうだ書いて来たけど、細かい所は劇中で後付けします。

次回、「ΖΖ」のジユドー達ガンダムチーム総登場！

第5話 シャンケリラ・チルドレン（その1）

アルファ星系第4惑星リンボス……ここは21世紀半ばに発見された、太陽系に最も近い人類が生存に適した惑星である。

当時既に100億の人口を抱えていた地球は、ようやく全世界の統一を果たし、ある程度の恒星間航行の技術を確立していた。

21世紀後半に人類の移住計画が進み、22世紀初頭には自治政府が発足、全ては順調に進んでいたが、22世紀後半に地球がガミラスからの攻撃を受け始めた頃から事態は急変していった。

ガミラスの遊星爆弾攻撃による放射能の汚染が進み、地下都市を築き防戦に追い込まれつつあつた地球本星をよそに、内戦が起きていた。

地球本星に残つた人類を受け入れるべく、建造を開始したスペースコロニー群を巡つて紛争が多発していた。

当初、紛争を治めるべく反対勢力の中の穩健派代表のジオン・ダイクンの元、話し合いを進めていた最中に何者かに暗殺され、後を引き継いだデギン・ザビが突如コロニーの独立を宣言、ジオン公国を名乗り更なる内戦へとエスカレートしていった。

ジオン軍は当初、人型機動兵器、モビルスーツを開発し、電撃作戦で戦況を優位に進めていた。

一方の連邦軍駐留部隊も同じ人型機動兵器を開発して対抗し、独立

機動艦隊ロンド・ベルの活躍と反撃に転じた連邦軍の活躍でジオン公国は敗北し、首謀者のザビ家は全員死亡して戦闘は終結。だが一部の残党は各地でゲリラ戦を起こして自治政府側を翻弄し、2205年現在でも今だ終息の兆しは見られてはいない。

第5話 シャンケリラ・チルドレン（やのー）（後書き）

この説明は、15セガンダムのナレーター永井一郎さん風で読んで下さい。（笑）

第5話 シャンクリラ・チルドレン（その2）

A · D · 2205 8 · 17 11 · 02 サイド1 シャンク
リラ「ロニー

「畜生！ネオ・ジオンの奴ら、何だつてこんな「ロニー」に攻め込むんだ！？」

ジャンク屋を嘗むジユドー・アーシタは、次々侵攻して来るネオ・ジオンのMS部隊に怒りを表わしていた。

彼はかつて仲間と共にロンド・ベルに参加してΖΖガンダムを駆り、歴戦の英雄アムロ・レイや、ティターンズからガンダムMK-を奪取したカミーコ・ビダンと共に戦っていた。

「一体連邦軍は何やつてんだ！？入り口にはMS隊がいたはず何だけど！？」

ジユドーの横でジャンク屋仲間のビーチャ・オレーヴがいらっしゃくながら呟くと、ジユドーはある決断を口にしていた。

「ひつなつたら俺が戦うしかないか…」

「でも、戦うつたつてZZはないんだろ…どーやつて戦うんだよ…」

…

同じジャンク屋仲間のイーノ・アツバーブが不安気に呟くと、ジユドーは平然とした表情で返していた。

「今、エルとモンドがジャンク屋仲間の所に行つていい…もうすぐ戻つて来るはずだ…」

言つた側からMSを積み込んだトレーラーが到着し、エル・ビアンノとモンド・アガケがトレーラーから出て来て、後部に掛けられたシートを取り去つた。

「ジユドー、あんたから頼まれたモン持つて來たよ！」

「何だよこれ、ジム・カスタムつて…おまけにガンタンクにザクが一機つて…せめてジエガンの中古でもあれば…」

「つべこべ言わない！これでも状態のいい奴持つて來たんだから！とにかくジユドーはジム・カスタムに乗つて！」

「分かつた！やるつきやねーな！モンドお前はガンタンク、ビーチヤとエルはザク にスタンバつてくれ！」

「ジユドー……何かその言い方、ブライトさんみたいなんだけど…」

モンドの突つ込みをかわしながらジユドーがジム・カスタムに乗り込もうとした時、妹のリイナが駆け込んで來た。

「お兄ちゃん！何でまた戦わなければならぬの！？」

「リイナ、危険だから下がつてろ！イーノ、リイナを連れてシェルターへ行け！」

「分かつた！氣をつけてな！」

イーノが嫌がるリイナを連れてその場所を離れると、ジユドーは口ピットの中で氣合いを入れていた。

「さて…そんじゃいつものやつりますか…ジユドー・アーシタ、ジム・カスタム行きまーす！」

第5話 シャンケリラ・チルドレン（その3）

同日 11:19 ラー・カイラムブリッジ

その頃、サイドー空域を航行中のロンド・ベル艦隊の元にシャングリラ「ロニー」からの救援要請を受けていた。

「艦長ー・シャングリラ「ロニー」からの救援要請ですー。」

ロンド・ベル旗艦ラー・カイラムブリッジでは、通信員が緊迫した表情で艦長のブライト・ノアに報告をしていた。

「よし、全艦戦闘配備！各MS隊は出撃準備！急げよー。」

ブライトが命令を下すと、MSアッキにいるアストナージ・メドソが報告を入れていた。

「艦長、もう少し時間を頂けますか？MS隊の損傷が激しくて整備が追いつません！」

「とにかく早くしてくれー！その間、他の部隊を先行させるー。」

この所、ネオ・ジオンの攻勢は活発化し、そのお陰でMS部隊の損傷率は増加しつつあった。

「アルビオンより入電！バニング隊並びにモンシア隊、間もなく出撃完了との事です！」

「分かった！一人によろしく頼むと伝えてくれー！」

強襲揚陸艦アルビオンのMSデッキでは、既に各MSが出撃準備を終えつつあった。

ぶつぶつ文句を垂れ流していた。

「くつそーウラキの奴めーー！さつさーー！ナさんに投げキッス何かされやがつて…今に見えてうよーー！あいつのガンダムも二ナさんも全部俺の物にしてやらあー！」

『何文句垂れてんだい、このスケベ親父！さつさと出やがれ！』

整備班キヤツプのモーラ・バシットがモニター越しに叫ぶと、モンシアはいつもの如くやり返していた。

第5話 シャンケリラ・チルドレン（やのう）（後書き）

モンシア中尉、相変わらずのテンション……。ガンダムに対する「だわりは」の作品でも見せてくれるはずです。

次回、シーマ様の出番です。30歳過ぎますが大丈夫?

シーマ・ガラハウ

「おー! そんな馬鹿な事言つたら……」ロード一落としがやつる

……」

第5話 シャングリラ・チルドレン（その4）

同日 11:32 シャングリラコロニー内

シャングリラコロニー内では、ネオ・ジオン軍のMS部隊が破壊の限りをつくしていた。そんな中、愛機ガーベラ・テトラを駆つていたシーマ・ガラハウが、その様子を満足気に見ながら眩っていた。

「……全くここに連中と来たら軟弱だねえ……全然手応えがありゃしない……」

『シーマ様！』の陥落は時間の問題ですぜー。』

部下の一人が楽観的になるのを聞くと、シーマは苦笑しながら釘を刺していた。

「……でも油断するなよ……戦いつてのは何が起きるか分からんからねえ……何処かの馬鹿共が現れるかも知れないから、用心に越した……つて早速現れたよ……しかも旧式の機体で……」

シーマ達の目前にジム・カスタムを先頭に、ザクが一機とガンタンクが行く手を阻んでいた。しかもそのジム・カスタムから通信が入っていた。

『やいーそこのネオ・ジオンの連中ー！これ以上好き勝手させねーぞー！』の声と共にジュドーの姿がガーベラ・テトラ内のモニターに映し出されていた。

「フッ……誰かと戻ったらロンド・ベルの坊やじゃないか……あんたよ

くそんな旧式の機体でこの私に対抗出来るねえ…」

『何だよ…シーマのおばさんじゃないか…まだ現役やつてたのかよ…あ、嫁ぎ先が無いから…こんな事やつてんだ!』

ジユドーのその発言にシーマは思わずブチ切れ、ビームライフルの照準をジム・カスタムの後方にあるガンタンクに合わせながら叫んでいた。

「うわあこねー良い子はさつと寝てしまいなー?」

同日 同時刻 ジム・カスタムコクピット

まばゆい閃光がした後、ジユドーが目にしたものはガンタンクのキヤタピラが破壊され、横向きに倒されている姿だった。

「モンド大丈夫か!…とにかくお前達は下がつてろー!」
「は俺が引き受けろー!」

そうは言つたものの、たつた一機のジム・カスタムで延べ10機以上の敵MSを相手にするには、いたさか無理があつた。

(……やつぱジム・カスタムじゃ無理かも…これがここならハイメガキヤノンで一発逆転なのに…)

ジユドーがそう考えていると、突然敵のMSギラ・ドーガが爆発を起こしていた。

「な、何だあ…敵のMSが爆発したぞ…一体どうして…!?」

ジユードーが呆然としていると、上空をサブフライトシステムに搭乗しているMS群が近付きつつあった。

『おい！そこのおんぼろジム・カスタムに乗つてる奴下がれ！後はこのモンシア様に任せとけい！不埒な奴らは成敗してやらあ～～～！』

中尉 時代劇の見過ぎです

『ほつとけアデル……まあそんな訳でそのジム・カスタム、聞こえてるか！？』

「…………聞こえますよベイトさん…………モンシア隊の皆さんつて相変わらずお笑いトリオなんですね…………」

『な……何だあー・ジユードーなのかあー?・お前わん何でそんなもん乗つてんだー?』

「詳しい事は後！今はとにかく、シーマのおばさん達を……つていつの間にいなくなつたんだ……？」

第5話 シャンクリラ・チルドレン（その5）

同日 12:01 シャングリラ・クローラー宇宙港

クローラー宇宙港で、ジユドー達はブライト以下ロンド・ベル一行と再会を果たしていた。

「とにかくお前達が無事で良かった。まさか廃棄寸前のMSを持ち出しへ抵抗しているとは思わなかつたぞ……」

「まあねえ……これもジャンク屋やつていたおかげですよー。」

ブライトの問い掛けにモンドが答えていた。するとジユドーがある疑問を投げ掛けていた。

「でもブライトさん、何でこんなクローラーにネオ・ジオンの連中が攻めて来るんだ?」

「分からん……とにかく連中はこゝだけではなく、他のクローラーまで攻撃しているんだ……我々は連日その対応に追われているんだ……」

「そりゃかりではない……最近はティターンズの連中も何かを画策しているとの情報もある……」

ブライトの発言の後、クワトロ・バジーナも憂鬱な表情で呟くと、ジユドーが切り出していた。

「……ブライトさん、俺達をもう一度ロンド・ベルに参加させてくれないか……さつきの戦いとクワトロさんの言った事が妙に引っ掛かるんだ……もしかしたら近いうちに大きな戦いが起きる気がするんだ……頼むよ……」

今にも土下座しかつた勢いのジユードー元、ブライトは困惑していた。

「それはいいんだが… 軍からは給料は出ないぞ…」

「金の問題じやない！ これは俺達… いや、 地球圏全体に関わる事なんだぜ！」

ジユードーの発言に、ブライトがなおも困惑していると、アムロが助け舟を出していた。

「艦長、 彼らを“善意の協力者”として迎え入れるのははどうだらう？ それに前回の戦いでは、 彼らの力があつたから最悪の結果にならずに済んだんだ…」

「まあ確かにな…… 分かった、 君達を快く迎え入れる… ただし、 これだけは言つておく！ 何をしても構わんが、 最低限の規律だけは守つてくれ！」

ブライトのその決断にジユードー達は小躍りして喜んでいた。 中でもビーチャとモンドのはしゃぎよつは凄い勢いであった。

「イヤッ ホー… さつすがブライトさん… 話が分かる…」

「そつそつ… なんせ俺達も二コータイプだからな！ いい仕事やりまつせー！」

「二コータイプだからってあまり甘く見ない方がいいぞ、 そんな考えだと命を落としかねないんだ！」

アムロの一喝で、ビーチャとモンドは一瞬のうちに静まり返つていた。 それを横目にしながら、ブライトはついて来たりイナに問い合わせていた。

「リイナ、君はどうする?」

「私もお兄ちゃん達について行きますよブライトさん!」

「お前は駄目だ!学校があるだろ?がー?」

リイナの意見にジユードーが反対すると、クリスチーナ・マッケンジーが逆に問い合わせていた。

「ジユードー君、学校の勉強なんていつでも出来るわ…それに危険な口口二ーにいるよりはロンド・ベルにいた方が安心でしょ?」

「そりゃまあ…クリスさんの言つ通りかも…すいませんでした…俺が間違つてました。リイナ「ゴメンな…」

「心配してくれてありがとうお兄ちゃん…それよりブライトさん、相変わらずロンド・ベルって人手不足らしいから家事全般、手伝います!」

「ああ、そうしてくれると助かるよ…」

一同が話していると、クワトロの携帯電話が鳴り響き、彼が一言一言話すとブライトに切り出していた。

「艦長、悪いが用事が出来た…しばらく出掛けたが構わないかね?」「ああ、当分連中も攻撃して来ないようだから、ゆっくりして構わん…」

ブライトの一言でクワトロはそそくかとその場を後にしていた。それを見ながらジユードーは思つていた。

(あの人つて相変わらず謎が多いよな……)

第5話 シャングリラ・チルドレン（その6）

同日 13:28 シャングリラゴロニー 内市街地

クワトロ・バジーナ……彼の正体は、亡くなつたジオン・ダイクンの息子キヤスバル・レム・ダイクンであり、かつてジオン公国軍に所属していた“赤い彗星”シャア・アズナブルでもあつた。

彼はザビ家に父を殺された恨みからシャアの名前を名乗つてジオン軍に入り、復讐の機会を狙いそれを達成した後は再び名前を変えて地球本星に潜伏していた。

潜伏中は様々な情報収集に当たつていたが、やがて襲い掛かるであろう巨大異星人の情報を得ると、彼は地球圏の将来を真剣に考え始め、再びアルファ星系へと舞い戻りロンド・ベルに参加していたのであつた。

市街地にあるカフェテリアに到着したクワトロは、一足先に来ていた一人の男に声を掛けられていた。

「お久しぶりですシャア大佐……」

「……キグナン…久しぶりなのはいいが今の私はクワトロ・バジーナだ…シャアと言う名前は既に捨てた…」

「私にとつては、今だにあなたはシャア大佐なのです…」

「……まあいい…それで例の件は進めてくれたかね…?」

「はい……現在アナハイムで建造中のアムロ少佐の新型ガンダムに使用される、サイコフレームの技術をジオニック社から横流しておきました……」

「そうか……これでアムロ君もやっとまともな機体に乗れるな……思えばリ・ガズイ何て安っぽい機体は彼には合わんよ……後は私のサザビーをどうやって手に入れるかだな……」

「その件についてはもう少し時間を頂ければ……それに……」

キグナンが言つべきかどうか迷つていると、クワトロが先に切り出していた。

「何だ……他にも何かあるのか……？」

「はい……実は、地球本星の事なんですが……“奴ら”がついに現れたそうです……」

「何だつて……それは本当なのか……？」

キグナンの告白にクワトロは強い衝撃を受けていた。彼の危惧していた事が、ついに現実になつていた。

「恐らく15年前に落下して来た巨大戦艦の持ち主か、その交戦相手だと思われます……“奴ら”的攻撃を受けて、その巨大戦艦 SD F-1マクロスと歴戦の名艦、宇宙戦艦ヤマトが行方不明だそうです……」

「あのヤマトが行方不明とは……」

クワトロは思わず絶句していた。地球本星で何度も見掛けたヤマトが行方不明とはにわかに信じられなかつた。

「確か艦長は古代進大佐だつたな……」

「ええ……亡くなられた沖田提督の愛弟子だそうです……彼をご存知で

すか？」

「いや、面識はない……一度会って今の現状をどうすべきか聞いてみたかったのだが……いや……近いうちに彼に会えそうな予感がする……」

クワトロは一ユータイプの勘で、近い将来古代進に会えそうな気になっていた。事実、ヤマトを旗艦とする第1軌道艦隊はアルファ星系最外縁部までたどり着きつた……

第5話 シャンケリラ・チルドレン（その6）（後書き）

前話でジユドーが言つた“地球圏”は本来なら地球近辺を指しますが、今作品では太陽系とアルファ星系をまとめて“地球圏”と設定しました。

次回、アムロが ガンダムをついに入手！ チェーン・アギ初登場ですが、「逆シャア」を初めて見た時、チェーンのスカートの短さにドキドキしていましたが、単なるキュロットだったのでひと安心と言つか…（男つて罪なもんです…）

第6話 アルファ星系波高し！？（その1）

A · D · 2205 8 · 21 16 · 11 グラナダアナハイム
技術開発部

「アムロ少佐あ～こつちで～す！」

リンボスの衛星グラナダにあるアナハイム・エレクトロニクス本社で、ラー・カイラム所属の技術士官チエーン・アギが、たつた今到着したばかりのアムロに手を振っていた。

「やあチエーン、元気そうじゃないか！」

「ええ、おかげ様で…それより聞いて下さいよーここの人達、私がロンド・ベルの所属だつて信用してくれなくて…仕方ないから二ナさんからの紹介状を見せたら、やつと信用してくれて…困ったもんです！」

チエーンが少し困った表情で話すと、アムロが彼女の肩を抱き寄せて呟いた。

「それだけ君がチャーミング過ぎるからや…」

「まあっ！少佐つたら人を褒めるのがお上手なんですね…ウフフッ！」

チエーンが顔を赤くしながら答えていると、アナハイムの技術官であるオクトバー・サランがやつて来て、アムロと握手を交わしていた。

「お久しぶりですアムロ少佐！」

「オクトバーさんも元気そうで…ところで ガンダムの方はどうですか？」

「ええ、後は動かすだけですが、ご覧になりますか？」

オクトバーの案内で、一人は ガンダムが置いてある整備フロアへと向かった。

そこには、整備も済み後は動かす状態の ガンダムがその姿を見せていた。

「…………少佐からの提案のあつたサイコミコシステムなんですが、実はある所から最新の技術が提供されまして、それを駆動系に組み込むことにしたんです…」

アムロはオクトバーから手渡された資料に目を通しながら、彼にその出所を尋ねてみたものの、オクトバーは何も知らないと言つよう に首を横に振つていた。

するとそこに、一枚の電文を手にした一人のアナハイム社員が一同 の側にやつて来て、それをアムロに手渡していた。

「…………ロンド・ベルへの帰還命令だ…第6惑星空域で地球本星第1軌道艦隊と巨大異星人が交戦中だそうだ… チェーン！直ちに帰還する！マスドライバーの準備をしてくれ、 ガンダムをそれにセ ットする…」

「了解！」

アムロの命令にチエーンが動き出しそうとした時、オクトバーが異を唱えた。

「そんな無茶です！テストもしていないのにいきなり実戦投入だなんて！おまけに主兵装である、フィン・ファンネルがまだ…」
「ライフルとサーベルがあれば何とかなる…フィン・ファンネルは後で届けてくれればいい…」

第6話 アルファ星系波高しー？（その一）（後書き）

リンボスの衛星をガンダムシリーズでお馴染みの、グラナダと名付けました。他にもリンボスの地名を多少アレンジして出す予定ですが、それはまた別の話…

次回、第1軌道艦隊がアルファ星系第6惑星空域にまでたどり着きましたが、彼らの苦難はまだまだ続きます…

第6話 アルファ星系波高し！？（その2）

地球を離れてから一ヶ月が過ぎ、第一軌道艦隊はようやくアルファ星系第6惑星空域に差し掛かっていた。その間にも、ゼントラーディ軍による様子見のような攻撃はあったものの、比較的被害は最小限に留まっていた。

この一ヶ月の間に、進宙式で行われる予定だったミス・マクロスコンテストが開かれてミンメイが選出されていた。そして彼女は念願の歌手デビューを果たし、日々多忙なスケジュールをこなしていたのであった…

A · D · 2205 8 · 21 16 · 59 アルファ星系第6惑
星空域

『デルタ1より全機へ！艦隊より150宇宙キロ周辺に敵バトルポッド群が展開中！哨戒中の部隊は直ちに迎撃に向かえ！』

「スカルリーダーより全機へ！聞いての通りだ、『奴ら』を艦隊に近付けるな！」

『『『了解！…！』』』

この日、フォッカー率いるスカル大隊は、いつもと同じような敵の襲撃に備えるため哨戒任務についていた。あまりにも敵の数が多いため、マイクロミサイル搭載のブースターパックが開発されて戦力

と機動力の増強が図られていた。

「スカルリーダーより全機へ！敵バトルポッド群をキヤツチした！
これより全機、ミサイル発射せよ！」『了解！…』

フォッカーの指示で全機からミサイルが発射されていった。輝は自機のモニターでミサイルの行方を息を殺しながら見つめていた。

やがて、ミサイル群がバトルポッド群を一斉に破壊するとそれを見ていた柿崎早雄が歓喜の声を上げていた。

『ヤツホー！どんなもんだ！』

『喜ぶのはまだ早い！全機散開して残りの敵を叩け！』

フォッカーの指示により、各機が散開し、戦闘機モードからバトロイドモードに変型してそれぞれ残敵を掃討していく。

中でもマクシミリアン・ジーナス（通称マックス）は、僅かな時間で5機のバトルポッドを撃墜して輝を唸らせていた。

（たすがマックス…やるじゃないか…俺だつて負けてたまるか！？）

ほぼ敵を掃討しつつあつた時、未沙からの通信が入っていた。

『デルタ1より全機へ！艦隊前方50宇宙キロに敵戦艦10隻接近中…直ちに迎撃に向かって下さい！』

「ええっ…それじゃこっちの敵はただのオトリかよっ！？」

輝は機内で叫ぶと直ちに自機を艦隊へと方向転換し、フルスピー

ドで向かっていった。

第6話 アルファ星系波高し！？（その2）（後書き）

マックスと柿崎の初登場でした。マックスは天才的なパイロットで、結構奇抜な戦いで敵を圧倒していたのが印象的でした。

一方、柿崎はと黙つとムードメーカー的存在でしたが、TV版&劇場版共に非業の死を迎えたのは少し残念…
果たして今回はどうなる！？

第6話 アルファ星系波高し！？（その3）

同日 17:05 第一軌道艦隊

第一軌道艦隊では、迫り来る敵のバトルポッドの迎撃に追われていた。

マクロスを中心に周囲を第一軌道艦隊の艦船で取り囲み、防御網を敷いていた。艦隊上空はヤマトの加藤四郎と、揚羽武両名率いるバルキリー隊が守りを固めていた。

そんな中、数機の敵バトルポッドがマクロスメインブリッジ周囲に飛来し、攻撃を仕掛けようとしているのを加藤機が発見、これをミサイルで撃墜したものの一機だけをとり逃がしていた。

「マクロスのブリッジが危ない！急がないと…」

加藤が叫び声を上げた時、一機のバルキリーが飛来し、ブリッジをかばうようにガトリング砲を撃ちまくつて撃墜していた。

（……ブースター・パックにドクロのマーキング…フォッカー少佐率いるスカル大隊のメンバーなのか…？）

加藤がそう思い、相手に感謝の意を表わそうと通信を送りうつした時、マクロスメインブリッジからその機と通信をやり取りしていた。

『スカル11番機！あなたの担当は敵艦隊の迎撃のはずよー！』
『ヤマトのバルキリー隊に任せて速やかに向かいなさい！』
『敵機が攻撃して来たんだ！助けてやったのにそんな言い方ないだ

ルルー』

ブリッジとその機体が誰であるか、加藤はすぐに合点がいった。
(始まつたよ… 一條と早瀬中尉の口喧嘩が…)

加藤がそう思つてゐると、未沙はより厳しい口調で輝に切り出して
いた。

『あなた、新人のくせに命令違反するつもり…? とにかく持ち場に
戻りなさい!』

『女の指図なんて聞けるか!! 本機はこれより、艦内に侵入した敵
の迎撃に向かう! 以上!』

輝のバルキリーはブースターパックを切り離し、艦内へと向かつて
いった。その様子を見ていた未沙は思わず叫んでいた。

『もうつ…男と女のどちらが偉いって言つのよ!…?』

この未沙の発言を聞いた加藤は心の中で溜息をつきながら思つてい
た。

(やだねえ早瀬中尉つて…せっかく助かつたつてのにあれじゃ 一條
が可哀相だよ…せめてお礼の一つでも言えば、可愛気があるのに…)

第6話 アルファ星系波高し！？（その3）（後書き）

ヤマト艦載機隊隊長、加藤四郎の登場でした。この人とフォッカーが並んで話している姿をアニメで見たかった！中の人と同じなので、どう演じたか…まああの人なら何とか出来るでしょう。

（例…ヤマトパート1、第25話の徳川機関長と佐渡先生の場面…）

次回、輝とミンメイが再び出会います…

第6話 アルファ星系波高し！？（その4）

同日 17:15 マクロス艦内市街地

この日はミンメイのファーストコンサートが、市街地のドーム球場で開かれていた。開始当初から観客は総立ち状態であつたものの、突然の空襲警報発令と、5分後にトランスマーケーションを行うと艦内放送が流れたため、コンサートは中断の憂き目にあつていた。そして、ミンメイはマネージャーである兄のカイフンやスタッフと共に控え室に待機していた。

「兄さん…大丈夫かしら…」これは危険だからどこか別の場所に避難した方が…？」

「いや、下手に動かない方がいい…いつものようにすぐ治まるわ…」

ミンメイが不安がるのをカイフンがなだめていたが、艦内に侵入した敵バトルポッド群のうち一機が、控え室の建物に頭から落申し込みを破壊して内部に突っ込んで来た。

カイフンとミンメイは手を取り合つて逃げ出し、その様子を落としたバトルポッドを操縦していた兵士が見て驚愕していた。

『な、何だこれは…男と女のマイクローンが一緒にいるなんて…』

その兵士の発言をじうにか着地に成功したバトルポッドの兵士が聞き、モニターを確認するなり彼もまた呆然として呟いた。

『ヤック…デカルチャー…』

その兵士の発言を耳にしていた隊長らしき兵士は一人に指示を出していた。

『とにかく、資料を手に入れて攻撃は別の隊に任せ、我々はここを撤退する!』

『了解!!』

一方、ミンメイとカイフンは別のバトルポッド隊に追われ、必死に逃げていたが、ふとしたはずみでミンメイが転んでしまった。カイフンがミンメイの側に近づこうとした時、運悪くトランスマーチョンが始まってしまい、一人はシャッターを介して別々に別れる羽目になっていた。

カイフンと離れてしまったミンメイが、バトルポッド隊に取り囲まれそうになつた時、艦内にようやく入り込んだ輝のバルキリーがガトリング砲をバトルポッド隊に浴びせ、逃走を図ろうとした残り一機を追撃しようとした。

その時、市街地の重力が急にゼロとなり、店のショーウィンドウから品物がガラスを破つて外に飛び出し、道路に停めてあつた車も宙に浮いて一斉に下方に向へと落ちて行つた。

もちろんミンメイも浮いて下方へと落ち始め、それに気付いた輝のバルキリーは全速力でミンメイに追い付こうと歩道橋や車にぶつかりつつも、アームを伸ばして何とか彼女の体を掴んでいた。

(ふーっ……何とか無事に……!!)

輝が安心したのもつかの間、輝のバルキリーはふとした弾みからエアロツクに突入してしまい、さらに間の悪い事に非常用シャッター

が下りてそのまま隠れてしまつた。

第6話 アルファ星系波高し！？（その4）（後書き）

劇中、出て来た三人のゼントラーディ兵士は言わずと知れたスパイ三人組：フレラ・ナンテス、ロリー・ドセル、コンダ・ブロムコの三人です。（今回の設定はTV版にしています。）

でも、三人の名前を続けて言うのはどうかと思いますが、当時のスタッフのセンスって一体…

それと、彼らが使っていた台詞“デカルチャー”
ここだけはゼントラーディ語にしました。（日本語の“そんな馬鹿な！”では、彼らの衝撃度が伝わりにくかったので…）

第6話 アルファ星系波高し！？（その5）

同日 同時刻 サイド2 ロンテー・オン・ロードー空域

その頃、アムロはチョーンと共に ガンダムを駆り、サイド2空域に展開中のロンド・ベルへと帰投していた。旗艦ラー・カイラムのMSデッキから艦内のブリーフィングルームに直接入った彼は、ブライトに現在の状況を聞いていた。

「艦長、どうなんだ？ 今の状況は？」

「ああ… 現在、第一軌道艦隊は第6惑星空域で“奴ら”と交戦中だ

そうだ…」

クワトロは一人の会話を聞きながらしばりへ考えていたが、やがておもむろに切り出していた。

「艦長、」この際ロンド・ベルで彼らの救援に行こう…今は少しでも“奴ら”的情報を収集しなければならないと思うのだが？「救援に行くのは構わんが… その隙を狙つてネオ・ジオンの連中が攻勢を強めたらと思うと…」

ブライトが困惑していると、緊急マーティングのために来ていた各艦艦長やメンバーのうち、ネエル・アーガマ艦長のヘンケン・ベックナーが名乗り出していた。

「ブライト君、だったら我々の部隊が残るわ… ネエル・アーガマなら何とかなるし、他の艦も歴戦をぐぐり抜けた者ばかりだしな…」「分かりました。では頼みますヘンケン艦長… それでは改めて説明

する…我が艦とアルビオンを中心とする艦隊は直ちに第6惑星空域に向けてワープする！残りの艦はネュル・アーガマと行動を共にしてくれ！以上だ！」

ブライトが宣言し、各自所定の配置についた時、ヘンケンがアムロに尋ねていた。

「アムロ君、そう言えば ガンダムを持って来たのはいいが肝心の新型ファンネルはどうしたのかね？」

「その事なんですが、急いでいたので後からデック艦ラビアンローズで運んでもらえるように、手配をしておきました。」

「……ラ、ラビアンローズ……」

アムロの発言にブライトが思わず反応すると、それを見たジユドー達がすかさず突っ込みを入れていた。

「ブライトちゃん！ そう言えばあの艦に愛しいあの人気が乗っていますよねえ！？」

「そーそーー一番会いたいから・の・じ・よ・ー！」

ジユドーとジー・チャの突っ込みにブライトは赤くなっちゃうになりながらもひたすら反論していた。

「な、何を言つたかー私には女房と子供達がいるんだべ、別にHマリーの事は……」

「聞いたかよ！？ Hマリーだつてやー。」

「何だかんだ言つてもやつぱりブライトちゃん、Hマリーさんの事気にしてんだよなあー！？」

「あ、お前りーーーつーかと準備を急がんかーーー！？」

ビーチャ達とブライトの会話を聞いていたアムロは溜息をつきつつ苦笑していた。

（…………つたくブライトは、〔冗談だつて分かりそうなものを……あいつの掌の上で遊ばれているのにまだ気がつかないのかよ……〕）

第6話 アルファ星系波高し！？（その5）（後書き）

ブライトとエマリー……本編や、スパロボでもお馴染みの“イケナイ”カップルですが、今作品は少し面白い展開にしたいと思います。何と、エマリーさんがブライト以外の男性に目をつけますが、その相手とは…………？

今後の展開に要注目！

第6話 アルファ星系波高し！？（その6）

同日 17:28 マクロスメインブリッジ

「敵艦隊、我が艦隊より30宇宙キロまで接近！」

トランسفォーメーションが終了し、強攻型へと変型完了したマクロスメインブリッジでは、主砲 マクロスキャノンの発射準備が進められていた。

「マクロスキャノン発射スタンバイ！目標、前方の敵艦隊！」

強攻型態勢のマクロスの二つに分かれた上向きの艦首が、前方に展開しているゼントラーディ艦隊を捉えるべく下方へとスライドを始めていた。

「発射コース右15度方向に修正、並びに上下角プラス2度へ修正します！」

「対閃光防衛シールド展開完了！」

「全艦隊、本艦後方に待避完了！」

「マクロスキャノン発射！目標敵艦隊！」

グローバルの指令で、クローディアが発射ボタンを押したもの、何故か発射されず何度も押してみても何の反応も無かつた。

「一体どうしたのだ！何故発射できないんだ！？」

グローバルが声を荒げると技術開発部のジーナ技師長から連絡が入

つていた。

「どうしたのだ技師長！何かトラブルでもあったのか！？」

『はい、重力制御システムが一部不調のために、発射システムに異常をきたしまして…修理に30分ほどかかりますか…』

同日 同時刻 ヤマト第一艦橋

「一体どうしたんだ！？一向にマクロスキヤノンが発射されないぞ！…」

ヤマト第一艦橋では、艦長席の古代がメインパネルに映し出されたマクロスを見て声を荒げていた。

「艦長、マクロスより入電です。“マクロスキヤノン発射システムが不調のため修理に時間がかかる”だそうです！」

相原の報告に、古代は思わず唇を噛み締めていた。

（……何て事だ…波動砲が撃てない今、頼りになるのはマクロスキヤノンだけだというのに…どうすればいい…？）

古代はしばらく考えた後、ふと思いついて相原にフォックナーへの連絡を依頼すると、ものの1分もしないうちに彼から連絡が入つていた。

『どうした古代、何か用事か？』

「フォックナー、済まないがマクロスの主砲発射システム修復作業が終わるまでの間、全機を指揮して敵艦隊を引き付けてくれないか…

？」

古代は駄目で元々と思ってフォックーに問い合わせると、彼は即座に返答していた。

『かつての戦友からの頼みだ！心良く引き受けよう』

『ありがとうございます……だが、そちらの航空管制オペレーターにも一応……』

と古代が言った時、未沙から通信が入っていた。

『こちらデルタ…古代艦長とフォックー少佐の話はこちらでも聞いていました…ここはとにかく、時間稼ぎをよろしく頼みます…』

未沙の発言に古代は少し面食らっていた。何事にも固い性格の未沙をどうやって説得するかしばらく考えていただけに、思わず拍子抜けしていた。

『よし！そうと決まれば一丁行きますか！スカルリーダーより全バルキリー隊へ！聞いての通りだ、マクロスキャノンが撃てるようになれるまで時間稼ぎだ！心して行けよ！』

『了解！！！！！』

フォックーの命令の下、全バルキリー隊は前方に展開するゼントラーディ艦隊方向へと向かつて行つた。

第6話 アルファ星系波高し…？（その6）（後書き）

本田（8／31）、「笑つていいとも」のテレフォンショッキングに伊武雅刀さん（ヤマトのデスラー役の方）が出演されました。

この方、料理を作るのが大変上手だそうで、自分の中では「デスラー總統」が自ら台所に立ついる姿が思わず田に浮かび…

（ んなこたあない… ｂｙタモリ ）

デスラー繫がりで、「ヤマト」のベムラー・ザ・首相や「ヤッターマン」のドクロベヒ役をされていた声優の滝口順平さんがお亡くなりになりました…

謹んで「冥福をお祈りします」…

第6話 アルファ星系波高し！？（その2）

同日 17:45 マクロスマインブリッジ

『こちら技術開発部のバルトロウです！マクロスキャノン発射システム修復完了しました！いつでも発射出来ます！』

マクロスキャノン発射システムの修復作業を陣頭指揮していたジーナ技師長から連絡が入ると、メインブリッジ内は再び活気に溢れていた。

「よし！早瀬君、敵艦隊を攻撃中の全バルキリー隊に連絡してくれ！」

「了解！全バルキリー隊へ！本艦はマクロスキャノンの修復完了、これより発射態勢に入るので直ちに射程外に退避せよ！」

「敵艦隊、現在位置本艦より25宇宙キロまで接近！」

「マクロスキャノンへのエネルギー注入率、現在85パーセント！」

「全バルキリー隊、全機射程外への退避完了了！」

「よーし行くぞ！マクロスキャノン発射！！！」

「了解！マクロスキャノン発射します！」

クローディアが発射ボタンを押すと、艦首砲身からプラズマ粒子が発生し、やがてそのエネルギーの束は前方に接近しつつあったゼントラーディ艦隊に突き刺さり、あっさり消滅させていった。

同日 17:46 ヤマト第一艦橋

ヤマト第一艦橋では、前方のゼントラーディ艦隊が消滅した事を受けて、メインスタッフが歓喜の渦に舞っていた。

土門と島、真田と山崎が握手を交わし、相原・南部・太田の“スリーミニーゴ”が万歳を繰り返していた。

古代も艦長席から下りて、レーダー席のユキにそっと微笑むと、彼女もまた微笑み返していた。

その時、航法レーダーに反応があり、慌てて自席に戻った太田が切羽詰まつた表情で報告していた。

「艦長！ 10時方向、25宇宙キロ地点に重力振を確認！」

「何だつて！？ 新手の敵艦隊か！？」

「いえ… これは波動エネルギー反応、ワープアウト反応です…」

「ユキ、艦籍は分かるか？」

「はい… 艦籍出ました… リンボス駐留の連邦軍です… 所属は第13独立機動艦隊ロンド・ベルです…」

「ロンド・ベル… “ニコータイプ部隊”と噂されているあの部隊が救援に来てくれたのか…」

その頃、第5惑星空域で待機中のゼントリーラーティ艦隊旗艦では、第一軌道艦隊をおびき出すべく先行艦隊を派遣していたものの、あれなく全艦全滅の報告が入りブリタイとエキセドルを呆然とさせていた。

「……増援部隊を呼ばねばならんようだな……敵のマイクローンを少し良く見ていたようだな……」

「……そのようですね……おまけに、この星系のマイクローン達が彼らの艦隊に合流したようだ……事態は一刻を争つようですね……」

第6話 アルファ星系波高し！？（その2）（後書き）

次回、いよいよヤマト・マクロス・ガンダムキャラ揃い踏み！

第6話 アルファ星系波高し！？（その8）

同日 18:15 マクロス艦内大会議室

「初めまして。私は第13独立機動艦隊ロンド・ベル司令を務めるブライト・ノア大佐であります…」

マクロス艦内にある大会議室では、ロンド・ベルメインスタッフと第一軌道艦隊の各艦メインスタッフの初顔合わせが行われていた。

「私の右隣にいるのが、第一軌道艦隊司令、並びに宇宙戦艦ヤマト艦長の古代進大佐……そして左隣にいるのがこのマクロス艦長を務めるブルーノ・J・グローバル准将です。」

藤堂長官に紹介された古代とグローバルは立ち上がり、ブライトに敬礼していた。

「古代艦長、ヤマトの活躍はかねてから聞いております。それにこのマクロスは凄い艦ですね…艦内に市街地があるとは…先程到着した時には思わず驚きました…」

「ええ…我々もまさかこうなるとは思つても見ませんでしたよ…それに“ニヨータイプ部隊”と噂されるあなた方と会えるとは思いませんでしたよ……」

古代が正直な感想を述べると、ブライトは笑いながら答えていた。

「そんなことはありませんよ…たまたま部隊にそういうった人物がいただけの事ですよ…大半は普通の人物が所属しています…そうだ、

紹介しておこう。私の右隣にいるのがアムロ・レイ少佐、ロンド・ベルのMS部隊長を務めている。そして私の左隣にいるのが、クワトロ・バジーナ大尉、この部隊の総参謀的な役割をしている……

「初めてましてクワトロ大佐……」

古代はクワトロが持つ独特の雰囲気で、思わず彼を“大佐”と呼んでしまい、彼に苦笑されまくっていた。

「古代艦長、私は“大佐”ではありません……“大尉”なんだが……」「ああすいません……自分より年齢が上だと聞いていたのでつい……」「いや、構いませんよ……何しろ自分は不器用なもので……30過ぎても昇進できないもので……おまけに嫁さんもいない……ブライト大佐なんか私と同年齢なのに、一人の子持ちですからね……」「そうなんですか？ とてもそんなふうには見えませんが……」「二人も子供がいると色々と大変ですよ……そう言えば古代艦長は結婚の方はまだ……？」

ブライトの問い掛けに、古代が答えよつがどつか考えあぐねていると、藤堂が即座に答えていた。

「ブライト君、実はいるのだよ婚約者が……同じ艦内でレーダーを担当している森ユキ大尉と言う、当代一の美人がね……」「ちょ、長官！ 何もそれを今言わなくてもいいじゃないですか！？」

藤堂がユキの話題を振ると、古代は思わず絶句し、周囲を笑いの渦に巻き込んでいた。

笑い声が治まると、ブライトがある提案を始めていた。

「実はここに来る途中、みんなと話し合いでしてましたが……あなた方第一軌道艦隊を我々ロンド・ベルに編入しようと思うのだが、どう

だらうか？」

ブライトの提案に、古代は藤堂やその他のスタッフとじばりく話し合ひをしていたが、結論が出ると即座に回答していた。

「今、藤堂長官やその他の人達と話し合ひをしましたが、その話をお受けしましょ。これから先、行動を共にするには何かと都合がいいですからね……」

古代の回答にブライトは満足し、やうにある提案を出していた。

「そうですか、色良い返答を頂きありがとうございます。それともう一つ提案があるのですが、新生ロンド・ベルの司令を古代艦長にお願いしたいのですが……引き受けられないだらうか？」

ブライトの突然の提案に、古代は困惑していた。
自分にこのような大役が務まるのかどうか、心配で不安であつたからだ。

「あの……ロンド・ベルの司令はブライトさんがあつて、その部隊ですかよ……とても自分には……」

「いや、これから先の戦いはあの巨大異星人を相手にしなければならない……私にはその経験はないし、古代艦長ならこれまでの経験があるので適任だと思つた次第で……」

なおも古代が困惑していると、グローバルが助け舟を出していた。

「古代君、ここにとにかく引き受けたまえ……君一人に責任を押し付けるつもりはない……ブライト君との私が副司令として君を支えるつもりだ……」

「古代艦長、グローバル准将の言つ通りだ……こゝまでかへるが如くは
けてくれないか？」

「……分かりました……お一人がそつまつにならぬであります……」

ブライトとグローバルの説得によつて、ロン・デベル司令の就任を引き受けたのであった。

第6話 アルファ星系波高し！？（その8）（後書き）

ついに古代進がロンド・ベル司令に就任……

実はこの小説を書き始めた理由の一つがこれでした。

ブライトさん以外の人物が、ロンド・ベルを指揮したらどうなるかをやって見たかったのですが、古代ならそつなく出来るはずです！

次回、輝とミンメイが閉じ込められた状況から始まります。

第7話 ラバーズ・コンチホールト（その一）（前書き）

時間はマクロスキャノン発射前にさかのぼります…

第7話 ラバーズ・コンチューント（その1）

A · D · 2205 8 · 21 17 · 39 マクロス艦内閉鎖空間

「はあ～……これでオシャカになつたバルキリーは3機団だよ……」

マクロス艦内の閉鎖空間で、輝は壊れたバルキリーの「クスピットから出るなり眩いていた。

この一ヶ月の間、些細なミスから自機を喪失する事が一回あり、“次に撃墜されたら減俸だ！？”とフォックターにきつく説教されたばかりとあって、輝の気分は今またひどく落ち込んでいた。

しかし、それよりも先程救助した女性の様子が気になり、バルキリーの左手に握られた彼女を、持つていたライトで照らしていた。

（ミ、ミンメイじゃないか… そう言えば今田はファーストコンサートだったよな…）

輝が思つてゐると、ライトの光が当たつたおかげでミンメイがいきなり目を覚ましていた。

「あ、あなた……あの時の……」
「はつ、はいつ…自分は……」

「一條輝少尉……ですよね……」

「そうです！覚えてたんですね！？」

「ええ、あの時古代さんと話しているのを聞いてたから…それより
「」」」はどうなのかしら？」

ミンメイは、不安氣な面持ちで周囲を見渡しながら輝に問い合わせて
いた。

「どうも閉鎖空間に入ってしまったようで…通信機も壊れているの
で何処にも連絡しようがなくて…」

「じゃあこの壁、壊せませんか？」

「無理です…特殊金属で作られてるんで…」

輝の発言にミンメイは諦めたらしく、その場に座り込み履いていた
ヒールを脱ぎ始め、勢いよく伸びをしていた。

「ま、いいか…過密スケジュールはもう少しあれ…これで一息つ
けるわ…」

「あの～もし良かつたら…これにサインを…」

輝はポケットからハンカチを出し、ミンメイにサインをせがむと彼
女は持っていたサインペンを取り出して、自分の名前を記入してい
た。

「「ゴメンね…今だにサイン書くの下手くそだから…」

「あついよ…記念にするから…ってあれ…重力が…」

輝がそう言つた途端、一人の体が突然宙に浮き始めていた。ミンメ
イは突然の出来事に驚き、衣装の間から見えそうになる下着を必死
になつて隠そうとしていた。

「いやあ～～～ん！？ど～なつちゅうてんのよ～～～つ……」

「重力制御が効かないんだー！」

「も～～～～そなことよりど～にかしてよ～～～！？」

「どうにもならず泣き叫びながらぐるぐる回るミンメイを止めるべく、輝は彼女に叫んでいた。

「とにかく、脚を思いっきり前に振つてーーー！」

「！」

輝のアドバイスのおかげか、ミンメイはどうにか体を浮かせる事に成功し、逆に先程よりも浮いている事を楽しんでいた。

「あははっー何か楽しい～～～！」

「…………ちょっと君ーー～そつちは危険…………」

輝が止めようとしても、ミンメイは何処吹く風といった具合に無重力浮遊を楽しんでいた。

「それにしても色んなものが浮いているね～？」

「ホント……みんな街から落ちて来たんだ……」

二人が周囲を見渡すと、衣服や車、自動販売機、あげくの果てにはマグロの巨体までが浮遊していた。

それらを利用して、二人はいつ終わるとも知れないサバイバル生活を始めていた……

第7話 ラバーズ・コンチエルト（その1）（後書き）

輝とミンメイが閉じ込められるシーンの再現でした。TV版では宇宙に浮かぶマグロを取ろうと輝が四苦八苦した揚句、頭だけになつたシーンはかなり可哀相……

この作品中では丸ごと艦内に浮いていたので、一人は腹一杯食べるかも……？

次回、モンシアが三人娘をナンパ！？

その結果はいかに……

第7話 ラバーズ・コンチエルト（その2）

A · D · 2205 8 · 24 16 · 15

マクロス艦内市街地

「はあ～……何かいつも行つてるクラブ……最近つまんないしい……」「そうよねえ……来ている男の子達、いつも同じメンツだし……」「仕方ないわよ……マクロス艦内の市街地の中じゃねえ……」

この日、久々に休暇を取つたシャミー・キム・ヴァネッサの三人娘は、市街地のメインストリートをただあてもなく缶コーヒー片手に歩いていた。

日頃のウサ晴らしをしようと、いつも訪れているクラブに繰り出したものの、結局いつものメンバーしかおらず、仕方無しにただ街中をぶらついていたのだった。

「おまけにさあ～、ユキさんに頼み込んでセッティングしてもらつたヤマトクルーとの合コンもちょっとねえ……」

「ホント……ちびクマ」に“江戸っ子モドキ”に“宇宙のトラック野郎”……相手が悪過ぎたわ……」

「そうそう……あの三人組、あげくの果てに喧嘩始めて同席していた古代艦長に怒鳴られたらし……ユキさん、後で私達に頭下げてお詫びしてくれて……何かユキさんに悪い事しちゃつたかも……」

三人娘は以前行われた合コンを思い出して落ち込んでいると、背後から一人の男に声を掛けられていた。

「そこのお嬢さん達……ヒック！……これからどうやらまで……
ウイーツ~~~~~」

三人娘が振り返ると、そこにはウイスキーの瓶をぶら下げた鬱面の男 モンシアが立つており、その向こうには若い二人の青年コウ・ウラキとチャック・キースが顔をひきつらせつっこちらに走つて来るのが見えた。

「お嬢さん方へもし良ければ俺達三人と付き合わないかあ～？」

三人娘はモンシアのあまりの酔っ払い振りに呆然としつつも、丁重に彼の誘いを断つていた。

「あ、あのう……私達これから行く所があるんでえ……」

シャミーが今にも泣き出しそうな表情で断ると、モンシアはそれに構わず誘い続けていた。

「まあいいじゃねえか！ ちょうど三対三だしよ……カラオケにでも……

モンシアはそう言いつつ、シャミーの尻を撫で回すと彼女はいきなり泣き出していた。

「ふえ~~~~ん！ この人今私に手え出した~~~~！」

シャミーの泣き声にキムはついにモンシアにブチ切れていた。

「ちょっとオッサン！ 私の同僚に何すんのよ……？ アンタもいい軍人なら、やつていい事と悪い事くらい分かるでしょ～がつ……！」

「なんだと～！ 人が親切に誘つてればいい気になりやがつて！」

「ちょ、ちょ、とモンシア中尉…」
はとにかくこの人達に謝った
方がいいですよ…」

キースがモンシアをなだめかしたもの、逆にモンシアはキース
を度突き回していた。

「や、キース…」の俺様の楽しみに口出すんじゃねえ…？」

そう言つてキースを張り倒すと、それを見ていたコウも口を出して
いた。

「中尉！いい加減にして下さい…」
ここは市街地なんですよ…？」

「ウラキい…てめえヒヨッ子のくせしてこの俺に説教するつてか
！？」

いつ終わるか知れない喧嘩を見て、ヴァネッサがシャーリーを慰めて
いるキムにそつと囁いた。

「私…早瀬中尉を呼んで来る…」

第7話 ラバーズ・コンチエルト（その2）（後書き）

劇中、三人娘が合コンした三人組は順番に… 徳川太助 坂巻浪夫 赤城大六 でした…

太助の“ちびクマ” 赤城の“宇宙のトラック野郎”は分かりやすいにしても、坂巻の“江戸っ子モドキ”…

自分で書いてるのも何ですが、坂巻役の声優さんが何となく“べらんめえ口調”に聞こえるのは自分だけ……？

第7話 ラバーズ・コンチヨルト（その3）

同日 16:26 マクロス艦内市街地カフュテリア

「とにかく、まだ死んだと決まつた訳じゃない……輝の奴はこの艦内の何処かに居るはずだ……」「はい……では今から西側ブロックを捜してみます……」

「ああ……頼む……」

マクロス艦内市街地にあるカフュテリアで、フォッカーがマックスと柿崎に輝の捜索に関する打ち合わせをしていた。

マックスと柿崎がその場を離れる時、フォッカーは浮かない表情でコーヒーに口をつけて溜息をついていた。

「一条君、まだ見つからないのね……」

「もう今日で3日目よ……あの坊や、今頃何やってんだか……」

ユキとクローディアが話していると、未沙が突き放した発言をしていた。

「軍に入つてみたけど、やつぱり怖くて逃げ出したんじゃないの？大体彼は軍人向きじゃないし、人の話は聞かないわ、命令違反はするわ、揚げ句の果てには私をおばさん扱いするわ……」

「ちょっと未沙、あなたがおばさんなら私やクローディアさんはどうなるのよ……」

「そうよ未沙！私達まだまだ若いのよ！？今からそんな事言つてたんじや……」「“いつまで経つても彼氏が出来ない”って言いたい

んでしょう？いいのよ…私は仕事一筋で生きて行くから…」

未沙の達観したような発言を聞いていたユキは、半ば呆れながら思つていた。

（全く未沙つたら…恋の一つや二つくらい経験すればいいのに…でも…）「ううう真面目タイプの子が恋にハマつたらどうなるのかしら…）

そんな時、ヴァネッサがカフェテリアに息せき切つてやって来た。

「た、大変です！シャミーが酔つ払いに絡まれて…それを止めようとした人と酔つ払いが喧嘩して…」

「何ですって！？それでシャミーは？」

「今、キムが慰めてるんですけど…」

「分かつたわ！私が止めに行つてくる…」

ユキがそう言つなり、カフェテリアから一目散に出て行こうとする
と、未沙もそれに続いて立ち上がつていた。

「ユキさん！一人じゃ何だから私も行きます…」

二人が出て行き、後を追いかけようとしたヴァネッサに、フォツカ
ーが問いただしていた。

「ヴァネッサ、その酔つ払いの男つてどんな奴なんだ？」

「はい…髪が生えてて酒瓶をぶら下げていて、連邦軍のフライトジ
ャケットを着ている30前後の男の人ですが…」

その言葉を聞いたフォッカーの中で、ある人物が思い浮かんでいた。

「もしかして…あいつかも…とにかく俺も行く！案内してくれ！」

「了解です少佐！」

第7話 ラバーズ・コンチホールト（その4）

同日 16:30 マクロス艦内市街地

ユキと未沙が現場にたどり着くと既に野次馬で溢れ、その中でコウとモンシアは喧嘩を続け、そのかたわらではシャミーがキムとキースに慰められながらしゃくり上げていた。

「ちょっとあなた達、いい加減にしなさい！市街地のど真ん中で喧嘩とはどういう事ですか！？」

ユキのその一言で一人が振り向き、中でもモンシアはいぶかしげな表情で見つめ、コウはユキの制服についていた階級章を見て思わず敬礼していた。

モンシアはコウのその態度を横目にユキに毒づいていた。

「何だよねーちゃん！女の癖に喧嘩の仲裁か！？」

「ここは市街地です！周りの迷惑を考えてないんですか！？とにかくあなた方の所属は！？」

「はー！自分は強襲揚陸艦アルビオンクルー、コウ・ウラキ少尉であります！」

「同じく、俺はベルナルド・モンシア中尉だ！てめえこそ何処の誰だ！？」

「私は宇宙戦艦ヤマトトレーダーオペレーター、森ユキ大尉です！」

“ヤマト”と言つユキの言葉にコウは思わず直立不動になり、改め

て敬礼し直していた。

彼にとってヤマトは、MSに繼いで憧れの存在であり、その歴戦の艦を間近に見たいと何度も願っていたのが、今回それが実現するとは思つてもみなかつたのであつた。

「ウラキ少尉、IJIの喧嘩の原因は？」

ユキが問いただすとコウは今までの経緯を彼女に説明していた。

「…………じつは原因はモンシア中尉にありそつね。中尉、IJIはとにかくシャミーに謝罪して下さい！それに夕方近いとはいえ、酒瓶持つてうるつるのはどうかと思ひますが！？」

「じゃあお聞きしますが大尉殿、アンタの艦にも同じよーな奴がいるつて話じやないか！？それも医者だつて言つじやねえか！？」

モンシアの反論に、ユキは思わず言葉を詰めらせていた。ヤマトの艦医である佐渡酒造はかなり有名で、愛飲している日本酒を所構わず持ち歩くのはヤマトの名物であった。

（まあね…………確かに先生はヤマト艦内を酒瓶片手に歩いてるから……つて言ひか、どうやって言ひ訳すればいいのよ……）

ユキがそう思つてると、モンシアが追い打ちをかけていた。

「それとも何か？アンタがその泣き虫娘に代わつて俺と付き合つてくれたら、IJIの事は不問にするんだがな……まあ…どーするんだよ…？」

「ヤマトまだモンシア…！」

声のした方向を一同が見ると、見物客の中からフォッカーと、会議を終えたばかりの古代が姿を現していた。

「古代君！それにフォッカーさん！」

「ありやりや…フォッカー少佐じゃないですか…こりやどーも…

モンシアが恐縮していると、フォッカーが彼に説教を始めていた。

「お前なあ！今ナンパしていた女の子達はみんな俺の部下だ！それに、お前が怒鳴り散らしていた森大尉はここにいるヤマトの古代艦長の婚約者だ！」

下手に手を出したら、この俺が許せんぞ…！」

「はあ…しかしですね…」

「これ以上の言い訳は止めたまえモンシア中尉！」

人混みの中から姿を現れたのは、アルビオン艦長のエイバー・シナップスであった。

「話は聞かせてもらつた…とにかく、ここにいるお嬢さん方に謝罪しましたまえ…」

シナップスの一言で、モンシアは三人娘とユキに謝罪していた。

「中尉、君はアルビオンに戻った後、罰として艦内清掃を命じる…」「はあ…了解しました…」

モンシアはそう言つと、ガックリと肩を落としその場を離れ、それを見ていたコウはシナップスに進言していた。

「艦長、自分もこの騒ぎには責任がありますー自分も艦内清掃に加わりますー」

「いいだらう…君もやりたまえ…」

「ありがとうございますー」キース、君も手伝ってくれー！」

「…………了解…………」

「ウチとキースは古代達に敬礼すると、モンシアの後を追つていた。

「早瀬中尉、うちのクルーがお宅のクルーに迷惑をおかけしました…グローバル艦長には、私が謝つていたと伝言を頼みます。」「了解しました。艦長に伝えておきます。」

シナップスが未沙に伝言した後、彼は古代の傍に近づくと耳元で囁いていた。

「しかし…あなたのフイアンセは気が強いですな…くれぐれも尻に敷かれないように…」

「…………あの…………実はとっくに…………」

古代が小声で呟くと、シナップスは苦笑しながらそのばを離れて行き、シナップスの苦笑を見ていたユキが不思議そうな表情で古代に聞いただしていた。

「古代君、シナップス艦長が苦笑いしてたけど…？」

「え?いや、別に…………それよりユキ、大丈夫かい…………」

「ええ…実はね、ホントはどうなるかと思つてた…………でもフォツカーさんがモンシア中尉と知り合つたなんて…………」

「ああ…奴とは飲み仲間で同じ部隊にいたんだ……パイロットとし

ての腕は確かに酒と女には目がなくてな……一年前に人事異動で
リンボス駐留軍に転属になつたのは聞いていたが、まさかこんな所
で再会するとは思わなかつた……それにしてもまあ……ユキの意外
な一面を見るのは……おい古代！お前気をつけないと、将来怖いぞ！
ハツハツハツハツ！』

第7話 ラバーズ・コンチエルト（その4）（後書き）

古代がユキの尻に敷かれる……本編でも見たかつた！

今までユキに散々心配かけてばかりいたから、彼女に頭が一生上がらないはず……

もしかしたら、復活編での別居の理由その2になるのかも……

第7話 ラバーズ・コンチカルト（その5）

同日 21:46 アルビオンマジック

「あ～疲れたぞ～っ……どうして俺が艦内清掃しなきゃならねーんだ！？」

アルビオンのマジックでモンシアがモップ片手に文句を垂れ流していた。

マクロスから帰ってきて5時間以上艦内清掃に専念していたものの、全長350mのアルビオン艦内を三人だけで清掃するのはいたしか広すぎた。

「中尉！文句を言つてゐるヒマがあつたら手を動かして下さ～よ～！」

「ひむせーキース！こうなつたのもみんなのミスカねーちゃんのせいだ！今度会つたらギャフンと言わせてやるー。」

今にもモップの柄を折りそうな雰囲気のモンシアに、キースは半ば呆れながらユキの印象を話し始めていた。

「まあまあそ～う言わずに……でも俺から見て森大尉つて、優しそうですかけど？」

「馬鹿かお前は！？あんな性格のきつそうな女、俺は願い下げだ！」「そうですかあ？森大尉つて見た目は華奢に見えますけど、なかなかナイスバディじやないですか……こう出てる所は出でていて、身長はそんなに高くなくて……あれで古代艦長の婚約者じゃなかつたらな

「……とにかく誰かの誰かとは大違い！」

「そのどつかの誰かって……アタシのことかいキース！？」

「へー？……モ、モーラ……いたのー？」

キースが後ろを振り向くと、モーラが腕組みをして凄まじい形相で仁王立ちしていた。

「アンタねえ！森大尉の話しばかりしていると、終わるものも終わらなくなるつてーの！？さっさとやってしまいな！」

「ひつ……ひえ……！？」

モーラがキースを怒鳴りまくつていると、それを見ていたモンシアは“ザマー見る”という表情を浮かべていた。

「ちょっとスケベ親父！アンタもさつと終わらせるんだねー！ウラキ少尉なんか、とっくに自分の受け持ち区域を終わらせたんだからね！」

「ぬわにい～～～！？あのヒヨッ子野郎、いつの間にい～～～！」

？

モーラの発言にモンシアが切れかげると、MSデッキ上の通路からベイトとアテルが声を掛けていた。

「お～いモンシアー！さつと終わらせりよー！」

「そうですよ中尉ー！我々は先に休みますんでー後はよろしくお願ひしますー！」

二人がそう言ってその場から立ち去ると、下にいたモンシアは思わず叫び出していた。

「クソッたれ～～～！…ビニツモコニツモ勝手にしゃがれ～～

第7話 ラバーズ・コンチヨルト（その6）

A · D · 2205 8 · 25 15 · 35

マクロス艦内閉鎖区域

輝とミンメイが閉鎖区域に閉じ込められてから既に4日たつていた。絶望的な状況の中、二人は相変わらずたわいない話をして気を紛らせていた。

「それでね、父さんが私にこう言ったの……“お前には歌手なんて無理だ！お前は家出したカイフンの代わりにこの店を継げ！それが出来ないなら、親子の縁を切るぞ”ってね……」「それで結局どうしたの？」

「私、頭に来ちゃって！その晩書き置き残して家を飛び出しちゃって、そのまま南アタリア島にいる叔父さん達の所に転がり込んだって訳……」

「す、凄いじゃないか……」

ミンメイの告白に、輝は思わず絶句していた。自分より一歳しか年齢が離れていない彼女の行動に舌を巻いていた。

「でもね……ちょっとやり過ぎたかなって……あの後母さんにメールしたら、泣き顔が載った写メールが返ってきて……それにこの前はその事に関して古代さん達に色々言われたし……」

ミンメイが淋し気な表情でうつむいているのを見た輝は、別の話題を振っていた。

「それより、聞いてもいいかなこの前のドラマ……あれで共演した人気俳優との仲、ホントの事？」

「ああ、あの事？輝も本気にしてたんだ……あんなの芸能雑誌の『ティチ上げよ！？』

「いや……だってあのキスシーン、凄いリアルにしていたから……」

「アハハっ！……あんなのは演技！……ただのビジネスよ！……」

「う……嘘お～～～！？」

「じゃあ……やってみせましょつか……」「

ミンメイはそう言つとおもむりに輝に迫り、衣装から見える胸元をわざと強調していた。

「ねえ輝……私……あなたの事が……好きなの……」「

「え……っと……その……」

「ねえ……あなたは私の事……愛してる……？」「

「いや……あの……」

「私はずっと前から……あなたを愛してる……」

ミンメイはまるでドラマのヒロインのように輝に迫り、彼の方は突然の展開にただ押し黙るほかなかつた。やがてミンメイの唇が輝の唇と重なり、やがて無重力状態が解除されて二人の体は下へと落ちていつた。

「こいつは凄い！」
「こいつは凄い！」
「ホント！……こいつはスクープだ！」

第7話 ラバーズ・コンチホールト（その6）（後書き）

劇場版 愛・おぼえていますか の再現でした。

これを見ていて不思議に思ったのは、扉の向こうになぜマスクが陣
が待ち構えていたのか…？

何回DVDを見ても今だに分かりません…
どなたか知ってる方がいたら教えて下さい…

第7話 ラバーズ・コンチホールト（その7）

A · D · 2205 8 · 26 9 · 32

マクロス艦内ブリーフィングルーム

翌日、輝はブリーフィングルームで未沙から、ミンメイを助けた事により命令違反を取り消すという軍広報部からの通達を受けていた。

「…………ただし、今後命令違反を犯したらただではおきません。厳しく処罰するのでそのつもりで……」

「はあ……」

「一条少尉！ 聞いているんですか！？」

「はい！！！ 以後気をつけますっ！！！」

事務口調の未沙に対し、輝はおもむろに立ち上がりつつ敬礼すると、未沙はムッとした表情でブリーフィングルームから立ち去つて行った。

「…………つたぐ！ あれでも女かよ！？ 森大尉の方がよっぽど女らしいよ！？」

輝は未沙の出て行った先を身ながら文句を言つていると、フォッカーとマックス、柿崎が入れ違いに入つて來た。

「やつたな輝！ この色男が！？ どうだった我等のアイドル、ミンメイちゃんのお味は！？」

開口一番、フォッカーは輝の頭を小突き、ミンメイとの事を突つ込

んでいると、当の輝は困惑していた。

それに追い打ちを掛けるようにマックスがさうに突っ込みを入れた。

「仮にですよ……もし一条先輩とミンメイさんがそういう言ひ関係になつたのなら……これは絶対責任を取るべきです！」

「そりそりマックスの言ひ通り！」

柿崎までもが茶々を入れると輝がムツとした表情で否定した。

「言ひておきますが、自分は何もしてません！」

「何だあ！？4日も一緒にいて何も無かつただあ！？お前、それで
もオ・ト・「か！？」

フォッカーを始め、マックスと柿崎に睨まれた輝は、ただ押し黙る
ほか無かつた。

同日 10:08 マクロス艦内市街地カフェテリア

その頃、市街地のカフェテリアでは三人娘がお茶を飲みながら、輝
とミンメイの記事が掲載された雑誌片手に盛り上がつていた。

「やあねえ今時の芸能人は……人気が出たらすぐこれだから……
「ホント！今度の男だつて何人目なんだか？」

ヴァネッサとキムが雑誌を見ながら噂しまくつていると、シャニー
が「うらやましい」と言ひ表情で呟いていた。

「なんかあ～セリーナのひでちゅうヒツリヤまじこって感じー?」

「アンタねえ… そんな事言つてるから彼氏が出来ないの… 分かる？」

別にいゝそのうちいい人を見つかるからいいの」

やつはいながらシャミーは、別の週刊誌を手に取り中をめくり、ある記事に目が止まるところなり驚いた。

「ちゅうとシャミー！ いきなり大声上げないでよ……う、嘘でしょ

」
」

「あれあれ……」「んなのあにう！」

三人娘が騒ぎ立てたのは無理も無かつた。この記事の見出しには次のようなタイトルが書かれてあつた。

宇宙戦艦ヤマト艦長古代進大佐、人気歌手リン・ミンメイと密会！？

第7話 ラバーズ・コンチエルト（その7）（後書き）

次回、この記事を巡つてヤマトクルーが大騒ぎ！？
一体どうなる？古代とユキの仲は！？
是非お楽しみに！

第7話 ラバーズ・コンチホールト（その8）

同日 10:46 ヤマト第一艦橋

「ちょ、ちょと古代艦長！これは一体どうした事なんですか！？」

第一艦橋で土門が、例の週刊誌を片手に古代に詰め寄り、島や南部、相原も思わず呆然としながらその週刊誌を食い入るように見ていた。

「ええと……喫茶店で一人きりになつた古代艦長とリン・ミンメイ……お互いの目を合わせ、今にも手を握りそうな雰囲気……って古代！お前、ユキと言つ婚約者がいながらミンメイと浮氣かあ！？」

「ちょっと待て島！それは誤解だ！」は喫茶店じゃない…ミンメイのコンサート会場にあるホールの一角だ！それにあの時、兄貴でマネージャーのカイフンもいたんだ！」

古代の話によると、コンサート前日にミンメイを激励するために訪れ、カイフンも交えて話に花を咲かせていた。

途中カイフンはスタッフに呼ばれて席を中座した時に一人でいる所を撮られたとの事であった。

「とにかく、明日にでも軍広報部の連中と一緒にこの週刊誌編集部を訪ねて抗議するつもりだ…ユキ、済まないが広報部に連絡してくれないか…」

「はい……分かりました……」

ユキは古代に何か言いたげな表情を浮かべ、第一艦橋から通信室へと向かつて行つた。

「……………どうしたんだユキは……………何か言いたそうな顔をしてたけど？」

古代の発言に、第一艦橋の一団は思わず呆れ返つていた。この一ヶ月の間に、古代とユキが会話を交わしたのはほんのわずか。それも任務中のみであると言つ事実は周知の通りであった。

（……………つたく古代の奴は……………いい加減ユキの気持ちも考えてやれよ……）

島は心の中で呟き、溜息をつきながら古代に切り出していた。

「なあ古代、お前最近ユキとマトモに話した事あるのか？」

「ああ、一日前に例の騒ぎがあった時は、ちゃんと話したぞ……それがどうかしたのか？」

古代が不思議そうな顔で島に問い合わせると、呆れた表情の真田が何か言いたげな島を制して代わりに答えていた。

「古代、この前ユキが俺にこぼしていたぞ……“最近、彼の考えている事が分かりません……まるで私を遠ざけているようだ……”とな……お前、何か心当たりがあるだろ？」

真田の問い掛けに、古代は思わず絶句していた。

総数10万人にも上るこの艦隊の人々をどうやって守り抜くか……という事が絶えず頭の中にあり、任務以外のプライベートを切り捨てていたのであった。

（……確かに真田さんの言つ通りかもしれない……任務にかまけてユキの事など全然考えてなかつた……だからこんな写真を撮られるんだよな……）

古代はそつ考えると真田に切り出していた。

「真田さん……色々心配かけてすみませんでした……確かに僕は任務にかまけてユキの事を考える余裕がありませんでした……」

「分かってくれればそれでいい……今はとにかくユキのいる通信室に行つてこい……それと明日とあさつては休暇を取れ！……どうせこの二ヶ月マトモに休んでないからな……」この機会にユキと一緒に、羽を伸ばすんだな……」

古代はそれこそ異議を唱えようとしたものの、真田の厳しい表情を見て思わず頷いていた。

「分かりました……一日間休みを取りさせてもらいます……その間業務の方よろしくお願ひします！」

古代はそつうなり、そのままユキのいる通信室へと向かつていた。

後に残された一同からは思わず笑い声が上がり、その中でも相原が大ウケしていた。

「いやあ～」れじやどつちが艦長か副長か分かりやしませんよねえ

（

その頃通信室のユキは、広報部との打ち合わせを終えた後一人溜息をついていた。

先程の週刊誌の件は気にしてはいなかつたものの、これがミンメイではなく他の女性だつたらただでは済ますつもりは無かつた。あの場で泣きわめき立て古代を困らせるくらいやりかねなかつた。それでもユキは、ここ最近の古代の自分に対する態度が冷たいと思うようになり不安になつていていたのだった。

（古代君の馬鹿……週刊誌の事はどうでもいいから、明日一日私に付き合つてよ…）

実を言え、ユキは明日から一日間の休暇を取つており、その事を先程古代に話したいと思っていたが結局話せずじまいになつていて。その事を思い出し、自然に涙が出て来そつになつた時、古代が通信室に入つて來た。

「あのさユキ……明日とあさつて……空いてる?」

「私は明日から一日間休暇なんだけど……どうかしたの古代君……？」

「実は……僕も休みを取つた……君と同じ日程で……ここ最近君とじつくり話せずにいたから……『めん……』『いいの……』私の方こそ色々話したい事があつても、古代君最近忙しいから……でもうれしいつ……！」

「……」

「どういふとユキは古代に抱き着き、彼の胸元に頬を寄せていた。

「とにかく、マクロス艦内の士官専用ゲストルームの予約をしてく
れ……担当は確かクローディアさんだつたな……」

ユキが古代にキスをしようとした時、一人の通信班員が室内に入つて来たが、古代達がいるのに気付きあたふたとその場を立ち去り、残された一人は笑い転げていた。

第7話 ラバーズ・コンチエルト（その8）（後書き）

前回、派手な予告の割に展開が少し地味だったかも……

次回、時間は少しさかのぼり、舞台をリンボスの衛星グラナダの中
心都市フォン・ブラウンに移します……

第8話 策謀のフォン・ブラウン（その1）

A · D · 2205 8 · 24 11 · 56 フォン・ブラウン第
一宇宙港

リンボスの衛星グラナダの中心都市、フォン・ブラウン……ここは数あるグラナダの都市では最大の人口500万人を擁する中心都市である。

この街の中心近くにある第一宇宙港に、ネエル・アーガマを中心とするロンド・ベル残留艦隊が、補給と休養を兼ねて入港していた。

そのネエル・アーガマのMSデッキでは、愛機ザクの整備に掛かり切りのバーナード・ワイズマン（通称バーニイ）にクリスが声をかけていた。

「ねえバーニイ！せつかくフォン・ブラウンに来たんだから、たまには美味しいものでも食べに行きましょうよー。」

「ごめんクリス！僕はこれから馴染みのジャンク屋にザクの部品を貰いに行くから、君はリイナちゃん達と行ってくれば！？」

バーニイの発言に、クリスはまたか…と言う表情をしていた。

かつてバーニイはネオ・ジオンに所属していたものの、ふとしたきっかけでクリスと知り合い、彼女が敵対しているロンド・ベルの一員とは知らずに何度もデートする仲になっていた。

それがたまたま戦場でクリスの乗るアレックス・ガンダムと交戦した際、通信モニター越しに相手の顔を見た途端にその場で、愛機のザクごと投降したのだった。それ以来、フォン・ブラウンに寄港す

る度にジャンク屋で部品を調達するのが彼のお決まりのルースになつた。

「クリスさん、もういい加減諦めた方がいいですよ……どうせバーニさんはザクにしか目が向いてないんですから……」
「そうよねえ……この際バーニーとの結婚の件、考え直した方がいいかも……」

リイナに諭されたクリスは深い溜息をついていた。

ほんの数ヶ月前、バーニーにプロポーズされた時は思わず有頂天になつたクリスだったが、よくよく考えて見れば彼は自分よりも年下で、しかも元敵兵士だと言うハンデもあり、離れて暮らしている両親にどうやって紹介しようかと思案していたのだった。

「あれこれ考へても仕方ない！リイナちゃん、シンタ君とクムちゃんも誘つて四人で美味しいもの食べに行きましょうー！」
「はーい！それじゃ一人を呼んで来ます！」

第8話 策謀のフロン・フラン（その一）（後書き）

「〇〇〇〇」に出て来たバーニイが初登場です。

彼のザク好きは、スパロボではかなり有名ですが、この作品でも取り上げていきます。

原作では、互いに敵味方である事を知らずに戦つてしまつた二人……
せめてこの作品では幸せそうなクリスとバーニイを描きたいです……
（多分バーニイのザク好きは、ヒートアップしてクリスをヤキモキさせるはず……）

次回、再びシーマ様登場！ついでにオサリバン常務も登場して、キツネとタヌキの腹の探し合い！？

第8話 策謀のフォン・ブラン（その2）

同日 12:16 フォン・ブラン旧宇宙港

フォン・ブランのかつての宇宙港……現在では数えるほどの貨物船が発着するだけの古い港に、一隻のみすぼらしい貨物船が到着し一人の女が降り立った。

それを出迎えたのは、スーツ姿の中年男性……アナハイム・エレクトロニクスのオサリバン常務がその女…シーマをうやうやしく出迎えていた。

「これはシーマ様……よくお出でになられまして……」

「フン……アナハイムもよくやる……メインポート」「ロンド・ベルの連中を入港させておいて、私達には古びた宇宙港……相変わらず商売が上手な事で……」

「あらかじめ連絡はしておいたはずですが……？」

「フッ……まあいい……もし今後同じ事をしたら、今度こそ本気でグラナダにコロニー落としをするからねえ……」

「……心得ておきましょう……それよりもこれをご覧下さい……」

そう言ってオサリバンが胸元から一枚の紙切れを取り出し、シーマに手渡した。

「なるほど……行方不明だった地球本星第一軌道艦隊がこの星系に現れたそうじゃないか……おまけに艦隊旗艦があのヤマト……それに15年前に地球に落下して修復されたSDF-1マクロスもいるらしい……」

「そうですね……おまけにロンド・ベルと行動を共にしてこられたで……」

…

「それと…もう一枚の紙切れには波動エネルギー・コンバータの在庫確認依頼が書かれてあるが…どうやら本星のマヌケ共はエンジンがイカしてゐらしいな…」

「どうやらそのようで…情報によればあと一週間ほどでリンボス空域に到達するようですね…」

「……で、あんたはどうするつもりだね…連中の艦を修復するのかい…？」

「いいえ…私個人としてはそんな事はさせんつもりはありません…例えカーバイン会長の命令があつたとしても…」

「その方がいい…何せ私らは一年前の“星の屑作戦”でのヤマトに酷い目に遭わされたからねえ…」

二年前、ネオ・ジオン軍はリンボスとその周辺空域で大規模な作戦を実行し、地上で連邦駐留軍の行動を釘付けにするのと同時に、スペースコロニー群を襲撃して戦力の分断を謀つていた。

そしてスペースコロニーの一つ、アイランド・イーズを奪取して核パルスエンジンを点火してリンボスにコロニー落としを実行しようとした。

だが、連邦軍総司令部からの要請を受けて出撃したヤマトの波動砲によつてアイランド・イーズは消滅、そのせいでシーマ達は撤退を余儀なくされたのであつた。

「全くあの時程悔しい思いをした事はない…せめて我々にもあの波動砲があればヤマトを逆に潰せたものを…」

「致し方ありませんな…何しろ本星の連中はセコ過ぎますよ…我々には波動エンジン運用技術だけを伝えて、波動砲の製造技術を秘密にすることは…おまけに南極条約の追加事項に波動エネルギー兵器の所有禁止まで明記して…何処まで本星の連中はセコいのか…どうせならこいつその事、地球本星が潰れてくれれば…」

オサリバンの発言を聞いたシーマは、何やら意味有り気ないヤリと
して彼に切り出していた。

「常務……こりだけの話なのだが、我々はもう一度“星の屑作戦”を
やろうと思う……それも規模は前回以上の物をね……それには今一度あ
なたの協力が必要なんだがね……」

「いいでしょ……是非とも何なりと協力させて頂きますよ……」

第8話 策謀のフロン・フラン（その2）（後書き）

以前、世界観設定で「ガンダム系戦艦が、波動エンジンを持つていても波動砲を持たない理由を劇中で明かすと書きましたが、今回の話で明らかにしましたがどうだったでしょうか？」

いかにも取つてつけ感は否定できませんが、その所は「容赦を……」

次回、「0083」に出て来たケリイ・レズナーが登場！ ジャンク屋としてバーニーと顔合わせしますが……

第8話 策謀のフォン・ブラウン（その3）

同日 12:45 フォン・ブラウン工場街

その頃、バーニィはフォン・ブラウンの工場街の一角にあるジャンク屋を訪れていた。

「ケリイさん」無沙汰です、また来ました！ザクのバーツ、良いの入りますか！？」

「来たかバーニィ！その辺のバーツの山にあるから適当に持つて行け……客が来るんでな、あまり散らかすなよ……ところでウラキの奴は元気か……？」

「ええ、相変わらず二ンジンは食べられませんが……」

バーニィの発言を聞いたケリイ・レズナーは少し笑みを浮かべると、作業小屋へと入つていった。

彼もまたジオン軍に所属していたものの、以前の戦闘で左腕を失う重傷を負い、やむなく退役してつてを頼つてジャンク屋を営んでいたのだった。

バーニィが重機を動かしバーツの山からお目当てのザクの部品をより分けていると、この工場街には似つかない一台の高級車がケリイの家の前に止まり、その中から一人の女性が現れて作業小屋へと入つていった。

バーニィは重機を動かしつつその女性の横顔を見て、誰かに似ているような気がしてしばらく考えていると一人のある女将校に思い当つた。

（あの女…変装してゐるナビ…シーマ中佐ぢやないか…?）

バー＝イは重機をオートモードにしてその場から作業小屋にそつと近付くと、内部の話に聞き耳を立てた。

「……それで、このモビルアーマー、ヴァル・ヴァロはいつ納入出来るのだ…?」

「細かい調整さえ済めば、明日の夕方にでも…」

「分かった…代金はその時と言つ事で…ところでケリイ、お前さんは現役に復帰するつもりはあるかね…?」

「悪いがそのつもりはない……今のネオ・ジオンはただのテロリストだ…信念や理想を忘れた所に戻るつもりはない……それに俺には今、身重の妻がいる…彼女やその子供のために、俺は一生ジャンク屋の親父として生きて行くつもりだ…」

「フツ…今のお前さんの発言、耳に留めておくよ…それよりもこのヴァル・ヴァロは新しい作戦のために必要な機体だ、手抜かりがあつては困る…」

（新しい作戦…一体何だ…）

バー＝イは作業小屋から重機に戻る間ひたすら考えていたが、やがてある考えに思い当たり、重機を止めて乗つて来た軽トラックの場所までたどり着いた時、ケリイの妻であるラトーラと鉢合わせした。

「あらバー＝イさん、いらしてたんですね?」

「ああどつもラトーラさん…僕は急用が出来たので帰ります…ケリイさんによろしく…」

バー＝イを乗せた軽トラックがすぐさま走り去ると、ラトーラは不思議そうな表情で作業小屋の中にはいるはずのケリイの側に行こうとした時、彼とシーマが外に出て来ていた。

とつさにラトーラは表情を固くしてシーマを睨むと、シーマは不敵な表情でラトーラと相対した。

「おや……可愛い奥様じゃないか……せいぜい大事にするこいつたね……」

そう言つとシーマは先程乗つて來た高級車でその場を後にして、それを見送つたケリイはラトーラの側に寄り添いながら呟いた。

「心配するなラトーラ……何があつても俺はお前とこの子を守る……」

第8話 策謀のフロン・フラン（その3）（後書き）

「〇〇八三」中盤に出て来た、ケリイとラトーラの登場でした。

この二人、本編では一緒に住んでいても夫婦なのか恋人なのか明確にされてませんでしたが、今作品では結婚しているという設定にしました。

劇中で、「ウのニンジン嫌いの話題が出ましたが、次回以降度々このネタが出て来ますのでお楽しみに！」

第8話 策謀のフロン・フラン（その4）

同日 13:28 ネル・アーガマブリーフィングルーム
「本当なのかバー＝イ！？」のフロン・ブラウンにあのシーマが来てこるのは…？」「

ブリーフィングルームではヘンケンが、工場街から戻つて来たバニイからシーマの件について報告を受けていた。

「それでバー＝イ、シーマが言つてた“新しい作戦”ってどんな内容だったんだ？」

「あまり詳しい内容は聞けなかつたんですが…“星の屑”がビデオとか…」「…!? 連中、また一年前の再現をするつもりなのか…？ 懲りない奴らだ！」

それを聞いたヘンケンは、思わず怒りを表わにして、ジュディーは納得したように頷いていた。

「それでか…この前シャングリラ・クロニーにシーマのおばさんが攻め込んで来たのは…やっぱりブライトさんが言つてた事はホントだつたんだ…」

「でも艦長、この事を早急にヤマトの古代艦長に知らせないと…何かあつてまたクロニー落としでもされたら…いくらネル・アーガマのハイパー・メガ粒子砲でも防ぎ切れません…」にはやはりヤマトの波動砲でなければ…」

心配そうな表情のエマ・シーンをよそに、ヘンケンは深刻そうな表

情で切り出していた。

「実は…先程ヤマトの古代艦長から連絡が入ったのだが…ヤマトを含む旧第一軌道艦隊は全て波動エンジンの出力低下の影響でワープはおろか…切り札の波動砲が使用不能だと言つ事だ…おまけに追撃して来る“奴ら”的目を欺くために、進路を迂回するそうだ…そのおかげでリンボス空域到着予定が一ヶ月後だそうだ…」

ヘンケンの告白に、その場にいた一同は思わず絶句していた。

もしこの一ヶ月の間に、コロニー落としが実行された場合、どのように対応すればいいのか

その場にいた全員がそう考えていたのだった。

第8話 策謀のフォン・ブラウン（その5）

A · D · 2205 8 · 25 16 · 04 フォン・ブラウン工
場街

翌日夕刻近く、フォン・ブラウンの工場街の一角にあるケリイの作業小屋前で、ラトーラがヴァル・ヴァロを取り取りに来たシーマー行に凄まじい勢いで抗議していた。

「あなた達いい加減にして下さこーもつこれ以上私のような戦争孤児を増やさないで下せー！」

「しかしねえ奥様、約束は約束なんだがね……」

「お金なんていりません！私は主人と昨夜話し合つて決めたんです！だから帰つて下せー！」

ラトーラのその発言にシーマは困惑しつつも、それが真実であるかをケリイに問いただしていた。

「おいケリイ、今あんたの奥様から聞いたが本当の事なのかい……」

「本当の事だ、これ以上悲しみに溢れた人々を増やさないためにも、あれを渡す訳には行かない、悪いがこれから鉄屑にする……」

「フン、そうかい、あんたがその気ならこちらにも考えがある……

おい、やれ！」

シーマの命令で、その場にいた部下がラトーラを捕まえ、銃口を彼女の頭に押し付けた。

「――シーマ、貴様――！」

「「」のシーマ・ガラハウを裏切った報いだよケリイー悪いがこの娘と共にお前さんも死んで貰うよーー！」

「ケリイー！私に構わずあなたは逃げて！」

銃口を突き付けられながらも、ラトーラは氣丈に振る舞い、それが癪に触つたのかシーマはラトーラの頬に唾を吐いていた。

「フン…素晴らしい夫婦愛じやないか…だけどねえ、このシーマにはそんなもん効きやしないんだよ！さあどうするんだい！渡すものさつさと渡しちまいな！あたしゃ気が短いんだよ！」

シーマの脅迫にケリイが困惑していた時、「お前達、いい加減にしろー」の声とともにバーニイがライフルを片手に現れ、その後ろからジユドー、カミーユ、クリスがコスモガンを手にして立っていた。

ケリイとラトーラが心配なため、前田のブリーフィングの後にバーニイが三人に声をかけて様子を見に来たところ、案の定シーマ一行が来ていた…と言う次第であった。

「貴様は…確かに裏切り者のバーナード・ワイスマン…おまけにロンド・ベルの坊や達まで…」

「やいシーマのおばさんーその人をさつさと離してやれ！」

ジユドーの怒りに満ちた表情にもかかわらず、シーマは平然と呟いた。

「どうせ「」の辺りが潮時のようだね…お前達、ここはとにかくずらかるよーー！」

「「「了解……」」」

シーマ一行は、ラトーラを捕らえたままその場を離れようとした時、ケリイが隙を見てラトーラを捕らえている兵士に体当たりをしようとした。

だが、その兵士がケリイを銃撃しようとした時、ラトーラが身を持つてケリイを庇つて銃弾に撃たれていた。

ケリイは何とか倒れたラトーラを抱き起こしたものの、彼女は既に虫の息だった。

「ラトーラ、大丈夫か？ 今すぐ病院に連れていく！」

「ケリイ……私はもう駄目……短い間だったけど……幸せでした……」

「ラトーラ、もういい……何も喋るな……」

「あなたと私の子供産めん」

その言葉を最後にラトーラは事切れ、クリスが慌てて彼女の脈拍を探るうとしたものの時既に遅かった。

「ケリイさん……ラトーラさんは……息を引き取りました……」

クリスの涙混じりの告白にて、ケリイはラトーラの側に座り込み彼女の死を悼んでいた。

すると、工場街の一角から爆発音が起こり周囲は煙に包まれていた。

「な、何だあ！？ 工場街が爆発した！？」

「シーマのあばさん達……置き土産に工場街に爆弾仕掛けに行きやがつて……」

バーニィとジユドーの発言で、うつむいていたケリイが思い出した

かのように囁いていた。

「あの辺りは確か…波動エネルギー・コンバータの製造ラインがある工場だ…それにしても奴らは一体…」

同日 16:36 輸送船ブリッジ

『しかしあま…随分派手におやりになりましたなシーマ様…』

資源搬入港から飛び立つたみすぼらしい輸送船のブリッジのメインパネルには、やや呆れ顔のオサリバンが映し出されシーマと会話していた。

「言つたはすだ常務…我々はどんな手段を使ってでも、ロンド・ベルの行動を止めてみせると…」

『だからですか…大量の波動エネルギー・コンバータを持ち出した上で、その工場を爆破したのは…?』

「まあ…こうでもしないと我々の今後の作戦に響くのでねえ…」

『それで…今後はどのようになるおつもりで?』

「フン…それは時が来てからのお楽しみといつ事で…」

『まあいいでしょ…それでは…』

オサリバンからの通信が切れるど、シーマは一人ほくそ笑みながら

呟いた。

「今見ていらう地球本星の奴らめ… そのうひの息の根を止めたせても
ひつみ……」

第8話 策謀のフォン・フラウン（その5）（後書き）

ラトーラを死なせるのは少し抵抗がありましたが、これもストーリーを進めるためにあえて書きました。

登場人物が誰も死なずにストーリーが進むのは違和感があります。これからも登場人物の誰かが死ぬかもしませんが、その所はご容赦を…

（もしかしたら登場人物全員死亡も展開によつてはありかも… 伝説巨神イデオンかつ！？）

次回、ケリイが重大決意！？

第8話 策謀のフォン・ブラウン（その6）

同日 17:25 フォン・ブラウン市街地中央病院

バーニイ達は工場街爆破によつて発生した負傷者で溢れ返る中央病院にいた。

先程の事故の後、真つ先に駆け付けた彼らは負傷者の救助に当たり、また数多くの犠牲者を見るにつけ改めてシーマ一行の残忍な行為に怒りを新たにしていた。

一方、ラトーラを改めて診てもらったものの、本人と懷妊していた子供共々死亡か確認されていた。

靈安室でラトーラの亡きがらに付き添つていたケリイは、しばらくの間うつむいていたものの、やがて何事かを決意したのかやおら立ち上がり、その場を立ち去るうとした。

それに気付いたバーニイが彼を止めようとしていた。

「ケリイさん、何処に行くんですか！？」

「バーニイ、俺はラトーラや犠牲になつた人々の無念を晴らすために、今からヴァル・ヴァロに乗つてシーマを叩きに行く！」

「そんな無茶です！シーマ中佐はあなた一人でどうこうできる人じやないんです！」

「そうです！バーニイの言つ通りです！」

バーニイに続いてクリスも止めに入つたものの、ケリイは頑として聞く耳を持つていなかつた。

「お嬢さん、止めないでくれ……これは俺の戦いだ……今までの償いをしなければならないんだ……例えこの俺の命が無くなるとしても……！」
「だったら……生きて償いをすればいいじゃありませんか……もしかなたさえ良ければ、ロンド・ベルに来ていただけませんか……？」

クリスの突然の提案に、ケリイは正直困惑していた。かつて自分達と戦つてきた敵が自分に手を差し延べるとは思つてもみなかつたからである。

「いいのか……俺はお前達の敵だった男なんだぞ……それをお前達の仲間は簡単に受け入れるのか……？」
「大丈夫ケリイさん……よく言つてしまわないか……”昨日の敵は今日の友”ってね！」
「ジユドーの言つ通りですケリイさん……前例としてこじぬいのバー＝イさんがそうでしたから……」

ジユドーとカミーゴの発言に、バー＝イは頭をかきながら笑みをうかべていた。その様子を見たケリイはふと溜息をつきながら呟いた。

「フッ……確かにバー＝イでも多少は役に立つてはいるんだな……バー＝イに出来て俺に出来ない訳がない……分かった、ここはお前達の世話になる……あのモビルアーマー、ヴァル・ヴァロも一緒にな……」

「……」

第8話 策謀のフロン・フラン（その6）（後編）

ケリイ・レズナーがロンド・ベルに加入しました。今後の彼の活躍にご期待下さいませ！

次回、ゼントラーディ軍に増援部隊が派遣されて来ます。部隊長はあの迷惑男！

第9話 激戦！第5惑星リンク（その1）

A · D · 2 2 0 5 8 · 2 6 1 8 · 5 6

第5惑星空域ブリタイ艦

ブリタイ艦のブリッジでは、ブリタイが先程から苛々しながら歩き回っていた。日頃あまり感情を表に出さない彼が、この日に限って苛立ちを見せるのはよほどの事らしく、側に控えていたエキセドルが恐る恐る切り出していた。

「あのブリタイ司令…いかがなされました？」

「ふむ…実は増援部隊が今日着任するはずだったのだが…まだ合流せんのだよ…」

「はて…一体何処の部隊が合流するのですか？」

「ボドル基幹艦隊、第109分岐艦隊所属第7空間機甲師団だ…」

その部隊名を聞いた途端、エキセドルは思わず慌てふためき、持つていた端末を落としそうになつた。

「まさか…あのカムジン・クラヴショラの部隊ですか…？いけません！彼の通り名は「存知のはずですぞ…」

「分かつている…“味方殺し”だる…」

「知つておられるなら何故彼の部隊を…私は知りませんぞ！何があつても一切関知しませんぞ…」

エキセドルが叫ぶのと同時に、ブリタイ艦の艦体に衝撃が走るヒーダー要員から報告が入つた。

「友軍艦隊デフォールド！近過ぎますっ……」
「だ…だから言わんこつちやない…」

エキセドルが床にへたり込むのと同時にカムジンから通信が入つて來た。

『第109分岐艦隊第7空間機甲師団カムジン・クラヴシェラ、ただ今着任致しましたーっ！…』

通信パネルに姿を現したカムジンは、√サインを出しながらブリタイに着任の報告を行つていた。

その横から副官のオイグルがカムジンにそつと囁いていた。

『団長、ぶつかつた艦は5隻ですぜ…賭けは俺の勝ちつて事で…』
『やめとけオイグル…今、ブリタイ司令殿に挨拶しているんだ、少しほ控えろ…』

これを見ていたブリタイは少し顔をひきつらせながらも、カムジンに切り出していた。

「カムジン！せつかくやつて来たチャンスを不意にするつもりはあるまい！今後は私の指揮下に入るのだから、命令は順守するよう！さもなければ送り返す事になるのだからな…」
『…………分かつたよ…で、俺は何をすればいい？』

「前方に見える惑星リング上にマイクローンの艦隊を誘い込み、奴らを捕獲して欲しい…できれば無傷でな…」

『了解…それで作戦はいつ決行だ？』

「これから具体的な事を決めねばならん…遅くとも24時間以内には作戦開始できるはずだ…」

『了解！そんじゅ楽しみに待ってるからよ。』

第9話 激戦！第5惑星リンク（その1）（後書き）

“味方殺し”ことカムジンの初登場でした。

マクロスTV版では暴れまくっていたカムジン…

今回の作品中でも大いに暴れまくるでしょう…

カムジン・クラヴシエラ

「今回もこの俺様が主役だ〜〜〜つ！〜〜〜今度はマクロスの連中をぶつ潰す！」

第9話 激戦！第5惑星リンク（その2）

A · D · 2205 8 · 27 10 · 56

マクロス艦内市街地カフェテリア

その頃、ロンド・ベルは第5惑星に近付きつつあった。そんな中、古代とユキは朝早くからマクロスに出発していた。
この日は珍しく敵襲も無かつたため、そのおかげで一人は早く出発する事が出来たのであった。

古代が軍広報部員と共に週刊誌編集部を訪れている間、ユキはクローディア、フォツカー、それに三人娘とお茶を飲んでいた。

「これ、頼まれてた映画のチケット…それとレストランの予約、入
れといておいたわよ…」

「すいませんクローディアさん…何か急に無理言つたみたいで…」

ユキがクローディアにペコリと頭を下げていると、シャミーがうら
やましそうな表情で呟いた。

「いいなあ～ユキさん～これから古代艦長と一緒にドートードだな
んてえ～！」

「いらっしゃい～～アンタ何物欲しげに言つてんの～？」

キムの突っ込みにシャミーが小さくなると、その場にいた一同から
笑い声が上がっていた。

「でもまあ良かつたじゃないかユキちゃん！アイツもやつと休む氣

になつたんだ、せめて今夜は……ムフフ……！」

「もうつ！フォッカーさんつたら相変わらずエッチ何だからあ！」

フォッカーの意味ありげな発言にユキが赤くなつて抗議している所に、古代が姿を現した。

「あ～つお帰りなさい古代艦長！お疲れ様で～す！」

「……シャミー君…君はどこかのメイド喫茶の店員か？」

シャミーの発言に古代が呆れるのと同時に再び一同から笑い声が上がつていた。それが落ち着くとフォッカーが古代に編集部との事を切り出していた。

「それでどうだつた…上手くいつたか？」

「ああ、万事全て解決さ…編集長が平謝りして、来週発売の週刊誌にお詫びの記事を掲載するつてさ…」

「じゃあ、あのスクープ写真はヤラセみたいなもんか？」

「どうやらそららしい…カメラマンが、俺とミンメイが一人きりになるチャンスを待つてたらしい…」

意外な事の成り行きに、その場にいた一同は思わず椅子からずり落ちそうになつっていた。そんな中、ユキが手元の時計を見て古代に催促していた。

「ねえ古代君、そろそろ映画始まるわ…早く行きましょ～よ…」

「ああ、そうだな…じゃあそういう事で…」

二人がいそそとカフェテリアを後にすると、再びシャミーが呟いていた。

「あ～あ……行っちゃった……映画見て食事してそれから…………いやあ
ん!?」

「シャミー……アンタ妄想し過ぎぞ……」

第9話 激戦！第5惑星リンク（その2）（後書き）

ふと思つたのですが、シャリィは何となくメイド喫茶の店員にいもうなタイプではないかと…

初代マクロスは今時のアニメを先取りした感がします。

次回、輝と未沙が再び喧嘩！？

第9話 激戦！第5惑星リンク（その3）

同日 11:09 マクロスマインブリッジ

メインブリッジで未沙は、一枚の人事発令書を目の前にして気分が重くなっていた。その書類には、ミンメイを助けた事により少尉から中尉への昇進が書かれており、自分と同階級となるために思わず絶句していた次第であった。

（何であの命令違反男が昇進しなきやならないのよ…これじゃ世も末ね…）

未沙がそう思っている所に、先程偵察に向かった時の本人から通信が入っていた。

『バーミリオンリーダーよりデルタ1へ！艦隊周囲50宇宙キロ圏内の偵察完了！これより帰艦します！』

（偵察に飛び立つて30分しか経っていないのにもう帰艦…？…少しあ炎を据えなきや…）

そう思つた未沙は早速輝に返答を開始した。

「…ヒカラーテルタ1、あなたちゃんと偵察したんでしょう？…万一と詮つ事もあるんだからもう一度偵察して来なさい…」

同日 同時刻 輝のバルキリー「クピット

輝は未沙の通信を受けたものの、釈然としない気分になっていた。

（一体何言つてんだあのおばさん…人が報告してんのにあんな言い方無いだろつ…）

一瞬のうちにそう思い、反論するべく未沙に返答を開始した。

「あのですねー異常が無いんだから帰艦するつて言つたんですーそれをもう一度つてどうこいつ事なんですかー？」

『あなたね、念には念を入れた方がいいのーとにかくこれは命令ですーせつせつと行きなさいー』

「…………つたく…分かりましたーもう一度偵察しますつー以上ー」

『ちょ…ちょつと…』

未沙からの返答もそこそこに通信モニターを切り、輝はマックスと柿崎にもう一度偵察に向かいつゝ話を告げると、柿崎が溜息をつきながら呟いていた。

『隊長…あの中尉、なんか嫌な感じつすねえ…せめてヤマトの森大尉だつたら喜んで従うんすけど…』

『柿崎君、ぼやかないぼやかない…』

マックスからも通信が入ると、輝まで溜息をつきながら呟いていた。

「まあ、とにかく仕方ない…もつ一度偵察しますか…」

第9話 激戦！第5惑星リンク（その3）（後書き）

輝と未沙、相変わらずの仲の悪さですが、そのうち二人の間が接近していくのはずです。この作品では、それまではかなり時間がかかりますので「容赦を…」

第9話 激戦！第5惑星リンク（その4）

同日 21:15 ゲストルーム

「今日は楽しかったわあ！映画も良かつたし、お食事も美味しかつたし！」

マクロス艦内にある士官専用ゲストルームでは、ユキが今日一日を振り返り、飛び切り上機嫌で古代に話しつけていた。
彼女の首元には、古代からプレゼントされたネックレスが光り輝いていた。

「それにこのネックレスまで買って貰つて…高かつたでしょ？」
「そんな事ないよ…君が店先のショーウィンドウを見て欲しいそぶりしてたからね…プレゼントしたかいがあつたよ…」
「ええつ本当に？ありがとう古代君！」
「別にいいよお礼なんて…たまにこうじつ事しないと“釣った魚に餌やらない”って言われそだからな…」

古代の発言にユキは思わず彼に突っ込んでいた。

「私はお魚かい？？そんな事言つならお仕置きだべえ～～！」
「…………君は昔のアニメキャラか？…………それよりもそのお仕置きつてどんなのだよ？」

古代が呆れた表情で呟くと、ユキは赤くなりながらも呟いた。

「とつても…エッチな…お仕・置・き…………今夜は寝かさないわ…」

「それ……僕が言つべき台詞なんだけど……まあいいやお姫様……」要望に答えて……」

古代がユキにキスをしようとした時、彼の携帯電話が鳴り響き出でみると、相手はフォックターだった。

『いよ～つ古代！俺だあ～～！もしかしてお邪魔だったかあ～！？』

フォックターのあまりの酔っ払い振りに内心呆れつつ、不満顔のユキを田にしながら古代は切り出していた。

「一体何の用事だフォックター……俺達これから……」

『わあ～～つてるよ！でもその前に久々に一杯やらないか～？』

『いや…しかしなあ…』

『ユキちゃんの事だろ？大丈夫！今、隣にクローディアに早瀬、それに二ナさんにウラキもいるから一緒に来ればいい！場所は市街地のど真ん中にあるラウンジバー“カサブランカ”だ…そこで飲んでるからな、待ってるぞ…』

フォックターが話すだけ話すと一方的に電話を切られ、古代は少し困惑していた。

「……全くアイツは昔からこうだ…まあお楽しみは後回しにして行きますか？」

「仕方ないわね…でも一杯だけよ…そつじやないと…ね…」

第9話 激戦！第5惑星リンク（その4）（後書き）

実はこの作品、数年前に大学ノート5冊といつボリュームで完成したものを公開しています。特に、古代とユキのラブシーンはここでは公開できないくらい過激なもので、この作品発表にあたり内容を大幅に改めてお送りする事にしました。

次回、マクロス劇場版をほぼ再現します。

第9話 激戦！第5惑星リンク（その5）

同日 21:30 ラウンジバー“カサブランカ”

古代とユキが指定されたラウンジバー“カサブランカ”にたどり着くと、二ナ・パープルトンが立ち上がって二人を迎えていた。

「古代艦長、それに森さん、せつかくの休暇のところを御呼び立てしてすみません…フォックカー少佐がどうしても一人を呼べって言うので…」

二ナが申し訳なさそうに言いつと、古代もまた切り返していた。

「いやあいいんです…アイツは昔からそうでしたから…やつぱり二ナさん達もそうだったんですね？」

「ええ…実はさつきまでいたモンシア中尉に連れて来られたんですけど…それが中尉と後から来た早瀬さんが揉めちゃって…」

古代がそつと未沙の方を見ると、ムッとした表情でソファに座っているのが見てとれた。その様子をみたユキは二ナにそつと耳打ちしていた。

「それでそのモンシア中尉は今どこにいるの？」

「運良く佐渡先生がいらして、中尉を外に連れ出しました。今頃二人でどこかで飲んでいると思いますよ…」

「何か佐渡先生にまで迷惑掛けちゃつたらしいな…」

古代達三人が立ち話をしていると、既に出来上がった状態のフォックাが話しかけてきた。

「うわーいそこの三人！立つてないでさつさと座れー改めて乾杯するだおー」

三人はフォックাの勧めでようやく席に座り、乾杯すると、コウが青い顔をしてテーブルの上を凝視していた。それに気付いたユキがコウに話し掛けていた。

「どうしたのウラキ君、顔色が悪いわよ？」

「あの森さん…実はコウはニンジンが苦手なんです…」この名物の野菜ステイックを頼んだらこれが出て来たと言ひ訳で…」

二ナの説明にコウを除いた一同が爆笑していると、輝が書類を片手に現れた。

「少佐、明日のパトロール予定表をお持ちしました…」

「ん…」苦労…まあお前も一杯やって行け…」

「はあ…しかし…」

輝はそう言いながら未沙の方を見ると、ムッとした彼女の表情が目に入り、思わず気兼ねしていた。

未沙の方もそんな輝の態度に気付くと、即座に席を立つていた。

「私帰ります…お邪魔でしうか…」

「ちょ、ちょっと未沙…」

慌ててユキが未沙を止めるのを見たフォックাは輝と未沙を一喝していた。

「うら輝ーとにかく座れーそれに早瀬ーお前もだー」

未沙は無言のまま席に座り直し、輝はその隣にそっと座っていた。相変わらずムツとした表情の未沙を見て、フォッカーは彼女に話を振っていた。

「何だ早瀬そのツラは…仕事を離したら少しばらしくしろ…見てみろ…コキちゃんや一ナさんなんか一段と綺麗じやないか…」

フォッカーに話を振られた二人は思わず赤くなつたものの、相変わらず無言のままの未沙にフォッカーがさらに続けていた。

「いいか早瀬…いくらお前さんが女性初の士官学校首席卒だからってお前は女だ…時には男の言つ事が間違いであつても素直に認めるのも大事なんだ…」

それでも未沙が無言でいるのを見ると、今度は古代に話を振つていた。

「おい古代…お前はいつになつたらコキと結婚式を挙げるんだ…いつまでも先伸ばしじゃあ彼女に対しても失礼だぞ…それに輝とウラキ！男つてのはなあ…時には強引さが必要なんだ…好きな女がいたら力付くでもモノにしなきやイカん…」

フォッカーの演説に困惑する一同を見たクローディアは、彼を止めるために切り出していた。

「ちよつと口イ…飲み過ぎよ…話がだんだんぐくなつてゐわ…」

クローディアの忠告にもかかわらず、フォッカーはさらに話続けっていた。

「いいか、今からお前達に男と女の愛の素晴らしさを見せてやる…

目を開いてよく見とけ…クローディア…愛してるぜ…」

「ちょっと口イ！みんなが呆れて……」

クローディアの抗議にもかかわらず、フォッカーは強引に彼女を押し倒し、それを見ていた一同はただ呆然としていた。

するとそこに携帯電話が鳴り響き、思わず全員が自分の携帯電話を取り出していた。（その場にいた全員の着メロが、ミンメイの持ち歌“私の彼はパイロット”だった…）

鳴り響いていた持ち主の輝が話し始め、やがて切羽詰まった表情で電話を切ると一同に切り出していた。

「あの…家族の者が急病で…とにかく失礼しますっ！」

そう言つと早にその場を去つていった輝を見たフォッカーは不審な面持ちで呟いた。

「ああー？家族だあー？」

第9話 激戦！第5惑星リンク（その5）（後書き）

今回、携帯電話ネタを使ってみました。着メロが同じなら、その場の人々は必ず一度は手に取るでしょうから、

何かタイトルに偽りありの状態が続きますが、今一度お待ち下さいませ。

第9話 激戦！第5惑星リンク（その6）

同日 21:55 マクロス艦内展望室

誰もいない展望室に、サングラスを掛けたミンメイが一人ベンチに座っていた。そこに輝が息せき切つてやって来た。

「お待たせミンメイ……」

「やだ……分かつちゃった？」

ミンメイはサングラスを外しつつ、照れ臭そうに微笑んでいた。

「だつて誰もいないし……それに私服姿で写ってる写真集、持つてるから……でも僕のケータイ番号、よく知ってたね？」

「あら忘れたの？」この前閉じ込められた時、番号とアドレス交換したじゃない……」

輝が電話のメモリーを確認すると、確かに番号とメールアドレスが載つており、やつと以前の事を思い出していた。

「あ、ゴメン！今思い出した……それよりも今日はどうしたの？」

輝が尋ねると、ミンメイは淋しげな表情で呟いていた。

「私……疲れちゃった……今の生活に……この前の件でマスクマスクに追いかかれるし、それにまた古代さんに迷惑掛けちゃって……」

「ああ、あの件なら大丈夫！古代先輩が軍広報部の人と掛け合つて、週刊誌編集部とは話がついたってわ……」

「そり……それならいいんだけど…………あ、あれ……」

ミンメイは、展望室の窓外に見える第5惑星のリングに思わずくぎづけになっていた。

「綺麗ね……行つて見たいな……あんな所に……」

回日 22:15 第5惑星リング上

その頃第5惑星リング上では、カムジン達の部隊が集結し、ロンド・ベルを誘い込む準備を完了しつつあった。

「団長！全員配置に着きました！ いつでも行けます！」

「よし野郎共！ これより作戦を開始する！ A部隊はこれよりマイクローンの艦隊を攻撃しつつ、この惑星リングに誘い込め！ 後は俺達の部隊がマイクローンの奴らを捕らえてブリタイの親父の所に連れて行く！」

その時部下の一人が、接近しつつある所属不明機を捉えていた。

「団長！ 所属不明の小型機が一機こちらにやつて来ます！」

「何だつて！？ フン、俺達が行かなくても連中からやつて来たじゃねえか……よし野郎共！ 作戦変更だ！ あの小型機を狙う！ 行くぞ！」

第9話 激戦！第5惑星リンク（その6）（後書き）

よつやく話が動き出しました。これから先はマクロス劇場版のストーリーに沿つて進む予定です。

原作劇場版通りの展開になるかどうか…是非お楽しみに！

ロイ・フォッカー

「え……俺やつぱり戦死！？」

作者

「ああ……ひでしょい！」

第9話 激戦！第5惑星リング（その7）

同日 22:16 第5惑星リング上

「うわあ～綺麗～やつぱり来てよかつた！」

輝が操縦するバルキリーの機内で、ミンメイが着けていたヘルメットを外しながら歓声を上げていた。

しかし、急に不安になつたのかそつと彼に問い合わせていた。

「ねえ……勝手に持ち出して、後で怒られるんじゃないの？」
「平気平気！ どうにかなるつて！ それっ行くよ！」

輝はバルキリーのエンジンをフルスピードにするとリング内に突入し、縦横無尽に動かしているとミンメイは思わず目を伏せていた。やがて一人を乗せたバルキリーは氷塊を抜けると、前方には虹が見え、輝に促されたミンメイが見ると思わず歓声を上げていた。

「うわ～っす～」お～い！ 宇宙に虹が出来てるう～！」

上機嫌になつたミンメイは、自分の持ち歌である“サンセットビー
チ”をアカペラで口ずさみ、それを聞いた輝もまた上機嫌でバルキリーを操縦し、つかの間の時間を過ごしていた。

だが、そんな時間も突然の通信が入つて終わりを迎えた。ミンメイはモニターに映し出された未沙から逃れようと、持つていたヘルメットで思わず自分の姿を隠していた。

『隠れても無駄ですよミンメイさん…』

「すみません……」

「早瀬中尉……」

輝も思わず申し訳なさそうな表情で未沙を見ていた。モニターに見える未沙は呆れた表情で切り返していた。

『呆れたわ……バルキリーを私用で使うなんて……』

『輝が悪いんじゃないんです……私が無理矢理……』

ミンメイが自分が悪いと説明しようとした時、未沙の横からカイフンが顔を出していた。

『ミンメイー早く戻るんだー!』

「兄さん……」

『一條君、今度の事がマスクミミにばれたらいミンメイの歌手生命は終わりだ……軍上層部には手を打つたが、君に対しては容赦しないからな!』

『分かっています……厳罰は覚悟の上です……』

『何て軍人だ!早く戻りたまえ!』

『分かりました……帰ろう、ミンメイ……』

輝が後ろにいるミンメイの方を振り向くのと同時に、レーダーから敵襲の警告音が発せられていた。

「や、やつばーーーーー!」

敵襲の報は、未沙とカイフンの乗っている内火艇にももたらされた

いた。

カイフンは、不安のあまりに未沙に向かつて叫んでいた。

「な、なんとかしたまえっ！」

「分かっています！……」さくら早瀬です！フォツカーソ佐の部屋に
繋げて下さい！」

同日 22:25 第5惑星リング上

一方、カムジンの部隊は接近してくる一機の小型機を的確に捉えて
いた。

「野郎共！マイクローンの連中を逃すなよ！A部隊はあの小型機を、
俺の隊は戦闘機を狙う！」

「「「了解！－！」」」

第9話 激戦！第5惑星リンク（その8）

同日 22:30 マクロス艦内士官居住区

「全くロイドたら飲み過ぎなんだから…」

フォッカーの部屋で、クローディアが呆れた表情でソファに寝転ぶ
フォッカーを見て呟いていた。

傍らには、先程のラウンジバーからここまでフォッカーを抱き抱えて運んだ古代とコウ、それに心配してついて来たユキが立っていた。

「全くコイツは昔からこうだ…全然変わりやしない…」

「しかしウチのモンシア中尉もそうですが、フォッカー少佐も凄い飲みっぷりでしたね…二ナなんか呆れ果てて先に帰っちゃいましたから…」

古代の発言にコウも同意していると、ユキがベッドから枕と毛布を持つて会話に入っていた。

「でもこれで佐渡先生が加わつたら、地球圏一の酒飲みトリオになるわよね…」

「ユキ、それを言つなら“宇宙一”よ……とにかくゴメンなさいね最後まで付き合つてもらつて……とにかくみんな“いい夜”を…」

クローディアがそう言つた時室内の電話が鳴り響き、彼女が取りしばらく話すと緊迫した雰囲気に包まれていた。それに気付いた古代がクローディアに問い合わせていた。

「どうしたんですかクローディアさん…？」

「未沙からなんだけど、一條君とミンメイさんを連れ戻しに出たら敵襲にあつたつて…それでロイに出撃してくれって言つてるけどこの状態じゃ…」

「悪いけど代わってくれ……早瀬君、古代だ！フォッカーに代わつて俺が出る！」

古代の突然の申し出にその場にいた一同は勿論の事、電話の向こう側にいる未沙も驚いていた。

『でも古代艦長…』

「とにかく事態が切迫しているんだ！今からならまだ間に合つ…それまで持ちこたえてくれ！」

『了解！急いで下さい！』

未沙からの連絡が切れるごと、古代はクローディアに切り出していた。

「クローディアさん、悪いがバルキリーの用意を頼む！それからマックスと柿崎に出撃命令を出してくれ！指揮は俺が執る！」

「分かった！アームド01に連絡して古代君の乗るバルキリーを用意させるわ！」

「あの、古代艦長！自分も同行させて下さい！」

「ウは今までのやり取りを聞いて、自分も出撃する事を決意し、古代に切り出していた。

「しかし…君のガンダムは…」

「大丈夫です！自分のガンダムフルバー＝アンなら、ブースターパ

ツク付きのバルキリーに十分付いて行けるはずです！」

「分かつた…この際少しでも戦力が多い方がいい…頼んだぞ！」

「了解！」

コウがそう言って一目散にフォックナーの部屋を出て行くと、ユキが不安そうな表情で古代に呴いていた。

「古代君…大丈夫なの…？」

「ユキ…僕は必ず帰る…それまで待っていてくれ…」

古代はそう言いつとすぐさまアームド01へと向かって行つた。なおも不安そうな表情のユキにクローディアが切り出していた。

「ユキ、私はブリッジに上がるけどあなたも行く？」

「はい…そうさせて下さい…ゲストルームで待つよりかはブリッジにいた方が…」

クローディアは頷くとユキを伴いブリッジへの道のりを急ぐべく、フォックナーの部屋を後にした。

しばらくしてフォックナーがソファから起き上がり、冷蔵庫にあつた水を飲み干して呴いた。

「……………つたく古代の奴…相変わらずお人よしだな…」

第9話 激戦！第5惑星リング（その9）

同日 22:39 マクロスメインブリッジ

クローディアとユキがブリッジにたどり着くと、シャミーがおぼつかない様子で管制業務を代行していた。その様子を見たクローディアはシャミーに切り出していた。

「シャミー、管制業務をユキに代わって！ユキだったら連邦軍本部で何度も経験してるから！」

「分かりました！ユキさんお願ひします！」

シャミーに代わってユキがインタークムを付けないと同時に、アームドロードにての古代から連絡が入っていた。

「こちら古代！早瀬中尉達の現在位置は！？」

「デルタより古代大佐へ！早瀬中尉達の現在位置は、艦隊右舷3時方向50宇宙キロ、ポイントN-25第5惑星リング上です！急いで下さい！」

「了解した！それと今後はこちらのホールサインは“イーグル”で頼む！」

古代とユキが会話している間に、連絡を受けたグローバルがブリッジに到着していた。

「済まんな古代君…フォッカーの奴が酔っ払ってなければこんな事は無かつたのに…」

『酔っ払いで悪かつたつすね～艦長～！…』

突然聞こえてきたフォックナーの声に、ブリッジ一同は思わず絶句しやつとの事でクローディアが問い合わせていた。

「ちょっと口イ！あなた今ビニ…」

『アームド02の格納庫さ…とにかく俺も出るからユキちゃんようしな…』

『了解です！フォックナー少佐は、ウラキ少尉のガンダムと共に古代大佐達の後に発進して下さい！』

『了解した！古代、先に行け！後で追い付く！』

『分かった！イーグル1、及びマックス・柿崎機発進する…』

古代及びマックス・柿崎がアームド01から発進するのをブリッジで確認していたユキは、祈るような想いで念じていた。

（古代君、無事に帰つて来て…）

同日 22:45 第5惑星空域 古代のバルキリー・クピット

アームド01から発進した古代は、早速マックスと柿崎に通信を入れていた。

『イーグル1からマックス、柿崎機へ！一條中尉に代わって俺が指揮を執る！ぐれぐれもよろしく頼む！』

『了解です！歴戦の勇士のお手並み拝見させて頂きます古代大佐！』

『そうですよ！大佐は自分達にとつて英雄ですからね！勉強させて頂きます！』

マックスと柿崎の返答に、古代はフォックナーが普段彼らにどんな教育をしているか思わず納得していた。

（さすがだなフォックナー……ちゃんと教育してるじゃないか……さすがヤマトの元クルーだ……）

そう思つてゐる間に、フォックナーのバルキリーとコウのガンダムフルバーニアンが追い付いていた。

「イーグルーよりスカルリーダーへ……お前、大丈夫なのか……？」

『なあに、これくらいどうつて事はない……それよりも古代、こうやって並んで飛んでもると昔を思い出すな……ヤマトがイスカンダルに行つた時の事を……あの時お前さんはまだ士官学校を出たてのヒヨツ子で、よく沖田のオヤジに怒られてたつけな……』

「ああ……そのおかげで今の俺がいる……って思い出話してゐる場合じゃないだろうが！」

『そうだった！ それじゃ俺は先に行つてるからよ……』

そう言つとフォックナーのバルキリーはフルスピードを出してその場を離れ、古代は呆気にとられながら駆け立った。

「……つたぐ……」いつこうといふのも昔から変わりやしない……

第9話 激戦！第5惑星リング（その9）（後書き）

この小説を書きたかつた理由その2　　古代進をバルキリーに乗せてみたかつたからです。

彼の愛機はコスモゼロですが、それ以外の機体でも難無く乗りこなせるだろうと思つたからです。

コスモゼロは今現在、ヤマトの艦載機格納庫に保管されており、物語中盤辺りにある人物が搭乗する事になりますが…

果たして誰が乗るのかご期待下さいませ！

次回、第5惑星リング上は大混戦！

第9話 激戦！第5惑星リング（その10）

同日 22:51 第5惑星リング上

「畜生！しつこい奴らだ！」

輝は押し寄せるバトルスーツ隊を巧みにかわしながら叫んでいた。今更ながら訓練用のバルキリーに乗っている事を後悔していた。一方、未沙の方はなかなか攻撃してこない敵の動きに不審に思い始めていた。

「おかしいわ……敵は何で撃つてこないのかしら…………ええつ！？」

未沙とカイフンの乗つている内火艇は、とうとうバトルスーツ一機に組み付かれ、身動きが取れなくなっていた。

同日 同時刻 カムジンのバトルスーツコクピット

『団長！小型機一機確保しました！』

カムジンの乗る指揮官用バトルスーツ“ヌージャデル・ガ”のコクピットに部下の一人から報告が入っていた。

「よし上出来だ！あと一機の戦闘機モドキさえ確保出来れば後は言つ事無しなんだが……あの野郎ただ者じゃねえ！こっちの動きを熟知してやがる！何がなんでも奴を捕まえろ！」

『了解…………！？』

「おこづかしたつー?返事をしらつー?」

カムジンの問い掛けに、別の部下が切羽詰まつた表情で切り返して
いた。

『団長！3時方向からミサイル群キャッチ！おそれいへマイクローンの増援だと思われます！』

同日 22:56 輝のバルキリー「クピット

それは突然の出来事だつた。今まさに輝のバルキリーに接近しようとしたバトルスースが、いきなり爆発四散していくのであつた。

「一体何だ……何が起こつたんだ……？」

輝が叫ぶのと同時に、機内のモニターに反応があり、そこにはフォツカーノの姿が映し出されていた。

「せ、先輩～～！来ててくれたんですか！？」

「たけとなくサニタ! 男たる者
にはなくちやイカン。……ヒツケ
!!!!」

「あの先輩……もしかしてまだ酔つてます？」

『バーロウ～～～！酒が怖くて戦争なんか出来るかって～～～の！

?

輝と会話をしている最中にも、フォツカ一は巧みに機を操縦しつつ、敵部隊を的確に攻撃していくた。

そんな中、古代、マックス、柿崎のバルキリー三機並びにコウのガンダムフルバー二アンが追い付いていた。

同日 同時刻 古代のバルキリー・コクピット

フォッカーに遅れながらも、古代率いる臨時編成のバルキリー隊“イーグルチーム”とコウのガンダムフルバー二アンは、ようやく戦場に到着しつつあった。

「一条！無事か！？」

古代が通信モニターを開くと、輝とミンメイの姿が映し出された。

『古代先輩まで……それにマックス、柿崎……それにウラキ少尉のガンダムまで……』

輝が申し訳なさそうな表情をすると、古代は彼に切り出していた。

「一条、ここは俺達に任せてお前はマクロスに帰還しろ！」

『ええ……ですが、早瀬中尉とカイフンさんが敵に捕らえられて……』

「とにかく、二人は俺達が救助する！お前は早く戻れ！これは命令だ！」

『了解……くれぐれも気をつけて下さい古代先輩！』

古代の命令により、輝は直ちにバルキリーをマクロスに向けて行った。

「イーグルより各機へ！これより部隊を二つに分ける！俺と柿崎、

ウラキは早瀬中尉達を救助に向かう！フォッカーとマックスは敵の
目を引き付けてくれ、以上だ！」
『『『了解！！！！』』』

古代達三人はフルスピードで、捕らえられた末沙達の乗る内火艇を
追撃して行つた。

第9話 激戦！第5惑星リング（その11）

同日 23:05 第5惑星リング上カムジン機

「クソッたれ！あの戦闘機モドキを追いかける！」

カムジンは、自機のコクピットで部下達に叫んでいた。ほぼ目的が達成されようとした時に、突然敵の増援が現れたものだから慌てふためくのは当然の事であった。

「あんにゃりうー！」のカムジン一家を舐めるんじゃねえー！今にギャフンと言わせてやる！」

カムジンが叫んでいると、戦闘機モドキ（輝の訓練用バルキリー）を追跡していた部隊が後方から来た一機の戦闘機（フォッカーとマックスのバルキリー）がミサイル群を発射し、追跡部隊をあつという間に全滅させていた。

気が付けば、自分以外にいるのはほんの数機だけという事に気付いたカムジンはしばしの間呆然としていた。

「やるなマイクローンめ…まあいい…今回だけは見逃してやらあ…さつきの小型機だけでもサンプルは手に入れたからな…！」にはおとなしく引き揚げるぜ…」

同日 同時刻 ブリタイ艦内格納庫

一方、古代達は末沙達の乗つている内火艇を追つて、ブリタイ艦内

に侵入していた。

ミサイルやビームライフルで周囲を破壊しつつ格納庫に侵入した三人は、どうにか内火艇を発見していた。

未沙の方もバルキリー二機とガンダムを確認すると、古代に連絡を入れていた。

「大佐達…無事ですか！？」

「ああ…何とかな…とにかく早く降りてくれ！」

古代の問い合わせに応じ、未沙とカイフンが内火艇から降りていると、大勢のゼントラー＝ディ兵士が姿を現し、逃げ遅れた未沙を捕らえるとカプセルの中に放り込んでいた。

そんな中、カイフンが柿崎のバルキリーに何とか乗り込むのを確認した古代は、柿崎に切り出していた。

「柿崎、ミサイルを発射してその破壊口から脱出しき！早瀬君は俺とウラキで救助する！」

『了解！大佐、ご無事で…』

柿崎は直ちにミサイルを発射しその破壊口から艦外へと脱出して行つた。

その間にも格納庫内では激戦が繰り広げられ、古代のバルキリーとコウのガンダムフルバー＝アンは次第に追い詰められていた。

やがてガンダムフルバー＝アンのブースターと頭部が破壊され、コウはやむなく脱出せざるを得ない状況に陥つた。

いつも出撃する度にコウは二ナから“私のガンダム、必ず持ち帰つてよ…”と何度も言っていたものの、今回だけはその約束は果たせそうになかった。

（「めん、二ナ…今回はとても持ち帰れない…せめてデータだけで

も…)

コウは何とかデータを取り出し、ノーマルスースの胸ポケットにしまうとすぐさまコクピットから脱出したと同時に大爆発を起こしていた。

古代のバルキリーも、天井から突然現れたブリタイが鉄パイプを振り降ろし、バルキリーの頭部を破壊していた。

ブリタイは古代のバルキリーを壁面に押し付け、装甲を安々と引き剥がしてなおもバルキリーを痛め付けていた。

(…………！？何て奴だこいつらは……とにかく脱出だ……)

古代は咄嗟に脱出レバーを引き、コクピットから出ようとしたもののブリタイに捕らえられしまい、その瞬間今まで乗っていたバルキリーは大爆発を起こし、ブリタイはその衝撃で床に転がっていた。

「大丈夫ですか司令！？」

駆け寄つて来た部下達にブリタイは平然と立ち上がり、捕らえたままの古代を見ながら指示を出していた。

「心配するな……お前達とは作りが違う……とにかくこのマイクローンと先程の一人を別部屋に運べ……」

「了解！」

同日 23:11 第5惑星空域フォックターのバルキリー「コクピット

『フォッカー少佐・古代大佐のバルキリーとウラキ少尉のガンダムの識別信号…消えました…』

柿崎が沈痛な表情で、フォッカーに報告していた。その発言を受けて、マクロスに帰還途中に引き返して来た輝が切り出していた。

『まさか…古代先輩とウラキ少尉が…死んだ…』

『いや…古代達は生きている…』

フォッカーは即座に否定してさらに発言を続けていた。

「……さつきから敵の攻撃を見て気付いたんだが…奴ら今回の目的は、初めから俺達を捕らえる事だったと思う…もし古代達が死んだとしたら、今頃俺達を追つてきてもおかしくないはずだ…」

事実、フォッカーの言つ通り、ゼントラーディ軍からの追撃は無かつた。

やがてマックスが意を決してフォッカーに切り出していた。

『少佐！自分はこれから古代大佐達を救助に向かいます！』

『……分かった…くれぐれも気をつけてな…』

フォッカーの許可が下り、マックスはすぐさま自分の機をフルスピードでブリタイ艦へと向けて行つた。

その様子を輝の後ろにいたミンメイはつづきながら呟いた。

『どうしようつ…どうなつたのもみんな私のせいだわ……どんな顔でコキさんに会えばいいか分からない…』

『ミンメイ…コキには俺から詳しく述べ…お前さんは心配する事はない…』

今にも泣き出しそうなミンメイを見つめながら、フォツカ
ーは思っていた。

（しかし…何て説明すればいいんだ…古代を必ず連れて帰るとユキ
に約束したのに……）

第9話 激戦！第5惑星リンク（その11）（後書き）

カムジンの本来の愛機は“グラージ”ですが、両腕がミサイル発射口でどうやって格闘すればいいのやら……

従つて今作品では、劇場版で彼が乗つっていた“ヌージヤデル・ガ”に変更しました。

次回、古代、未沙、コウの運命はいかに……

第10話 ファースト・コンタクト（その1）

A · D · 2205 8 · 27 23 · 36 アームド01格納庫

「古代君達が敵の捕虜に……そんな……」

フォッカーからの連絡を受け、ユキはグローバルと共にアームド01の格納庫に来ていた。そこには古代達が行方不明との知らせを受けヤマトからは島が、アルビオンからはサウス・バンシングとモーラが駆け付けていた。

そしてニナもユキからの連絡を受けて、駆け付けていたのだった。

「とにかく古代の事だ……心配は無いと思つ……これまでだつて何度も死線をかいくぐつて必ずヤマトに帰つて来てたじやないかユキ……」

島は以前までの事を持ち出しユキを励ましていたが、当の彼女はそれでも不安感で満ち溢れていた。

「でも島君、今回は……」

「乗つっていたバルキリーが爆発したからつて言つても、死んだと決まつた訳じゃない……あいつの事だ、必ず戻つて来る……信じようユキ……」

「でも……やっぱり信じられないっ！」

ユキがそう叫ぶと、手で顔を覆いながら足早にその場から走り去つていった。島はそんなユキを追い掛けようとしたが、フォッカーに止められていた。

「そつとしておけ島…今はいりするしかないんだ…」

そしてフォッカーはグローバルの方に向き直り、ある提案を切り出していた。

「艦長…しばらくコキをマクロスに滞在させてしまうのでしょうか…ヤマトに帰つても仕事に集中出来そうになつたのですが…」

「私は構わないが…島君、君はどう思う?」

「確かにフォッカーの言つ通りです…」二ナはグローバル艦長にお任せします…」

「分かつた、森君には早瀬君の業務をやつて貰おつ…わざも見事な仕事振りを見せてくれたからな…」

一方、二ナは「ウの行方よりもガンダムフルバーニアンの事を心配していた。

「私のガンダムが……ガンダムが破壊されたなんて……嫌よそんなの!」

そんな事を言いつつ泣きじゃくる二ナを見たフォッカーは、思わず彼女を平手打ちしていた。

「おいフォッカー! お前いくら何でもやり過ぎだぞ!」

フォッカーのその態度にバーニングは抗議し、モーラが倒れ込んだ二ナを介抱していると、フォッカーが切り返していた。

「すいませんバーニングさん…ただこれだけは二ナさんに聞いてもらいたいんです…二ナさん、ガンダムやバルキリーの代わりはいくらでも作れる…だが、古代や早瀬、ウラキと言つた優秀な指揮官や

パイロットはそう簡単に作れるものじゃないんだ…」

その言葉に二ナは思わず衝撃を受け、フォッカーに謝罪していた。

「すみませんでしたフォッカー少佐…私が間違つてました…本当なら二ウの事を心配しなきやいけないので、つい仕事絡みでガンダムの事ばかり…」

「分かりやいいんだ…スマンな二ナさん…つい手が出てしまった…」

「いえ、いいんです…あれで私も目が覚めました…これからアルビオンに帰つて、みんなでこの先の事を考えます…」

第10話 ファースト・コンタクト（その1）（後書き）

本日9月25日は、古代進やタイガーマスクの伊達直人役を演じた富山敬さんの命日です。

富山さんが「くくなつて今年で16年…

もし富山さんが存命で、ヤマト復活編で38歳の古代進を演じていれば、また違った印象になつたと思います。（決して山寺宏一さんがダメと言つてはいけないので……）

第10話 ファースト・コンタクト（その2）

同日 23:41 ブリタイ艦メインブリッジ

古代、未沙、コウはブリタイ艦内の一室に収容されており、未だ気を失つたままの三人をブリッジからブリタイとエキセドルがその様子を伺つていた。

「閣下、分析の結果敵のマイクローンは骨格から遺伝子に至るまで、全て我々がマイクローンになつた時と同じといった結果が出ました……」

エキセドルの報告に、ブリタイはしばしの間考えた後切り出していた。

「ふむ……これはもはや我が艦隊で処理出来るような問題ではなくなつたな……直ちにこの事をボドルザー閣下に連絡を取つてくれ……」「お言葉ですが……ボドルザー閣下は慎重なお方です……考え方直されはいががかと……」

「いや、事は一刻を争つのだエキセドル……直ちにフォールド航行の準備を急がせてくれ……」

「分かりました……直ちにフォールド航行の準備をします……どうやらマイクローンが目を覚ましたようですが……」

同日 23:45 ブリタイ艦内の一室

古代達三人はようやく目を覚ますと、自分達の置かれている状況に直面していた。

中でもコウは、ガンダムフルバーニアンを失ったショックでこれ以上ないくらいに落ち込んでいた。

（二ナにどうやって説明しよう…いや、それ以前にここからどうやって逃げ出せるんだろうか…）

古代の方もまたひどく落ち込んでおり、ユキには“必ず帰る”と約束したのにそれが果たせずにいたのであった。

（ユキ…君にはもう会えないのか…今度ばかりは自信がない…）

未沙はと言えば、何故このような状況になつたのか、ただひたすら冷静に口に出していた。

「捕虜か…どうしてこうなつたのかしらね…」

それを聞いた古代は、即座に未沙に切り返していた。

「大体早瀬君が武装もない内火艇で飛んだからこうじう結果になつたんじゃないかな？」

「そもそものきっかけは、一条中尉がミンメイさんを勝手に連れ出したからなんですよ！それに私はフォックナー少佐に出撃命令を出したのに、何で古代艦長が出て来るんですか？あなたは休暇中だつたはずですよ！」

「フォックナーが酔い潰れてたんだ！俺が出なければ、君達はとっくの昔に…」

古代と未沙の激しいやり取りに、コウは堪らずに口を開いていた。

「今ここで言い争いをしている場合ですか…こうなつた以上、これ

かりどりあるかを考えるべきじゃないんですか……？」

「ウの発言で古代と未沙が沈黙していると、部屋の外から見える宇宙空間が突然白く輝き始めた。

未沙はそれに気づいて思わず呟いていた。

「これは……」の艦がフォールドしようとしてる……」

同日 23:51 マクロスメインブリッジ

「敵艦隊の一部、フォールド開始した模様……」

ヴァネッサの報告にグローバルを始めとするブリッジメンバーが、レーダーに映し出されたフォールド反応を注視していた。

「ヴァネッサ君、敵がフォールドした地点は？」

「はい……古代大佐達が行方不明になつた地点と同じ第5惑星のリンク上です……」

「そりが……ところでクローディア君、森君は今どこにいるかね……」

「はい……先程メールしたら、ゲストルームにいるそうです……多分今夜は眠れそうにないでしょうね……それよりも艦長、これからどうするつもりですか……？」

「明日の朝、森君と一緒に艦長室に来てくれ……話はそれからだ……」

第10話 ファースト・コンタクト（その2）（後書き）

この小説を書きたかった理由その3 マクロスTV版第11話 & 12話を見ていて、これを未沙と後から救助に来るマックス以外のキャラを、他のキャラでやつたらどうなるかを見たかったからという理由からです。

今作品内では、古代とコウのどちらかがボドルザー達の前でキスするか…

それは後々までのお楽しみ！

次回、ロンド・ベル本隊に合流するネーハル・アーガマ艦隊の活躍を描きます。

そしてジュドーがやつとあの機体を手に入れる！？

第10話 ファースト・コンタクト（その3）

A · D · 2205 8 · 28 8 · 15 ネエル・アーガマブリ
ツジ

ロンド・ベル本隊に合流するべく、ネエル・アーガマ艦隊はグラナダを発進し、リンボス軌道を時計回りに航行していた。

既に彼らの元にも現ロンド・ベル司令の古代が行方不明との知らせが入つており、ヘンケンはもとよりジュドー達も沈痛の想いで溢れていた。

今もブリッジのメインパネルには、ブライトの留守を預かるアムロとクワトロの姿が映し出されていた。

「それよりもこちらでも問題が起きてな……グラナダの波動エネルギー・コンバータ製造工場がシーマ・ガラハウの連中により爆破されんな……」

『本当なんですかヘンケン艦長!…?』

「おそらく彼らは何かを始めようとするらしいな……」

『シーマ・ガラハウ……あのデラーズフリートの生き残りか……これは厄介な事になりそうだ……』

パネルの向こう側でクワトロが呟くのと同時に、レーダーオペレーターのファ・ユイリイが何かをキヤッチしていた。

「艦長!艦隊進行方向80宇宙キロにネオ・ジオン艦隊をキヤッチしました!数およそ20隻!」

「何だと……済まんアムロ君、また後でな！」

『はいーそりらも気をつけて下さい！』

アムロとの文信を終えると同時に、前方のネオ・ジオン艦隊からの通信が入つており、モニターには司令官であるマ・クベの姿が映し出されていた。

『久しぶりだねロンド・ベルの諸君……』

『やいーマ・クベのオッサン！今頃何しに来やがった！？』

たまたまブリッジにいたジユードーが、相変わらず不気味な印象のマ・クベに怒りを現わしていた。

『フッ……お前は確か二コードタイプのジユードー・アーシタ……相変わらず威勢のいい男だ……』

そう言つてマ・クベは、傍らに置いてある自身のコレクションである壺を愛でていた。

「へッ！相変わらず趣味の悪いオッサンだなあんたは！？」

「ジユードー控えろ……それでマ・クベ司令、一体何の用事かね？」

ジユードーを一喝したヘンケンは、单刀直入にマ・クベに切り出していた。

『早速だが用件を言わせて貰つよ……諸君達と行動を共にしている宇宙戦艦ヤマトとSDF-1マクロスの引き渡しを要求する……』

マ・クベの突然の要求に、その場にいた一同は思わず絶句しじばりべしてジユードーが口を開いて拒否していた。

「冗談じゃない！そんな要求に答える訳無いだろ？」「けど、ヤマトとマクロスは俺達……いや、宇宙全体の希望の星だ！テメーらに渡す訳に行かないんだよ！」

『フツ……そんな事を言つていられるのも今のうすだぞ……今からお前達に見てもらいたい物があるのでね……』

そう言つと別のモニターには、旗艦であるグワジン級戦艦の下部発進口からワイヤーに吊された一機のモビルスーツ キュベレイが現れた。

「あれはもしかして… プルとプルツーのキュベレイ…」メインパネルを見ていたジユドーが思わず叫ぶと、その一人から通信が入つていた。

『ジユドー！助けてえー！』

『アタシもいるぞー！何とかしてくれつてーのー…？』

「プルにプルツー！大丈夫か…？でもなんでマ・クベのオッサンに捕まつちましたんだ…？」

『あんた達がシャングリラからロンド・ベルに合流したって聞いたんで、プルと一緒にこつと思つたらこのザマだ…』

「とにかく俺が今からお前達を助けに行く……待つていろー！」

そう言つとジユドーはブリッジから一歩散に走り去り、ヘンケンは呆気にとられていたもののすぐさま命令を出していった。

「……つたぐジユドーの奴は……全艦戦闘配備！ネオ・ジオン艦隊を叩く…」

第10話 ファースト・コンタクト（やの3）（後書き）

1stガンダムに出ていたマ・クベの登場でした。

TV版では第37話でMSガンに搭乗して戦死した彼ですが、劇場版では生き残っている設定で、今作品ではそれを活かしました。

彼の趣味である骨董品集め・劇中ジュドーに散々こき下ろされましたが、それでもヤマトパートーに出て来たガールの趣味よりはマシかなと……

第10話 ファースト・コンタクト（その4）

同日 8:25 リンボス軌道上ネエル・アーガマ

ネエル・アーガマのMS格納庫内では、ジユドーがジム・カスタムに乗り込み出撃準備をしていると、モニターからクリスの声が聞こえてきた。

『ちょっとジユドー君！ そのジム・カスタムはアポジモーターがかしくなりかけてるの！ これから修理するって言うから降りてくれる！？ それでもすぐに出たいなら、私のアレックス貸してあげるから…』

「クリスさん！ 気持ちだけは受け取つておくよ！ とにかく出るから下がつて……ジユドー・アーシタ、ジム・カスタム行きまーす！」

クリスが止める間もなく、ジユドーを乗せたジム・カスタムは、ネエル・アーガマの中央カタパルトを発進して行つた。

その後を追うように右舷カタパルトでは、バーニイのザク が発進準備を行つていた。

『ちょっとバーニイさん、大丈夫なのかよ？ いくらジオンの識別信号がまだ残つてるからって言つけど、奴らの新型機に対抗出来るのかよ？』

ザク のモニターに、心配そうなモンドが映し出されるとバーニイは多少緊張しながらも切り返していた。

「そんなの気合いでなんとかなるつて……それじゃザク 出ますー！」

バーニーのザク が出ると同時にカミーユのΖガンダム、エマのガンダムMK-、クリスのアレックスガンダムが発進、他の艦からもジエガンが発進して行つた。

同日 8:36 ネエル・アーガマブリッジ

戦闘開始から10分が経過し、戦況は一進一退の状況になりつつあった。

ネエル・アーガマに同行しているクラップ級巡洋艦のほとんどが損傷しつつあり、ネエル・アーガマ自体も艦体に傷を追つていた。

「巡洋艦エクゼター、ボストン、撃沈されました！」

「本艦左舷パルスレーザー第一群損傷です！」

次々入る報告に、ヘンケンは次第に焦りの色を濃くしていた。そんな中、格納庫にいるケリイがブリッジに通信を入れていた。

『艦長、俺も出る！』

「まさか…あれで出ると言うのか…ヴァル・ヴァロで大丈夫なのか…」

『大丈夫です！あんなMSの弾ぐらい平氣ですから…ケリイ、ヴァル・ヴァロ出ます！』

ネエル・アーガマの下部からその姿を現わした、ヴァル・ヴァロは、艦隊周囲に迫つていたネオ・ジオンのMS群をメガビーム砲で一掃し形勢を逆転させていき、ブリッジでこの様子を見ていたヘンケン

は驚きの表情で呟いた。

「凄いなあいつは…よし、直ちに反撃に出る…」

「艦長、バー二イより入電！プルとプルツーの救出に成功したそうです！」

「了解した！本艦をネオ・ジオン艦隊に向ける…軌道修正が済み次第、ハイパー・メガ粒子砲の発射準備に入る…」

同日 8:43 ジム・カスタムコクピット

「あ～つ糞つたれ！ちゃんと動いてくれよジム・カスタム！？」

ジユドーは自分の思い通りに動かないジム・カスタムのせいで、思わず苦笑を強いられていた。

そんな中、敵将校ラカン・ダカラーン率いるMSドライセン部隊が近付きつつあった。

『お～そこの一ユータイプ！大分難儀しているようだな…何なら俺達が引導を渡してやるうか！？』

『うるせーよラカンのオッサン！あんた達にやられる程、このジユドー・アーシタは落ちぶれちゃいないぜ…』

『フン…そんな事をほざくのも今のうちだ！』

ラカンからの通信が切れると、ドライセン部隊が直ちに行動を開始し、まともに動かないジム・カスタムを翻弄していた。

ジユドーは何とか動かそうと必死になつっていたものの、一機のドラ

イセンが放ったハンドガンによつてアポジモーターが損傷し、完全に動きを止められた。

（じょ…冗談だろ…完全に動けなくなっちゃった…俺、ここで終わ
りかな…）

ジユドーが動きの止まつたジム・カスタムの「クピット」の中でそう考えていたと、どざめを刺そうとしたそのドライセンがどこからともなく飛来したミサイル群によって破壊されていた。

その様子を見たジエトリーは、何か起きたのか半信半疑でいると、機のコアファイターが飛来し、その搭乗員、ルー・ルカから通信が入つて来た。

『ジユドー、大丈夫？間に合つて良かつた！今、ラビアンローズからＺΖガンダムを持つて来たからまずはコアファイターに乗り換えて！』

ジユドーがジム・カスタムを降りようとした時、別のドライセンが飛来しジム・カスタムにとどめを刺そうとしていたが、カミーユのΖガンダムが攻撃を加えてそのドライセンを破壊した。

「カミーさん、サンキューです！」

『ジユドー、敵は俺が引き付ける！早くルーのコアファイターに乗り換えろー。』

「了解！後でお礼はします！」

第10話 ファースト・コンタクト（その5）

同日 8:50 プロファイター・コクピット

ジュドーはビルトがコアファイターに乗り換え、ルーはナビシートに移り、ピタンローズと連絡を取つていた。

「ハマリー・ルカ、ラジアンローズのハマリー艦長聞こえますか？」
『ハマリー・アンローズのハマリーです！今からハガンドムのロアベースとコアトップを射出します。ジュドー・セイянと合体してよ。』

いつものハマリー・オヌスの口調を聞き、ジュドーはちょっとした悪戯心を出していた。

「了解ですハマリーさん。あ、そうそうーーーの前、ブライアさんとが逢いたいって言つてましたけどーーー」
『あつやつ…』

いつになつハマリーの口調で、ジュドーは思わず呆気にとらわれていた。

「“あつやつ”って……ハマリーさん、ブライアさんに逢いたくないの？」

『ブライア艦長はもういいわ……でもその代わりいい人見つけちゃつた！新しくロンド・ベル司令になつた宇宙戦艦ヤマト艦長の古代大佐なのー。ウフフ…』

「…………あの……言つと申すけど、古代せんにはちゃんと婚約者がいるんですけど……」

『それでもいいの……いつかある人を振り向かせたいの……』

エマリーのいつ終わるか分からない惚気話に苛立つたルーは、少しキレ気味になつてエマリーに催促していた。

「ど、でもいいけどエマリー艦長…さつさと射出して下さい…」

『ごめんなさい…今から射出しまーす…』

「了解…」アチエンジ開始…」

二人の乗るコアファイターは変形し、まずコアベースと合体、さらにはコアトップと合体してΖΖガンダムへと変形して行つた。

「よつしゃーつ！一丁いたるかい！ターゲットスコープオープン、電影クロスゲージ……」

「ちよつとジユードー……あんたまさかあのセリフ言つつもつじやないでしようね…？」

「あ、バレた！？一度でいいから波動砲の発射シーン言つてみたかつたんだよね～！」

ジユードーのその発言に、ナビシートのルーは呆れ果てていた。

「そんじゃ改めて……一氣に行くぜ！ハイメガキヤノン発射あーつ
！…！」

ΖΖガンダムの頭部からおびただしい光芒を放ちハイメガキヤノンが発射され、ドライセン部隊と応援に駆け付けた他のMS部隊を一掃していた。

同日 8:56 グワジン級戦艦ジークフリートブリッジ

「ぜ、全滅たと…」

旗艦であるジークフリートのブリッジでは、マ・クベが副官のウラガンから報告を受けていた。

「はい…残つたのはラカン少佐のドライセンと数機のMSだけとの事です…」

ウラガンの素つ氣ない報告にマ・クベは思わず椅子からずり落ちそうになつていた。

「あ…あれだけのMSがいながら30分持たないと…ロンド・ベルの連中は化け物か！？」

マ・クベが呟いた時、レーダーオペレーターからさうに報告が入つていた。

「敵旗艦に高エネルギー反応増大中！」

「ハイパー・メガ粒子砲だ！直ちに回避！並びに撤退だ！」

マ・クベが発言するのと同時に、ネエル・アーガマからハイパー・メガ粒子砲が発射され、そのエネルギーはジークフリートを掠めて半数の艦を撃沈していた。

「艦隊の半数が壊滅…どうします！」

「とにかく逃げるんだ…撤退して次の機会を伺うしかない…」

マ・クベは壺を大事そうに抱えながら指示を出すしかなかった。全く見ていたネエル・アーガマ艦隊に手酷くやられたために、ここはひとまず撤退するしかなかつたのであつた。

第10話 ファースト・コンタクト（その5）（後書き）

ΖΖガンダムがやつと登場しました。しかもネエル・アーガマ共々ハイメガキヤノンとハイパー・メガ粒子砲を発射とはなんて贅沢な…

ΖΖが放映された当時、ハイメガキヤノンやハイパー・メガ粒子砲の発射シーンを見るたびに、ヤマトの事を思い浮かべたのは自分だけではないはず…

次回、残されたユキや一ナ達の心情をお送りします。（と言つても、作者の下手くそな文ではたいした事は書けないと想いますが…）

第10話 ファースト・コンタクト（その6）

同日 7:23 ゲストルーム

結局ユキは一睡もできずに朝を迎えていた。何度も眠りつとしめたもの、古代の事が思い出されていたのだった。ユキは部屋のカーテンを開け、窓外に広がる街並を見ながら涙を浮かべていた。

（古代君…本当に無事だといいんだけど……）

その時携帯電話が鳴り、出てみると相手はクローディアだった。

『ユキ、起きてる?』

「はい…今起きたばかりです…あの…どうからかけてるんですか?」

『あなたの部屋の前からよ…』

ユキが部屋のドアを開けると、そこには電話を持ったクローディアとフォッシカーレが立っていた。

「よつ…眠れたかユキ…?」

「いいえ…あれから彼の事ばかり考えてて全然…」

「ねえユキ、朝ご飯まだなら一緒に食べない?・サンドイッチ作つてきたから…」

クローディアの手には、サンドイッチを入れたビニール袋がぶら下がり、それをユキの前に差し出したものの、彼女は首を横に振つて

断るそぶりをしていた。

フォッカーはその様子を見ると、困惑した表情で切り出していた。

「なあユキ……こんな時だからこそ何か食べとかないと身が持たんぞ……昔からよく言つじゃないか……“腹が減つては戦さができぬ”ってな……ここはひとまず腹ん中に何か入れとかないと……」

「……分かりました……確かにフォッカーさんの言つ通りですね……じゃあお言葉に甘えていただきます……」

「よし！ そうこなくちや一上手いもん食つてこれから乗り切らなきやな！ そんじゃクローディア、うまいコーヒー煎れてくれ！ ユキが煎れたんじゃまずくて飲めたものじゃ……」

「ちょっとフォッカーさん！ 何て事言つのよ～～つ！ 私だってちやんと美味しいコーヒーの煎れ方、勉強してるんですからねつ……！」

ユキのあまりの怒りつぶりに、フォッカーは思わず恐縮していたもの、内心ではどこかホッとしていたのだった。あえてコーヒーの話題を出す事によって、ユキを元気付けようというフォッカーなりの気配りだった。

同日 9:16 アルビオンMS¹デッキ

その頃二ナは、MSデッキで忙しく立ち働いていた。破損箇所のチエックや「クピット内」のコンピュータソフトの書き替えなど、あえて忙しくしていないとコウの事を思い出しそうになるからであった。前夜、フォッカーに殴られるまでガンダムの事しか頭になかった彼女は深く反省していた。

モーラはそんな二ナを見るといったたまれない思いであった。

「二ナ、あまり無理しないでよ……」

「分かつてるモーラ……でもこうしていないと、『ウの事を考えてしまいそうで……それに辛い思いは私だけじゃない。……森さんの方がもつと辛いはずよ……さつきもマクロスメインブリッジと通信したけど、森さんも必死になつて任務に打ち込んでいるし……」

「話を聞いてるだけでもこちらも涙目になつてきちゃつた……それに引き換えあのスケベ親父、デリカシーのかけらもないのかね！？上の通路でアデル少尉とベイト中尉の二人でトランプなんかやつてんの！」

モーラが話すのと同じタイミングで、モンシアが上から覗き込み叫んでいた。

「「つむせー」の『テカ女！？』人が何やつてよつと勝手じやないか！？」

下に向かつて叫んでいるモンシアに、ベイトとアデルは呆れ果てていた。トランプで勝負したのはいいが、次第に負け続けたモンシアは怒鳴り散らすタイミングを伺つていると、たまたまモーラが話しているのを聞いたためにすぐさま行動に移していたのだった。

「中尉、気持ちは分かりますがここは落ち着いて……」

「全く……田頃のつづぶん晴らしのウラキがいなくなつたからつて、でつかい姉ちゃんにまで当たるはどうかしてるぜ……」

アデルとベイトが溜息をついていると、モンシアは持つていったトランプを投げ捨て床に寝転びながら文句を垂れ流していた。

「大体な、ウラキの野郎が行方不明つてのは口実で、実はどつかに逃げちまつたんだよ！一年前のあの時のようなにな！」

「……それでどうしますか？ウラキがいない間に二ナさんを口説き

ますか？」

「あほか！？恋のライバルもいなしにそんな事出来るか？・ウラキの野郎が戻つて来るまで勝負はお預けだ！」

珍しくまともな発言をしたモンシアに、二人は目を丸くしていた。もつともモンシアには別の思惑があった。

（どうせそのうちまたガンダムが配備されるだろ？…それまでにウラキの野郎が戻つてくればその時にまた勝負だ……今度はこの俺様が主役だ！）

第10話 ファースト・コンタクト（その7）

同日 21:14 マクロス艦内展望室

その晩、ユキは勤務を終えゲストルームに戻る途中、艦内の展望室を訪れていた。

寝不足ながらも何とか未沙の代行を務め、シャミー達三人娘と市街地で食事を済ませてゲストルームに戻る途中、ユキの足は自然と展望室に向かっていた。

広大な窓の外には果てしない星空が広がり、その中でも一際目立つオリオンの三ツ星にユキは願いを込めていた。

そこはかつてヤマトがイスカンダルへの航海途中、オリオン座空域を航行中にユキが三ツ星の一つ 星に向けて、古代が自分の事を好きになつてくれるようになると願いを込めていた星であった。

（あの時だつて願いが叶つたんだもの… 今回だつて古代君達が必ず帰つて来る事を願つていれば望みは叶つはずよ……）

ユキはそう思いながらも、どこか不安な気持ちが溢れ、涙がとめどなく流れていた。

その時ユキの携帯電話が鳴り響き、出でみると相手はミンメイだつた。

「ミンメイ… どうしたの？」

『ユキさん… 今回の件、謝らなきやと思つて… 本当にすみませんでした… 私がわがまま言つたからこんな事になつてしまつて…』

「いいのよ……いたずらに自分を責めないで……」うなづいてしまった以上、仕方ない事だから……」

ユキがそう言つと、電話の向こう側でミンメイがすすり泣いていた。

「泣かないでミンメイ……それに今仕事中なんでしょう……？」

『はい……今度出る新曲のレコーディングの最中で……』

「だったら泣くのはやめて……ベストの状態じゃないといい歌作れないでしょ？あなたには大勢のファンがいるんだからその人達の事も考えて……」

『分かりました……もう泣くのは止めます……だからユキさんも元気出して下さーい……』

「ありがと……私は大丈夫だから……彼の事はいつまでも待つつもりだから……」

『私も古代さん達が帰つて来るのを信じてます……それじゃユキさん、お休みなさい……』

ミンメイからの電話が切れると、ユキは意を決して座つていたベンチから立ち上がつていた。

（もう泣くのは止めよつ……私強くならなきや……このまま泣いていたらみんなに心配かけちやう……）

第10話 ファースト・コンタクト（その7）（後書き）

オリオンの三ツ星…ヤマトパート1第1-2話で舞台になつた場所でした。

ユキが古代に向かつて“ある人が私の事を好きに”発言をしてい るのにもかかわらず、当の本人が全然気付かないシーンを見る度に、 画面に向かつて何度も突っ込みを入れた事か…

次回、ボドル基幹艦隊に連れて来られた古代達が見た物は…

第10話 ファースト・コンタクト（その8）（前書き）

時間は半月後に進みます。

古代達三人の運命はいかに！？

第10話 ファースト・コンタクト（その8）

A · D · 2205 9 · 11 · 11 · 06 ブリタイ艦内

フォールド航行中のブリタイ艦内の一室では、未沙がある物を手にして室内を覗いており、その様子を見ていたコウが尋ねていた。

「あの早瀬中尉…それって一体何です？」

「マイクロビデオよ…小さいおかげで彼らに見つからなかつたみたい…」

「だけどなあ早瀬君…そんな物で撮つても何の役にも立たないと私は思つけどなあ…」

古代の指摘に未沙はなおも室内を撮りながら呟いた。

「まだ逃げ出せないつて決まつた訳でありますんよ古代大佐…これに録画しておけば、万一帰還出来た時の資料になるんですから…でもそれにしても一体どこまで行くのかしら?…もう一時間以上もフォールドしている…ロンド・ベルじゃ半月たつた頃かしら…」

未沙が窓外を見ながら呟いていると、コウが彼女に驚きの表情で問いか返した。

「半月つて…フォールドするとそんなに時間が経過しちゃうんですか中尉?」

「ええ…私もよくは知らないけど、フォールド航行中の空間ともといた空間との時間差が異なるらしいの…」

未沙が説明していると、窓外が再び白く輝き通常の宇宙空間が再び姿を現していた。

そして次の瞬間、三人は信じられないものを目にしていた。

「な、何だ!? 窓の外は『人の宇宙船だらけじゃないか!』?」「一体…どれだけの数なんですかね…」

古代の呟きに未沙も同意しつつ、ビデオカメラを回し続けていた。「ウも遠くで行われている戦闘を呆然と見つめていた。

「あれを見て下さい…局地戦のようです…」「いいえ…近寄れば相当大規模な戦闘のようね…」「ああ…それも地球を丸ごと飲み込むくらいのな…」

同日 同時刻 機動要塞フルバス・バレンスマインコア

全長6000キロを越えるゼントラー・ディ軍機動要塞フルバス・バレンスのメインコアでは総司令である、ゴル・ボドルザーがモニターを介して入港したブリタイと通信を行っていた。

「久しぶりだなブリタイ…お前から提出された資料には全て目を通した…」

『それで閣下、いかがなさるおつもりで…?』

「うむ…幻の反応兵器の存在といい、男と女が一緒に乗り込んでいる戦艦の存在といい…我々は良からぬ者と接触してしまったようだな…」

『良からぬ者…と言いますと?』

『詳しい話は後だ…捕虜との会見はお前の艦で行う…謁見室を用意

しろ……

『了解しました……閣下のお越しをお待ちしております……』

ボドルザーは通信を切り、ブリタイ艦へと向かうべくメインコアから連絡艇で飛び立ち、途中である考えが浮かび上がっていた。

（もしかして彼らは……“プロトカルチャー”ではあるまいな……）

同じ頃のルキの様子を描きます、…と言つても内容はグダグダです、…

第10話 ファースト・コンタクト（その9）

同日 12:06 マクロスメインブリッジ

『スカルリーダーよりデルタ1へ！これより偵察任務に出発する！指示頼りますよユキちゃん！』

『了解！フォックターさん気をつけて下さいね！』

『分かってるよユキちゃん！後で気持ちいい事しようぜ！ガハハハ

！』

「あ…あの…」

フォックターの下ネタに相変わらずユキは顔を赤くしていた。その様子を隣席のクローディアは微笑ましく見つめていた。

マクロスメインブリッジの勤務を始めてから半月余りが過ぎ、ユキはようやく仕事に慣れて来たように見えた。

「ユキさん、そろそろお毎日行きませんか？もつすぐ交替要員が来ますから…」

ヴァネッサが後方のオペレーター席から声をかけると、ユキは即座に切り返していた。

「私は大丈夫！あなた達こそお腹空いてるんでしょう？」「は私が見てるから先に行つてらっしゃい！」

「はい…でも…」

ヴァネッサがそれでも何か言いたげにしていると、一人の会話を聞

いていたグローバルが助け舟を出した。

「森君、君も行きなれこ……無理はしけや いかんよ。」

「はい……しかし艦長……」

「これは艦長命令だ……一時的とはいえ、君は私の部下だ……何かあつたらヤマトクルーに申し訳がたなくなるしな……」

グローバルはあえて古代の名前は出さずにいた。それはユキに対する思いやりから出たものだった。

「はい、そうします艦長……」

ユキがグローバルに答えると、シャミーが立ち上がり催促に来ていた。

「じゃあユキさん、いつものカフェテリアに行きましょー。今日はランチにケーキセットが付くんですよー！」

「ええ行きましょシャミー、でもたまにはおじりなさこよー。」

「ええ~つづりして~つー!~?」

シャミーが半泣きになつていると、キムが僕この手を入れていた。

「もうおしゃみーーあんたいつも私達に扱わせてるクセにー。」

「どうしてキムまでそんな事言つのよーーー!」

さすがにシャミーが可哀相になつたと見えて、ユキが助け舟を出していた。

「いいわシャミーー。今回は私がおじるからー。あ行きましたよー。」

ユキと三人娘がブリッジから連れだって出て行くと、グローバルはパイプをくわえながらぼつりと呟いた。

「やれやれ……ここは女子校か……？」

同日 13:22 市街地カフェテリア

「あ～美味しかった！ユキさん」馳走様でした～。」

いつものカフェテリアで、シャミーは腹を撫で回しながらユキにお礼を言っていた。

そんなシャミーを、遅れてやつて来たクローティアが呆れ果てた表情で呟いた。

「よく食べるわねシャミーは…」

「だつてえ～お腹空いてたんですからあ～～～」

シャミーの発言に一同が爆笑していると、佐渡と愛猫のミー君、それにアナライザーがやつて来た。

「佐渡先生にアナライザー、それにミー君もー」

ユキがそう言つとミー君は彼女の膝上に乗り、久しぶりに甘えていた。それを見ていたシャミーがつらやましそうに呟いた。

「わあ～超カワいい！ユキさん、ちょっと抱つけてくれますっ！」
「ええいいわよー」

ユキはミー君を抱き抱えてシャミーに手渡すと、ミー君は嫌がるそ
ぶりも見せずに寛寝を始めていた。

そんなミー君の姿を横田に見ながら、佐渡はユキに話しかけていた。

「ユキ、元気そうじゃのー。仕事には慣れたんか?」

「はい先生、おかげ様でなんとか…」

「そりゃ良かつた! ヤマトの方でもみんな何とか頑張つておるから
の。ところでフォックーの奴があらんが……?」

「ロイだつたら先程から偵察任務に出てますけど…もしかして彼と
飲むつもりだつたんですか先生?」

クローディアが佐渡に答えていたと、佐渡の口から意外な返事が返
つて来ていた。

「実はな…ワシはしばらく酒断ちしどのとじや…古代達が帰つて來
るまでは禁酒しとむ…」

「あら先生もなんですか…実はロイも同じ半円ばかり、一杯も飲ん
でいないんですよ…」

実を言えば、古代達が行方不明になつた原因が自分にあると思つた
フォックーは、古代達が帰つて来るその日まで禁酒禁煙を誓つたの
であつた。それを初めて聞いたユキは思わず涙ぐみながら呟いた。

「すみません…みんな…」

そんな様子を見たクローディアは、その場の重い空気を取り払つべ
くある話題を切り出していた。

「やうだ…ちょうどアナライザーがいるから聞きたかつたんだけど

…

「何デスカ、クローディアサン？」

「ここにいる五人の女性の中で、スカートめぐりしたいって人がいる？」

クローディアの発言を受け、アナライザーはしばらくテーブルの周囲を周り始め、そのうちユキの席の後ろにつくなりおもむろに彼女の胸をわしづかみしていた。

「いやあ～～ん！！！」

「僕ニハヤツパリユキサンデナイト物足リナイ……」

アナライザーのとんでもない発言にその場にいた一同はみんな脱力していた……

第10話 ファースト・ノンタクト（やの）（後書き）

一ヶ月目でPVが40000を越えました！これもひとえに皆さんのおかげです！

これからもグダグダ感ありだと思いますが、飽きずにお付き合って下さいませ……

次回、古代達がボドルザーと会見、……

第10話 ファースト・コンタクト（その10）

同日 12:56 ブリタイ艦内ブリーフィングルーム

古代達三人は、ブリタイ艦内のブリーフィングルームに連れて来られた。そこにはブリタイとエキセドルがあり、それに以前の戦いでマクロス艦内に侵入した三人（ロリー、ワレラ、コンダ）も同席していた。

（これから何が始まるんだ……もう何を見ても驚かないぞ……）

古代がそう思つて周囲を見ているうちに敵のボスらしき男が入り、巨人達五人がその男に敬礼するのを見ていた。

「私はゼントラー＝ティ軍第1118基幹艦隊司令、ゴル・ボドルザーだ…お前達に尋ねたい事がある…」

自分達と同じ言葉を話すボドルザーを見て、三人は困惑していた。

「俺達と同じ言葉を話すなんて…
「どうなってるんでしょう…」

古代達三人の様子を見ていたエキセドルは、テープル上の機械の調子が順調に作動しているのを確認するとボドルザーに報告し、彼は満足そうな表情で古代達三人に質問をしていた。

「では改めて尋ねる…お前達の所属先はどこだ…？」

ボドルザーの問い合わせに、三人は顔を合わせ相談を始めた。

「大佐…どうしますか？」

「相手が名乗りを上げているんだ…ここは俺達も名乗らないと相手に失礼だからな…」

「さすが大佐…何度も異星人と戦つて来てるだけの事はありますね…」

相談を終え三人は、改めてボドルザーの方に向き直っていた。

「自分は地球連邦軍所属、ロンド・ベル隊司令並びに宇宙戦艦ヤマト艦長、古代進だ…」

「同じく、私はＳＤＦ・1マクロスチーフオペレーター、早瀬未沙です…」

「自分はロンド・ベルパイロット、コウ・ウラキ…」

三人が自己紹介を終えたのを確認したボドルザーは、改めて彼らに問い合わせていた。

「…………お前達はいつから監察軍と接觸したのだ？」

初めて聞く“監察軍”という名前に三人は困惑していた。

「ウラキ、お前はそんな軍隊の名前を聞いた事はあるか？」
「いえ…自分は軍に入つてまだ一年ちょっととなんで…」

古代とコウの話にブリタイとヒキセドルが即座に反応し、すぐさまコウに問い合わせていた。

「軍に入つて日が浅い！？」

「軍に入る前は何をしていたのだ…？」

「何つて……民間人に決まつてますが……」

「民間人！？それはどんな者なのだ？」

「戦争に行かない人達の事ですよ……」

コウの発言にエキセドルが驚愕の表情を浮かべ、思わず叫び出していた。

「戦争をしない人間だと！馬鹿な！宇宙は戦いに満ち溢れ、戦いある所にこそ命があるはずだ！」

この発言を聞いた未沙は秘かに思っていた。

（戦いある所に命がある……一体どういう事かしら……）

そんな中、ボドルザーがしばらく考えた後にある質問を投げ掛けていた。

「お前達の艦隊に戦争をしない人間が存在するのか……そして、男と女が何故一緒にいられるのだ……？」

「男と女が一緒にいて何が……」

「ウラキ少尉、ここは私に任せで……」

コウが反論しようとする所に未沙がそれを制し、ボドルザーの前に進んで言い放った。

「これ以上あなた達の質問に答えるつもりはありません……」

第10話 ファースト・コンタクト（その1-1）

同日 13:01 ブリタイ艦内ブリーフィングルーム

「これ以上、あなた達の質問に答えるつまつはありません……」

未沙の気迫に満ちた発言に、古代は困惑しつつ思っていた。

（早瀬君… それは少し言い過ぎだ…）

そしてボドルザーはといつと、未沙の発言にも余裕の笑みを浮かべながら切り出していた。

「フン……お前達は今の状況を分かつておらんようだな……これを見るがいい……我々はお前達の惑星や艦隊を一瞬のうちに滅ぼせる1000万隻の艦隊を有している……」

「…1000万隻……-?」

あまりの艦隊の数に古代達が言葉を失っていると、パネルには宇宙空間を埋めつくす1000万隻のゼントラーディ艦隊が映し出され、その艦隊がある惑星を攻撃している場面が現れ、攻撃を受けた惑星は一瞬のうちに死の星へと変化していった。

「ひどい… 何て事を……」

未沙の発言を受け、ボドルザーは勝ち誇るような笑みを浮かべていた。

しかし未沙には、「」のよつた映像を見せられたものある疑問が浮かんでいた。

（……おかしいわ……これだけの戦力がありながら、何故ロンド・ベルや地球圏を全面攻撃して来ないのかしり…？）

「もう一度尋ねる……民間人は実在するのか？そして男と女は何故一緒にいられるのだ！」

ボドルザーの問い掛けに未沙はさうに考へに及んでいた。

（民間人……男と女……私達には彼らにはない何かがあるのかかもしれない……）

「どうした！ 答えなければ、お前達の艦隊や惑星を滅ぼしてやる！」
ボドルザーの更なる脅しにも屈することなく、未沙は切り出していた。

「出来るものならやつてご覧なさい！ 」これだけの戦力があるんですからやつてみればいいじゃないですか！ それに私達にはあなた達の知らない特別な力があります！」

「ええい！ 黙れ！」

ボドルザーはそう言つと拳でテーブルを殴りつけ、未沙を捕まえてそのまま上に持ち上げた。

「…………！」

捕まえられ身動きがとる」とが出来ない末沙に、古代と「ウは駆け寄ろうとしたものの、ボドルザーに止められていた。

「動くな……」フン、こんなマイクローンが我々に盾突こうと言うのか…何故わざわざマイクローンになつたのだ…マイクローンになつた訳を言わなければこの女を握り潰すぞ…」

ボドルザーが末沙を握る手に力を込めるが、古代が叫んでいた。

「止めろ…俺達は生まれた時からその体だ…」

「生まれた時から…それはどじから生まれると嘗つた?」

「母親からに決まつてゐるだらう…」

「母親…?」

後ろで聞いていたコンダが古代に話し掛けると、古代は多少苛立ちながらも答えていた。

「女親の事だ!」

古代の答えにエキヤドルも反応し、さらに聞こ掛けていた。

「女から…お前達は女から生まれたと言うのか? 一体どうやつて?」

「男と女が愛し合つ事によつて生まれるんだ…」

「一体どうやつて…?」

「それはその…キスしたり抱き合つたりだ…」

古代との押し問答に対してもボドルザーは彼らの言ひ事に次第に興味を持ち、ある提案を持ち掛けた。

「なるほど……ではお前達のどちらか一人、この女と“キス”と言つのをやってみる……やらねば」の女を握り潰すぞ！」

ボドルザーの問い掛けに、古代と「ウは」惑っていた。だが沈黙を破り、古代が意を決してボドルザーに切り出していた。

「俺がやるーだからその人を離してくれー！」

「大佐！あなたには森大尉が……」

「ウラキ、ここはとにかく俺に任せろ……」

古代が「ウを諭しているうちに未沙が下に降ろされていた。

「早瀬中尉、これから俺とキスをしてくれ……」

「えつ……しかし……」

未沙が躊躇していると、古代は未沙の耳元でそつと呟いた。

「これは敵の反応を見るチャンスなんだ……早くしないと奴らに殺されるぞ……」

「はい……分かりました……」

古代と未沙は互いに抱き合つて体を密着させ、唇を重ねよつとしていた。

古代は一瞬ユキの顔を思い浮かべていた。

（「めんよユキ……君以外の人とキスするつもりはなかつたのに……これも任務のうちだ……仕方ない……」）

やがて二人の唇が重なると、それを見ていたボドルザー達は全員が驚愕の表情を見せ、思わずボドルザーが口走っていた。

「……！――！プロト…カルチャ――――！誰か、こいつらをさつさと連れ出せ――！」

第10話 ファースト・コンタクト（その1-1）（後書き）

ボドル基幹艦隊の総数を原作の500万隻から1000万隻に増やしました！（しかしこの作品、戦艦の大きさや数が多過ぎ……）

そしてついに、古代と未沙がキスしちゃいました……キーワードにもあつた異作品間恋愛第1号と言つていいかな～？

森 グキ
「いいわけないでしょー。」

第1-1話 ピック・Hスケープ（その1）

A · D · 2205 9 · 11 · 13 · 32 ブリタイ艦内

古代達三人は、ボドルザーとの会見後再び艦内の一室に閉じ込められていた。そして話題は自然と先程の古代と未沙がキスした事により、彼らゼントラーディー人が何故あれだけの事で驚いたのか…と言ふ話になっていた。

「しかし…大佐と中尉がキスしたくらいでの連中驚いてたんですかね？」

「本当ね…星の「一つや二つくらい」あつといつ間に潰せるくらいの戦力を持つているのにね…」

「あの時、連中が言つてた“プロトカルチャー”って一体何でしょうかね？」

「分からなーいわ……とにかくロンド・ベルに戻れてこのデータを分析できればいいけど……」

「戻れたら……か……」

未沙とコウの会話を聞きながら、古代はしばらく考えていた。

あの時未沙を助けるためとはいえ、キスをしてしまった事に後悔の念に苛まれつつあった。

（例え帰れたとしても、この事に關してはコキに口が裂けても言えやしない……それよりもどうやつてここから逃げ出せるかを考えないと……）

同日 同時刻 ブリタイ艦内ブリーフィングルーム

「さつきのは一体何だつたのだ…」

「何故あれほどの事を見てショックを受けるのでしょうか?」

ボドルザーとブリタイは、先程見た古代と未沙のキスについて話をしていた。彼らにとつて初めてみる行為はかなりのショックな出来事であった。

そんな中、落ち着きを取り戻したエキセドルは冷静に先程の事を分析していた。

「我々の眠っていた潜在意識が反応するのかもしないですね…」「なるほど…潜在意識か…」

ボドルザーが答えるのと同時に、ロリーが質問を始めた。

「ボドルザー閣下…プロトカルチャーとは一体何ですか…?」

「うむ…プロトカルチャーと言うのは我々の遠い祖先の事だ…」「祖先……?」

「そうだ……プロトカルチャーの時代には我々のサイズはマイクローンのサイズだつた……男と女が共に暮らし、“文化”と言うものがあつたそうだ……しかしそれがどのような世界であつたかは記録が失われたために、はつきりした事が分からんのだ……そしてプロトカルチャーと接触した艦隊は戦闘能力を失い、滅びてしまったと言つ事だ…」

ボドルザーの説明に一同は思わず沈黙していた。

もしかしたら自分達も同じ道を歩みつつあるのか

一同の不安が高まりつつあつた時、ボドルザーがある提案をあげて

いた。

「IJの際だ…我々の敵であるマイクローン部隊……“ロンド・ベル”にスパイを送つてみよつと頼つ……」

「スパイですか？お言葉ですが、わざわざマイクローンになって“ロンド・ベル”に潜入できる者がおりますかな？」

エキセドルが不安気な面持ちでボドルザーに進言していくと、ロリ一達三人が立ち上がつていた。

「その役目、是非私達にやらせてくれ……」

第11話 ピッグ・スケープ（その1）（後書き）

37年前（1974年）の昨日10月6日は、宇宙戦艦ヤマトパート1の初放映の日でした。

と言つてもその当時、ヤマトのヤの字も知らずに裏番組（アルプスの少女ハイジ）を見ていたのを記憶しています。

ヤマトを初めて知ったのは本放映から二年後…
たまたま見た特番でヤマトをやっており、その内容に衝撃を受けた
のがきっかけで現在に至っています……

次回、タイトル同様古代達の脱出劇が開始されます！

第1-1話 ピッグ・エスケープ（その2）

同日 13:39 ブリタイ艦内

「とにかく、ここから脱出しましょ！」

しばらくの間考えていたコウが、意を決して古代と未沙に切り出していた。

「それはいいんだが、どうやつて……？」

「さつきの会見で大佐と中尉がキスさせられた時、巨人達がもの凄く驚いてましたよね……“プロトカルチャー”って……」

「ああ……驚き過ぎて動けない状態だつたよな……」

「ええ……それを利用するんです……いくら巨人達でも食事の差し入れはするでしょうから、その時を狙つてもう一度大佐と中尉がキスすれば……」

「それはいい名案ね……」

コウの提案に未沙が同調したものの、古代が慌てふためいて反対していた。

「ちょっと待て！そのためにもう一度俺と早瀬君がキスするのか？
冗談じゃない！いいか、キスってのはな愛し合つ者同士がするもんなんだ！好きでもない人とそうそう出来るものじゃないんだ！」

「それはまあ……そうです……」

古代の話にコウは思わず納得したものの、未沙はなぜか顔を赤くしながら切り出していた。

「私は別に構いませんよ……」これから逃げ出せるのであればもう一度大佐とキスしても……それにこのマイクロビデオを重大な証拠として持ち帰るのが私達の重要な任務なんですから……」「まあ……確かに早瀬君の言つ通りだな……とにかくやるしかないな……」

未沙の説得に古代も渋々同意したもの、今度はコウが心配顔をしておりそれを見た未沙が尋ねていた。

「どうしたのウラキ少尉？」

「いえ……今ふと思つたんですが……巨人達の食事つてどんなのが出るんでしょうね？まさか二ンジン出て来ませんよね？」

「……お前……こんな所に来ても二ンジンの心配か……？」

コウの余計な心配に古代が思わず呆れ果てていると、“ドスン”という物音が外から聞こえていた。

「予定よりも早いな……ウラキ、君はドアの側に！」

「了解！」

「早瀬君……いつでもいいな？」

「はい……大佐……」

古代と未沙が唇を重ねると同時にドアが開き、立っていた敵兵は驚いたかのように動く気配を見せようとはしなかった。

「やつた……！」

「よし今だ、脱出するぞ……」

古代達三人は敵兵が動搖している隙に外に出ようとした時、上から

聞き覚えのある声が聞こえて来た。

『大佐、僕です！マックスです！』

そこにいたのは敵兵の制服を上から着込んだマックスのバルキリーであつた。

マックス機はフォッカー達と別れた後、ブリタイ艦の破損箇所から内部に侵入し、たまたま出くわしたゼントラーディ兵を倒してその制服を身にまとい、古代達の救出時期を伺つていた。

「それにしてもマックス、何て格好しているんだ？」

『詳しい話は後です！』

古代の問い掛けにマックスが答えると、倒した兵士を部屋の中に入れて自機もドアを閉めていた。

『しかし意外ですね…古代大佐には森大尉と言つ婚約者がいるのに…早瀬中尉とそんな関係にあつたなんて…』

「おひマックス！それは誤解だつて！」

「そうよー…これは逃げ出すための作戦…』

古代と末沙が慌てて否定したものの、マックスは何やら意味あり気に入切り返していた。

『大丈夫ですよ大佐！この事はロンド・ベルに戻つても内緒にしておきますよ…とにかくポケットの中に隠れもらひますか…』

マックス機は右ポケットにコウを、左ポケットには古代と末沙を入れ、そのままドアを開け外へと歩き始めた。

すぐさま一人のゼントラーディ兵とすれ違い、何事もなくその場を

やり過ごすかと思った時、今までいた部屋を開けたその兵士が何事かを叫んでいた。

『見つかったようです！揺れますので辛抱して下さい！』

マックスは手元のレバーを押してガウォーク形態に変形させ、飛び交う銃弾の中をかい潜りブリタイ艦内をひたすら逃避行していた。

第11話 ピック・エスケープ（その2）（後書き）

ここでもニンジンの話題が出ました。
それにしてもゼントラーティ人がニンジンを食べているとしたら、
大きねはどのくらいになるやう……

第11話 ビッグ・エスケープ（その3）

同日 13:45 ブリタイ艦内メインブリッジ

ブリタイ艦内のメインブリッジでは、ブリーフィングルームから移動したボドルザーがブリタイとエキセドルにある不安を切り出していた。

「あの三人で大丈夫なのかブリタイ？」

「一度でも敵の様子を垣間見たのであれば大丈夫でしょう…あの三人ならば必ずやり遂げるはずです…」

「ふむ…それならばいいのだが…」

その時ブリッジ後方にあるモニターに通信が入っていた。

『ブリタイ司令！マイクローンの捕虜が脱走しました！』

「何だと！？直ちに捕まえるんだ！」

その兵士からの通信が終わりかけた時、何やら戦闘機の轟音が鳴り響き、ブリタイ達が周囲を見渡しているとモニターを突き破り、マックスのバルキリーが出現しそのまま飛び去つて行つた。それを見たボドルザーは直ちに指令を下していた。

「奴らは一体何をしでかしやがる！何が何でも捕まえるんだ！」

マックス機は銃弾を浴びつつ艦内をあちこち飛行していたものの、たまたま入ったエレベーター内で動かなくなっていた。

「ダメです、全然動きません！」

「分かった！こうなつたら強行突破するしかない！エレベーターが止まつたら走るぞ！」

「了解！！！」

古代の決断に全員が同意し、エレベーターが止まると同時に走り出そうとした時、待ち構えていたゼントラーディ兵が飛び掛かる所をすんでの所で四人はすり抜け、古代と末沙、コウとマックスの二組に別れて逃走を開始していた。

同時にマックスのバルキリーは大爆発を起こし、その兵士も巻き添えになつていた。

同日 14:02 ブリタイ艦内メインブリッジ

その頃、ブリタイ艦内のメインブリッジでは、ボドルザーが苛々した様子で椅子に座りブリタイを叱責していた。

「奴らはまだ見つからんのか！？」

「はい…何しろ奴らは小さすぎるんで捜索に困難が出ているようだ

…」

「ブリタイ…この責任、取られればならんようだな……しばりくの間第一線を退いて貰おう…」

「…はい…」

「それではスペイを送り込む作戦はどうするおつもつで……？」

エキセドルが疑問をぶつけると、ボドルザーは即座に切り返していった。

「直衛艦隊のラプラミーズ隊にでも当たらせるつもりだ……それだけこの作戦は重要なのだ……」

第11話 ビッグ・エスケープ（その4）

同日 14:09 ブリタイ艦内

古代と未沙はブリタイ艦内をひた走り、ある一室に身を潜めていた。

「ウラキ少尉達、大丈夫かしら…」

「あいつらなら大丈夫だろう…それにしてもここは一体…早瀬君、あれを！？」

未沙は古代の指差す方向に目を向けると、思わず息を飲みつつもマイクロビデオを操作していた。

「巨人が小さくなつて行く…」

それはゼントラーディの所有しているマイクローン装置であり、スパイに志願したロリー達三人が装置内で巨人の姿から古代達と同じサイズへと縮小されていた。

二人はもつとその様子を見ようとした時、ゼントラーディ兵がその装置に近付きつつあつたため、足早にその場を離れ再び艦内を歩き始めていた。

やがて二人は武器倉庫らしき場所にたどり着き、身を潜めていた。

「あれが巨人達の言つてた“マイクローン”何ですね…」

「ああ…大変なデータを手に入れたようだな…」

「大佐、私思うんですけど…あの巨人達は元々私達と同じサイズじゃなかつたんでしょうか…そして監察軍と言う敵と戦つために自分

達の体を改造したんでしょうね…」

「まさか… そんな事がある訳が…」

「いいえ… あります… そうでなければバルキリー やガンダムと互角に戦える人間が、自然に生まれる訳がないんですから…」「もしかして遺伝子改造でもしたんだろうか?」

「おそらくは… こうして巨人からマイクローンが作れるのなら、反対に私達のサイズから巨人が作れてもおかしくないはずです… そしてもしかしたら巨人達の言う“プロトカルチャー”って、彼らがまだ私達と同じサイズだった頃の文明の事を言つのかも… ! ! ?」

その時、未沙の後ろからゼントラーディ兵の手が伸び、彼女を掴み持ち上げようとしていた。

古代は、果敢にもそのゼントラーディ兵に立ち向かっていたものの、足で蹴り飛ばされていた。

その様子を見た未沙は、ふとした弾みで手にしていたマイクロビデオを落としていた。

そのゼントラーディ兵が立ち去ろうとした時、古代が自分の体よりも大きなライフルを持ち上げ、全身の力を込めて引き金を引いて銃弾を何発か発射すると、ゼントラーディ兵は床に倒れ込んでいた。それを確認した古代は未沙の元へと駆け寄っていた。

「未沙！大丈夫か！」

古代は自分でも気付かないうちにいつもの“早瀬君”ではなく“未沙”と呼んでいた。

「……古代さん… 私はもう駄目… あなただけでも逃げて下さ…」「何を言つんだ！ 敵がやつて来る！ 早くしないと…」

「ビデオカメラを落としてしまつて……データが無くなつたら私、助かつても仕方がない……」

「そんな物が無くとも、俺達自身が見たり聞いたりした物をそのまま報告すればいいじゃないか！？」

「だったら尚の事……あなただけでも逃げて下さい……」

「馬鹿！諦めるな！こんな時こそ、生き抜かなければならんんだ！だから早く！」

古代は末沙をゼントラー＝ディ兵の手の中から救い出すと、手を取り合つて走り出していた。後方からは複数のゼントラー＝ディ兵が銃撃を加え、一人は銃撃によつて生じた破壊口から下へと落ちていつた。

第11話 ピッグ・エスケープ（その4）（後書き）

本日10月9日、ガンダムシリーズ最新作「機動戦士ガンダム揚げ……もとい、「機動戦士ガンダムAGE」の初OAの日です。親子三世代に渡る初の“大河ガンダム”……さてどうなりますやら……

それはともかく、劇中の古代が久々に“熱かった”……未沙を助けようと自分の危険も顧みずに行動する所は、ヤマトパート1をイメージして描きました。

未沙との仲は今後どうなるか……是非お楽しみに……

第11話 ピッグ・エスケープ（その5）

同日 15:02 ブリタイ艦内

どれくらいの時間が経過したのか、古代はようやく目を醒ましていた。かたわらには心配そうな表情の未沙が覗き込んでいた。よく見ると二人共、体がずぶ濡れになっていた。

「だいぶうなされてましたけど、大丈夫ですか？」

「……ここは一体……？」

「どうやらHنجンジンルームのようですね。冷却水が結構溜まつてたようだ……」

「ここに俺達落ちたつて訳か……」

「ええ……古代さんを引っ張り上げるのに苦労しました……もつとも、そのおかげで私達助かったんですけどね……」

「溺れないで済んだつて事は、君に借りを作つてしまつたかな……」

「上官を見捨てる訳には行きませんから……これでおあいこ……貸し借りなしと言う事です……」

「早瀬君……すまん……」

古代が頭を下げると、未沙はようやく笑顔を見せていた。

「…………しかし、よく考えて見ればおかしいよな……あれだけの大艦隊を持ちながら、自分の艦の修理も満足に出来ないなんて……」

「やりたくても出来ないんじゃないですか？彼らは自分達の体を巨大化させて最高の力を手に入れた……だけどその代わりに失った物も多いんじゃないかしら……」

「失った物か……」

「ええ… 今の彼らに民間人の存在や男女の関係がないのがその証拠かと…」

「あまりにも強い身体能力を手に入れたおかげで、戦う事しか出来なくなつた……と言う事か…」

「ええ… あれだけの大艦隊同士の戦いは、ものすごいんでしょうね… そのせいでおれだけの星が滅ぼされ、どれくらいの数の文化が失われたのかしら…」

「失われた文化… それが“プロトカルチャー”と言う事か…」

未沙の推測に古代は思わず納得していた。それと同時に、自分達が今まで接触して来た異星人達の事が思い出されていた。

（俺達が今まで戦つて来た異星人も“プロトカルチャー”的だつたのだろうか… だとしたら俺達もゼントラーディ軍と一緒に、ただ相手を全滅させる存在なのだろうか…）

「あの… 古代さん… ビリしたんですか？ 急に黙つて…？」

未沙の発言に、古代はふと我に返つていた。

「あ… ちょっと考えてたんだ… 彼らゼントラーディは、戦争しか知らない哀れな種族じゃないかってね…」

「そうですね… まるで私みたいで…」

「君が…？」

「私の家は、もう300年前から軍人の家系なんです… だから私も中学を出てから軍に入つてひたすら任務の事ばかり… 戦いの事しか頭にありませんでした…」

未沙の思いがけない発言を受け、古代も自分の身の上を告白していく。

「それを言つたら俺だつてやつた。俺の家は「」く当たり前の一般家庭だつた。だけど10年前にガミラスの遊星爆弾で両親を失つて以来、すでに軍に入つていた兄貴を頼つて俺もこの道に入る事になつてしまつた。その兄貴も三年前の暗黒星団帝国との戦いで戦死して……その際、兄貴とスター・シャさんの間に生まれた娘。俺にとつては姪のサー・シャも亡くなつて……今じゃ俺は一人ぼっちや……」

「でも古代さんはユキさんがいるじゃないですか……私から見てもユキさんは古代さんの事を一途に想つてますよ……」

「ああ……あの子は今時の女性にしては、一人の男に恩くしてくれれる……」

「だからですか？さつき寝言でユキさんの名前を連発してたのは……？」

未沙の発言に古代は思わず顔を赤くしていた。
実を言えば、ユキがボドルザーに捕まえられている夢を見ていたなさいていたのであつた。

「いや……さつき君があの男に捕まえられてたから……それがユキと重なつたんだろうな……」

古代が頭をかきながら言い訳していると、未沙は淋しげな表情で咳いていた。

「そうですよね……それに比べて私なんか任務が恋人代わり……」
「そんな事はない……君だつてそのうちいい人見つかると思つ……どうせなら一条なんかがいいんじゃないか？よく言つだろ……『喧嘩するほど仲がいい』って……」

輝の如前を出され、未沙は思わず反論していた。

「冗談やめて下せ……あんな命令違反常習者は……それに年下だし……つこでに言いますけど、一條中尉をヤマトで引き取つてもらいますか？彼は元々ヤマトに配属を希望していたらしく、何がある度に“ヤマトに行けばよかつた！こんなおばさんの元で働くのは嫌だ！”つてフォックター少佐にこぼしてるんです……つて笑わないで下さい古代さん！」

未沙の話を聞いた古代は思わず爆笑していた。

輝のヤマト配属の件は、フォックターの余計な圧力によつてマクロスに配属変更されたと、以前人事担当から聞いていたが、まさかここまでおかしな事になつているとは思つてもみなかつた。

「……いやあ悪い！君がおばさんなら、俺やコキはどう呼ばれると思つと……」

「……いこんです……もつ慣れましたから……でも、とにかくここから脱出しない事には……」

「ああ……そうだな……全ては始まらないしな……」

第1-1話 ピック・Hスケープ（死の5）（後書き）

森　ゴキ

「ちよつと作者さん…」これ以上古代君と未沙との仲が進展したらどうつかぬのよ…？」

一条　輝

「やつですよ…あくまで原作に忠実にして下さい…」

作者

「…」この二つ展開もあつと書ひの事です…ちやんとラストはまくつづく所はまくつづく所をめぐらすから御心配なく…」

第1-1話 ピッグ・エスケープ（その6）

同日 15:52 ブリタイ艦内

古代と未沙はエンジンルームから抜け出し、再びブリタイ艦内をひた走っていた。そんな中、生暖かい空気の流れを一人は感じていた。

「何かしら…風が吹いてる…」

「もしかしたら出口があるのか…？」

二人は風が吹いている方向を目指してひた走り、やがて舷側にある開け放たれたエアロックにたどり着いていた。

「やつた！出口だ！」

「ええ！それにしてもすげい数の艦隊ね…」

エアロックから見えるメインコア内に停泊しているゼントラーディ艦隊の姿を見て、古代と未沙は深い溜め息をついていた。

「こんなすごい数の艦隊を相手にしても、まず勝ち目はないな…」「そうですね…何とかして戦いを回避する方法を考えないと…」

未沙がその様子を見ながら話していると、後方から何やら足音が聞こえて、思わず二人は身を隠していた。

やがてその足音は止まり、「やつた！出口に着いたぞ…」「やりましたね！」の声がして、古代と未沙が見てみるとコウとマックスが立っていた。

「ウラキ、マックス！」

「無事だつたのね！」

「古代大佐に早瀬中尉も！」

「よくしへ無事で！」

四人は手を取り合い、お互ひの無事を確認していると、マックスが隣の物資搬入口からブリタイ艦の横に停泊している小型艦に伸びている「コンテナを発見していた。

「あの船、出港するようですよ…」

「あの船が出て行くと言つなら…あの船に潜り込むためにかくこから脱出しそう…」

「了解…！」

古代達四人は急いで行動を起こし、搬入口付近で警戒しているゼントラーディ兵の目をかい潜り、コンテナの間にどうにか身を潜んで出港しようとしている小型艦に潜り込んでいた。

同日 16:11 ラプラミズ艦メインブリッジ

「スパイを送り込むなんて、実に消極的な作戦ですね…」

ラプラミズ艦のメインブリッジでは、歴戦の勇士であるミリア・フアリーナが艦隊司令であるラプラミズに意見を切り出していた。

「言つたミリア…今度の敵であるマイクローン部隊“ロンド・ベル”は監察軍よりも手強いかもしね…充分心してからねばな

…

ラブライズの警戒するセーブリコニアは安心感のある発言を切り出していた。

「司令、御心配なく……相手はたかがマイクローン……この私がいる限り、ロンド・ベルなぞひとひねり致します……」

「さすがは『ヒースのミコニア』……頼もしいな……」

同日 16:56 ゼントラーーディ小型艦内

古代達四人はゼントラーーディ兵に見つかることなく、バトルポッド格納庫に身を潜めていた。

「早瀬君、これからどうする?」

「そうですね……あのバトルポッドを奪つてのはじりでしようが?」

未沙の思いがけない提案に、古代を始めとする一同は納得していたものの、ある疑問が浮かんでいた。

「それはいいアイデアだが……どうやって動かすんだ?我々のサイズでは動かしようがないんだけど?」

「そんなの簡単ですよ……優秀なパイロットが三人もいますから!」

「え……もしかして俺も……?」

「当然ですよ!それとも何?愛する誰かさんのいるヤマトに帰れなくともいいのかなあ……?」

思いがけない未沙の茶化しぶりに、古代は思わず困り果てていた。

「分かりましたよ中尉殿…」れじやぢつちが上官が分かりやしない
…」

そう言いながら古代は、マックスとコウでバトルポッドの操作方法を確認していた。

やがて小型艦を含むラプラミーズ艦隊はフォールド航行を開始していった。古代の心の中にはある想いが出ていた。

（もしかしたら俺達は帰れるかもしれない…もしそうならコキ…待つていてくれ…）

第11話 ヒック・ヒスケープ（その6）（後書き）

“ ハースのミリア ” 、ヒミリア・ファリーナの初登場でした。

マクロスTV版と劇場版では類い稀に見る強さでマクロスを翻弄した彼女でしたが、この作品でもその強さを見せてくれるはず……

次回、時間はさらに半月後に移ります……

第1-1話 ピッグ・スケープ（その7）

A · D · 2205 9 · 25 13 · 18 マクロスメインブリッジ

『バー・ミリオンリーダーより『エルタ1へ！艦隊周囲100キロまでの偵察完了！』これより帰還します！』

「ひから『エルタ1、『ご苦労様！』一条君！隨分遠くまで行つたのね？」

未沙が行方不明になつてほぼ一ヶ月、彼女に代わり航空管制業務についていたユキの笑顔も良かつたが、何故か物足りなさを輝は感じていた。

「どうしたの一条君、私の顔に何かついてる？…それから『ほんやりしてるようだけど…』

『いえ…今ちょっと早瀬中尉の事を考えてたんです…早瀬中尉なら必ず文句を言つていたのに…あのおばさんいつもそうでしたから…』

「まあ…未沙がおばさんなら私はどうなるの？…私は未沙よりも三つも年上なのよ！」

ユキの発言に、モニターの向こう側で輝は思わず驚きの声を上げていた。

『え…そりなんですか！？森さんが中尉よりも年上だつたなんて…なんせ森さんは凄く綺麗だし…』

輝の発言を受けて、横で一人の会話を聞いていたクローディアが通信に割り込んできた。

「一 条君！この私なんかユキよりおじり上なんですかからね！後で私達に何かおじりなさいよ！」

『そんなん…クローディアさんまで…』

輝がパネルの向こう側で恐縮しているとメインレーダーに反応があり、ヴァネッサが報告を入れていた。

「艦長！艦隊進行方向に重力震確認！テフォールド反応です！およそ500隻の艦隊が急速接近中！」

「何だと！直ちに戦闘配備！森君、全バルキリー隊並びにMS隊に出撃命令を出してくれ！」

「了解！デルタよりロンンド・ベル全艦隊へ！直ちに戦闘配備をとつて下せー！」

グローバルの命令を受け、ユキが全機に指示を出していると、アームド〇二から出撃しようとしているフォックナーから通信が入つていた。

『…ひからスカルリーダー！ただ今から出撃する！ユキちゃん待つてろよ、今夜はいいコトしようぜ！』

「はーい、お待ちしてまーす！部屋の鍵開けて待つてまーす！」

『…了解…出撃する…』

いつものように下ネタでユキの反応を見ていたフォックナーは、意外な反応に言葉を失つていたがそれと同時にひと安心していた。

(ユキの奴…やつと俺の冗談についてこれるよつになつたな…まあこれなら安心だ…)

「どうくにデフォールドしているんですよー早く何とか出来ないんですかー?」

ゼントラーデイ小型艦内の格納庫のバトルポッド内では、未沙が古代達を急かしていた。コウはエンジンチェックをしながら未沙を諭していた。

「まあ焦らずに早瀬中尉…」

「ウラヤの言う通りだぞ早瀬君……焦つてもいい事はないぞ……ん!?

古代がレバーを動かすと、そのバトルポッド“リガード”は動き出し、それに気づいたゼントラーディ兵が何事かとこちらの様子を伺っていた。

「敵兵が気づいたわ…」

「当たり前だろ…マックス、行けるか!?」

「いつでも…発射します！」

マックスがスイッチを押すとガトリング砲が発射され、側に近付きつつあつたゼントラーディ兵を吹き飛ばし、さらに壁面を破壊すると破損箇所から艦外へと飛び出した。

周囲は既に戦闘が始まつており、その様子を見た末沙は一言呴いていた。

「ここが…太陽系かアルファ星系ならいいんだけど…」

第11話 ビッグ・エスケープ（その8）

同日 13:31 ミコア専用バトルスーツ「クピット

「フン…“ロンド・ベル”とやら、たいした事はないな…これのど
こが手強い敵なのか…」

ミリアは愛機である深紅のバトルスーツ“クアドラン・ロー”的
クピットで眩いでいた。

クアドラン・ローは両腕にロリー達三人を載せたカプセルを抱えて
おり、ロンド・ベルの迎撃部隊を蹴散らしつつ目標であるマクロス
に向けて飛び続けていた。

「あれか…“民間人”とやらが乗るマクロスと言つ戦艦は…」

「クピット内のモニターでマクロスを捉えたミリアは、自分の機体
を巧みに操作してマクロスの対空砲火をかい潜り、艦後方の外壁に
取り付き、装甲を引きはがしてカプセルを投げ入れるとすぐさまそ
の場から離脱して行つた。

「こちら一級空士長ミリア！作戦完了、これより帰還します！」

ミリアが通信を送ると、モニターにはラップラミーズの姿が映し出され
ていた。

『『』苦労…我々も戦線を離脱する…合流ポイントに向かえ…』
「了解！直ちに向かいます！」

その頃、古代達四人の乗っているバトルポッドは今だに漂流を続けていた。

ポッド内ではマックスがロンド・ベルと連絡を取ろうと通信機器を操作していた。

「マックス、まだ連絡は付かないのか？」

「はい……やつて……いるんですけど……えつ……これは……！」

「どうしたマックス！？」

「かすかではあります……が反応が……これは……ミンメイさんの歌だ……！」

マックスが機器を操作すると、スピーカーからはミンメイの歌“私の彼はパイロット”が聞こえていた。それを聞いた四人は思わず叫び出していた。

「……と言つ事は……ヤマトが……！」

「マクロスが……！」

「ロンド・ベルが……！」

「……近くにいる……！」

四人は手を取り合い、帰還の喜びに浸っていた。やがてマックスが調整の済んだ通信機を古代の前に差し出した。

「大佐！ 軍用周波数キャッチしました！ いつでも通信可能です！」

「これで……本当に帰れるのね……」

未沙が涙を浮かべていると、古代はそれを見咎めていた。

「早瀬君泣くな……泣くのは地球に無事帰つてからだ……」

「そう言つ大佐だつて……泣いてるじゃないですか……」

「何を言つ……これは目にゴミが入つただけだ……」

「あの……そんな事よりも早く連絡を……」

「そうですよ大佐……」

「ウミマックスもうつすらと涙を浮かべながら古代に通信を催促していった。

「ひから宇宙戦艦ヤマト艦長古代進以下四名、敵バトルポッドを奪取して漂流中……直ちに救援願います……」

第11話 ピッグ・エスケープ（その8）（後書き）

ミリア搭乗の深紅のバトルスーツ“クアドラン・ロー”は、マクロス劇場版に登場した機を出しました。

TV版も劇場版も、彼女の類い稀に見る機動性は他を圧倒せることに十分な機体でした。

この作品中、もしかしたらもう一人の深紅の機体が似合う男との対決もあるかも……

第11話 ビッグ・エスケープ（その9）

同日 13:39 ヤマト艦内

この通信を最初に傍受したのは相原であった。初めはノイズ混じりで聞き取れなかつたものの、次第にクリアになるにつれ彼の顔は晴れやかになつていた。

「真田さん！古代さんから……艦長から通信が入つてます！
「本當か！？メインスピーカーに切り替えろー！」

相原がメインスピーカーに切り替えると古代の救援要請が流れ、第一艦橋の中は歓喜の渦で満ち溢れていた。

南部達“スリーアミーゴ”と土門は万歳三唱を繰り返し、山崎は珍しく涙を浮かべて古代帰還を喜び、島と真田は握手を交わしていた。

「真田さん……やっぱり古代はたいした奴ですねー！
「ああ、これでマクロスにいるユキも喜ぶだろー！」

古代帰還の知らせは、たちまちのうちにヤマト艦内に広がり、中でも佐渡はアナライザーと共に医務室で祝杯を上げていた。

「佐渡センセイ！古代サン帰還ヲ祝ツテ乾杯シマショウ！
「そうじゃな！今日はめでたい！久々に一杯やるかのー……おっ
とその前に……」

佐渡は自室のテーブルに置いてあつた初代艦長沖田十三の写真に口

ツプ酒を供え、一言呟いた。

「沖田艦長…古代が帰つて来た…さすがにあんたの息子じゃないか…ワシは今日ほど嬉しい事はない…」

同日 13:40 アルビオンMS格納庫

その頃アルビオンのMS格納庫では、シナプスからの連絡を受けた二ナがモーラと共にマクロスに向かうべく、連絡機へと乗り込んでいた。

「コウが…帰つて来るなんて…夢じゃないわよね…」

連絡機の席で涙ながらに二ナが呟いていると、アルビオンに帰還途中のバーニングから通信が入つて来た。

『二ナさん聞いたか！？ウラキの奴が帰つて來たぞ！これも古代のおかげだな…さすが俺の教え子だ…』

（バーニングはロンド・ベル配属以前、地球本星で士官学校の教官を勤めており、古代や島を育て上げていた事もあり、今回思いがけない出来事とはいえ、彼らと再会を果たしていたのであつた。）

「そうですねバーニング少佐…」

二ナが涙ながらに答えていると、スターク・ジエガンに搭乗しているキースからも通信が入つて來た。モニターに映つたキースの顔はヘルメット越しとはいえ、涙でひどい有様であつた。モーラは呆れ果てた表情でキースに切り出していた。

「ちよつヒキース…あんたなんて顔してんの…！？」

『だつてモーラ… ほんたう嬉しい事はないじや ないかあ～～～！？』

「……駄目だこれは……完璧に自分を見失つてゐる……」

第11話 ピッグ・エスケープ（その9）（後書き）

今回の作品限定で、バーニングの設定を変更しました。

古代達の教官をしていたという設定は、いささか強引でしたがその点に関してはご容赦を…

また、キースの愛機をジム・キャノンから、最新作、「機動戦士ガンダムUC」に出て来るスターク・ジエガンに変更しました。これも一応援護タイプと言う事なので、キースなら乗りこなせるはず…

次回、古代とユキが久々の再会…

第1-1話 ピッグ・エスケープ（その10）

同日 13:43 マクロスメインブリッジ

古代帰還の通信が流れたメインブリッジでも、その場にいた一同は歓喜の渦に見舞われていた。中でもユキは、古代の声を聞いた時から嬉し涙に暮れていた。

そんな中、シャミーは泣きじゃくりながらユキに抱きついていた。

「ユキさん！本当に良かったです～！」

「ちょっとシャミー！あんた何泣いてんのよ～」

「そうよ～一番泣きたいのはユキさんでしちゃうが！」

キムとヴァネッサの突っ込みにもかかわらず、シャミーはひたすら泣きじゃくりていた。

「みんなありがとう……私……こんな嬉しいことない……」

ユキが涙に暮れているとフォッカーから通信が入り、古代達の乗ったバトルポッドを確保したと報告が入った。

『これよりアームド02に帰艦する……ユキ、指示頼むぞ……』

涙声になりつつあるフォッカーの様子をモニター越しに確認したクローディアは、すかさずフォッカーに突っ込みを入れていた。

「ちょっと口イ……あなた何泣いてんのよ……」

『クローディア……これが泣かずにはいられるか……今夜は久々に上手い

酒が飲めるぞ……』

「全く口イつたら……さあユキ、最後のひと仕事……お願ひね……」

クローディアに促され、ユキは溢れる涙を拭い去り、管制指示を出していた。

「はい……じちらテルタ1……スカルリーダー及び捕獲したバトルポッドは……直ちにアームド02に着艦して……下さい……」

管制指示を出した後、ユキはその場の一団に促され、アームド02の格納庫へと走り出していた。

(古代君が……帰つて来る……夢じやないわよね……)

同日 13:52 アームド01格納庫

古代達四人は、輝のバルキリーによつてバトルポッドから降ろされると、そこには連絡を受けた藤堂長官とアルビオンから着いたばかりの二ナとモーラが待ち受けていた。

「古代……無事だつたか……」

「はい……ロンド・ベル司令並びに宇宙戦艦ヤマト艦長古代進以下四名、敵陣よりただ今帰還しました……」

「『』苦労だつた……詳しい報告は後にして、まずはゆつくり休みたまえ……」

古代と藤堂が話している横ではコウと二ナ、未沙、マックスと輝、柿崎がそれぞれお互いの再会を喜び合つていた。

そんな中、ブリッジからひた走ってきたユキが現れると、古代はすぐさまユキを見つけていた。

「ユキ……」

「古代君…会いたかった…」

ユキは古代の側に駆け寄り、彼に抱き着いて胸の中で泣きじゃくっていた。

周囲にいた者全では、思わずもらい泣きをして一人の再会を祝していた。

そんな中、未沙だけは複雑な心境で古代とユキの姿を見つめていた。ゼントラー・ディに捕らえられ、数日間 行動を共にして、不本意ながらゼントラー・ディ人の前で古代とキスした事により、未沙の中では自分でも気付かないうちに古代に対するほのかな想いが芽生え初めていた。

（一体何かしら…古代さんに対するこの想いは…昔、ライバーに同じような想いをしたけど…）

第11話 ピック・エスケープ（その10）（後書き）

未沙の古代に対する想いが芽生え初めました。
この先一体どうなる！？

未沙は自分の想いを古代に伝える事が出来るのか…？

それはまた後のお楽しみ…

第1-2話 ブラインド・ゲーム (その1)

A · D · 2205 9 · 25 22 · 56 ゲストルーム

「全く… 古代の奴は飲み過ぎだ… これじゃこの前の逆パターンだ…」「仕方ないですよフォッカー少佐… 古代さんは三人を守らうとして立派に責任を果たしたんですから…」

文句を言つフォッカーに、アムロが答えていた。
二人は古代をソファに寝かせると、後ろから心配そつた表情のユキに話しかけていた。

「とにかく良かつたユキちゃん、今日から安心して眠れるな…」「そうですよ森さん…とにかくひと安心して下さい…」「フォッカーさんもアムロ君も本当にすいませんでした… モンシア中尉が散々飲ませるからこうなつてしまつて…」「なつに、モンシアの奴には後できつとお灸を据えるさ…まあそのおかげ…」
「ちょっとフォッカーさん! その先は言つちゃダメーんもう… 相変わらずエッチなんだからーー! ?」

ユキの発言にフォッカーは思わず笑い出し、アムロはユータイプの直感でその事に気付いて顔を赤くしていた。

「んじや、俺は帰るからよ…」「僕もこれで失礼します… 明日の朝古代さんによろしく伝えて下さい…」「ええ… 一人とも遅くまでごめんなさいね…」

二人を見送ったユキは部屋に戻り、ソファで相変わらず気持ひよさに寝息を立てている古代を見つめていた。

（はあ…せつかく帰つててくれたのにこんな感じ…もついい！お風呂に入つてさつさと寝よう…）

早速ユキはバスルームに行き、シャワーを浴びてバスタブに浸かりながらこの一ヶ月の事を思い起こしていた。

輝とミンメイを連れ戻しに行つた未沙がゼントラーデイに襲われ、彼女達を救うべく出撃したまま行方不明になった古代の事を思い出さない日はなかつた。

昼間は任務に明け暮れていたものの、夜眠る時に枕を涙で何度も濡らした事か…

（それが今日、無事に帰還して二人で過ごせるかと思つたら……もう！古代君のバカ！）

あまり考えてものぼせるだけなので早々にバスタブから上がり、用意していたお気に入りのピンクのシースルーのネグリジェに着替えてバスルームのドアを開けた時、ソファで眠つているはずの古代が立つていた。

「ちょっと古代君…寝てたんじゃなかつたの？」

「ああ…寝てたけどバスルームから水音がしたんで目が覚めて…一緒に入ろうつとこここまで来たら君が出て来たんで…」

古代はそう言つとユキを抱きしめ、耳元で囁いた。

「ユキ……君が欲しい……」

「……私も……古代君が……」

ユキが最後まで言おうとした時、古代はユキを抱き上げそのままべツドへと連れて行つた……

回目 23・31 ゲストルーム

ひとしきり愛しあつた後、ユキは古代の胸の中でもどりんでいた。

「私……ずっと寂しかつた……あなたがこの一ヶ月いなかつたおかげで敵に捕らえられている間、ずっと君の事を考えてた……それよりも少し痩せた?」

「大丈夫……いつも通りちゃんと食べてたし……それにブリッジのみんなも親切してくれて……」

「後でグローバル艦長にお礼言わなくちゃな……それよりもあれから一ヶ月たつてたなんて……まるで浦島太郎になつた気分だ……」

古代の発言にユキは思わず吹き出していた。

「やあね古代君たら……もしかして一気に年取つた気分?」

「おじおじ……何て事言つんだユキは……」

「冗談よ……でも末沙達を守るの大変だったでしょ?」

“末沙”と言つユキの発言に、古代は思わずびくりとしていたが、あえてそんなそぶりは見せずにユキに切り返していた。

「いや……それより早瀬君と話して気付いたが……彼女は結構いい人だつたよ……」

「前に言つたでしょ？未沙は普通の子だつて……だからつて未沙に浮気なんかしちゃだめよ……」

再び古代はびくつとしたものの、そんなそぶりも見せず今度は何も言わずにユキの脣にキスをしながら囁いた。

「大丈夫……僕が愛しているのは君だけさ……それよりもユキ……」「もう……古代君たら……」

第1-2話 ブラインド・ゲーム（その1）（後書き）

劇中、ユキの着ていたピンクのネグリジH…
ヤマトパート1第1-9話に出て来ましたが、これに関しては数多く
の方が二次創作で取り上げていますが今回の作品でも取り上げまし
た。

しかしユキってもしかして……呑したがり?

森 ユキ

「いいじゃない! たまにはサービス、サービス!」

古代 進

「君は他のアニメキャラか!-?」

第1-2話 ブラインド・ゲーム (その2)

A · D · 2205 9 · 26 10 · 41 マクロス艦内市街地
カフェテリア

翌朝、古代とユキは遅い朝食を取るために、いつものカフェテリアを訪れていた。

（実を言えば朝方まで愛しあつたおかげで10時過ぎまで寝ていたせいもあるが…）

カフェテリアのドアを開け、中に入ろうとした古代は思わず目を丸くしていた。

そこにはプルとシンタ、クムの三人が走り回り、その後をファが止めようと躍起になっていた。

「プルプルプルプルプル~~~~~!!!!」
「いやつほ~~~~~い!!!!」
「アハハ~~~~なんか面白~~~~い!!!!」
「こら~~~~! プルにシンタにクムつー周りの迷惑考えな~~~~い!」

この様子を見た古代は、そばにいたユキに思わず問い合わせた。

「……こらついつから小学校になつた……? それに奥のテーブル席に学生らしい集団がいるんだが……」

絶句してこる古代を見て、ユキは改めて事情を説明していた。

「そういえば古代君は知らなかつたのよね…あの子達もロンド・ベルの一員なのよ…古代君達が帰つてくる五日前に合流した、ネエル・アーガマ艦隊に乗り込んでいる子達なのよ…それも戦いで親兄弟を亡へした子達がほとんどで、平均年齢が15歳前後と言ひ話よ…」

ユキが説明していると、一人の姿を見たプルが近付き声をかけてきた。

「お姉さん、隣にいるおじさんって誰なの？」

「お…おじさん！？」

プルのとんでもない発言に、古代は思わず絶句していた。

これまで“おじさん”と呼ばれたことはなく、（例外としては、三年前の暗黒星団帝国戦で散つた姪のサー・シャに“叔父様”と呼ばれた事はあるが…）

自分でもまだ若こと言つゝ眞魚はあつたが、さすがにプルの突拍子もない発言には白旗を上げるしかなかつた。

そんな時一人の女性士官が近付き、プルをたしなめていた。

「プル、この人はおじさんじゃないのよ…ヤマトの古代艦長よ…」

「あの…あなたは？」

「申し遅れました…私はドック艦ラビアンローズ艦長を務めるHマリー・オノス大尉であります…あの…お会いしたかつたです古代艦長！」

Hマリーはやつぱりと、いきなり古代の両手を取り、握り締めていた。

「な…なんですかHマリー大尉！？」

「私、歴戦の英雄である古代大佐にお会いしたかつたんです……」ついやつてお会いできるなんて夢のようだわ！」

エマリーの発言に古代はうろたえ、横にいたユキは思わずムツとした表情浮かべていた。

（何よ古代君！美人に言い寄られて『テレテレしちゃって…』）

そんなユキの様子に気づいた古代は慌てふためいて、エマリーの手を離してユキの事を切り出そうとした時、当の彼女が先に切り出していた。

「大佐！私はこれからメインブリッジに行つて、早瀬大尉との事務引き継ぎがありますのでこれで失礼しますっ！」

そう言つなりユキは早足でカフェテリアを出て行き、メインブリッジへと向かつて行つた。

その様子を見ていた古代は冷や汗をかきながら考えていた。

（…………どうすりやいいんだ…後で謝らないとこれからが大変だ…）

一方、テーブル席でこの様子を見ていたジュドー達は顔を付き合わせ、何事かを話していた。

「あれ見てどう思つ？」

「何か…ブライトさんの時より凄い事になりそうだ…」

第1-2話 ブラインド・ゲーム（その2）（後書き）

エマリーさん、ブライドに代わって古代に乗り換えました。
これから先、どのような展開になるかぜひお楽しみに！

第1-2話 ブラインド・ゲーム（その3）

同日 10:52 マクロス艦内

その頃、ロリー達スペイ三人はマクロス艦内を当てもなくさまよっていた。

前日、ミリアの駆るクアドラン・ローがカプセルをマクロス艦内に投げ入れたのはいいが、目標地点の市街地からかなり離れたエアロツクだつたため、この日はその場に留まり、一夜明けてから行動を開始していた。

「なあ……どうでもいいがこの格好何とかならないのかよ…」

「ロリーの言う通り…いくらマイクローンに関する資料が足りないからって、こんな格好では落ち着けないよ…軍服が欲しい…」

この時、彼ら三人が着ていたのは黒い一枚の布であり、地球人から見れば怪しまれる事一目瞭然と言つてたちであった。

そんな中、人が来る気配を感じた三人は物陰に隠れていた。

現れたのはこのマクロスに乗艦している男性士官であり、その男はある部屋…更衣室に入り、しばらくして私服に着替えた彼は携帯電話片手に何かを話しながらその場を去つて行つた。

「……おい…見たか?」

「ああ…あの男、さつきと違う軍服を着ていたぞ…」

「つて事はあの部屋に軍服がある！」

一
めりし！早速あの部屋の中に入つて軍服探そう！」

「！」

同日 11：01 マクロスメインプリッジ

(……「井せん、ぬうべじんな顔して古代せんと……）

メインブリッジでコキとの事務引き継ぎの最中、未沙はそんな事を考えていた。

「……で、引き継ぎは以上です、早瀬大尉。大尉？聞いてるんですか？」

ユキの問い掛けに未沙はようやく我に返り、その様子を見ていたユキは未沙にそつと囁いていた。

「ちょっと未沙… 疲れてるの? なんかさつきからぼんやりしてるよ
うだけど大丈夫?」

「え…大丈夫ですよユキさん…」

それなしにしんた」と

「了解です……でも不思議なんですが、ツクス少尉が揃つて中尉になつたのに、どうして古代さんだけが昇進しないんでしょうね？」

「そうよねえ……敵陣から無事帰還したんだから特別昇進の対象になつてもいいはずなのに……それよりもみんな聞いてくれる！？ラビ

アンローズのHマリー艦長が古代君に言に寄るの…古代君たら満更
でもない表情してたし、私もう腹立てちゃつて…」

凄い剣幕でまくし立てのコキに、ヴァネッサが衝撃的な発言をして
いた。

「あの…聞いた話しながらですが…Hマリー艦長つてロンド・ベル副
司令のブライト大佐と以前不倫関係にあつたとか…」

その爆弾発言に一同はどん引きし、中でもコキは今にも泣き出しぶ
うな表情で呟いた。

「古代君に限つてそんな事はさせないわ…あの女がそつと事する
なら私にだつて考えがあるわ……」

そのコキの表情を見ていた未沙はひそかに思つていた。

（恋する女つて…命懸けなのね…いづれ私もそつなるのかじい…）

第1-2話 ブラインド・ゲーム（その3）（後書き）

ロリー達スパイ三人組がマクロス艦内に侵入して初めての仕事が服装探し……

TV版では何故か女子更衣室に忍び込んだ揚げ句、ロリーがスカートを履いてしまい再び着替える始末……

今回は彼らのために、男子更衣室にしました。これで彼らもひと安心！

次回、揚羽会長が久々の登場！

古代に対しても進退問題を突き付ける……
どうする古代！

第1-2話 ブラインド・ゲーム（その4）

同日 13:08 マクロス艦内大会議室

この日の午後、ロンド・ベルの緊急ミーティングが開かれ、ゼントラーディに捕らえられた古代達四人による報告会が行われた。各艦の艦長並びに主なスタッフは、古代の報告にただ呆然とするしかなかつた。

何しろ今まで接触して来た異星人とは異なり、文化を持たないただ戦うためだけの種族だけに、彼らの受けた衝撃は並々ならぬものがあつた。

（ただし、古代と未沙がキスした件に関しては四人の暗黙の了解で伏せられていた……）

大会議室の中は重苦しい雰囲気に包まれていたが、話を黙つて聞いていた藤堂が切り出していた。

「諸君！ いたずらに不安な気持ちになつても仕方ないー！ こにはとにかく冷静になつて考えてみようではないか？」

この藤堂の発言を受け、一同は彼の意見に賛同していた。
だが、この会議にオブザーバーで参加していた揚羽会長が挙手して発言を始めていた。

「一通り話を聞かせてもらつたが、私からある提案を出そつと思つ
……特に古代艦長……あなたの責任問題についてだ……」

「責任問題… それはどういふ事ですか？」

古代がいぶかしげな表情で問い合わせ返すと、揚羽会長は不敵な笑みを浮かべていた。

「要するにだ… 君はロンド・ベルの司令であるにも関わらず、この一ヶ月もの間ずっと不在だった… それもゼントラーティと言つ異星人の捕虜と言つ形でな…」

勿体振る揚羽会長に周囲は“またか”と呆れ始めていた。シナプラスはそんな一同の代表として揚羽会長に切り出していた。

「……それで会長、あなたは何が言いたいのですか？」

揚羽会長はシナプラスをジロリと睨みながら爆弾発言をしていた。

「……こいつはロンド・ベル司令、並びに宇宙戦艦ヤマト艦長古代進の解任と地球連邦軍からの退役を要求する！」

大会議室内はこの発言に対する抗議で満ち溢れ、逆に揚羽コンシュルンに対する非難までが続出する始末であった。

そんな中、揚羽会長はその周囲の抗議を一喝していた。

「諸君、黙りたまえ！私は経営者であると同時に、連邦軍の最高顧問でもある一君達のような者をすぐにでもクビに出来るのだぞ！…とにかく、古代艦長は今回の件に関しては全責任を取らなければならんのだ！何しろ連邦軍が保有するバルキリーやガンダムといった特一級の兵器を敵に破壊されたのだからな！」

揚羽会長の発言を受け、コウと未沙が反論に転じていた。

「会長、それは違います！ガンダムフルバー二アンを破壊されたのは自分の腕が未熟だったからであります！責任は自分にあるのに、どうして古代大佐が責任を取らなければならないんですか！？」

「そうです！元はと言えば、ミンメイさんを連れて勝手に飛び出した一条中尉にも責任があるはずです！」

揚羽会長は一人の反論にも動じる事なく、さらに発言を続けていた。

「君達は黙りたまえ！とにかく全責任は古代大佐にあるのだ！この際だ…古代大佐、君の意見を聞こうではないか？」

今まで全員の意見を黙つて聞いていた古代は、立ち上がりて切り出していた。

「自分は辞めるつもりはありません！」これまで通り、この艦隊の総数10万人の人々を守らなければならないのです！それをあなたは途中で投げ出せと言うのですか！？ 会長の意見はあまりにも横暴です！この要求の撤回を求めます！」

古代の力強い発言に、揚羽会長を除く一同から拍手喝采が浴びせられた。

それでも揚羽会長は不敵な笑みを浮かべつつ、さりにある提案を切り出していた。

「あくまで解任要求を撤回しようとしたのが…ならば条件がある…」
「今から8時間以内に、このロンド・ベル艦隊全将兵、並びにマクロスにいる民間人の総計10万人全員の署名を集めれば解任要求を撤回してもいいのだがね……」

突然の揚羽会長の要求に、その場にいた一同は思わず絶句していた。
そんな雰囲気の中、揚羽会長は不敵な笑みを浮かべつつ呟いていた。

「何も全地球圏の総人口30億人分とは言っておらん……さつきも言つたように10万人分だけでいい……たやすいはずだ……」

第1-2話 ブラインド・ゲーム (その4) (後書き)

前回の後書きで“ロリーがスカート……”と書きましたが、正しくは“ワレラがスカート……”でした……

度々の誤字、深くお詫びします……

次回、署名運動に奔走するブラインド・ベル一同の姿を描きます……

第1-2話 ブラインド・ゲーム（その5）

同日 13:59 アームド01格納庫

「そんな…「冗談じゃないですよー本来なら僕が責任を取らなければならぬのに、どうして古代先輩が…」

アームド01の格納庫で輝が自機を整備中、フォッカーと柿崎から古代解任の件を聞かされ、唇を噛み締めつつ呟いていた。

「それで隊長は、当然古代大佐の解任に反対っすよね！？」

「当たり前じゃないか！今古代先輩を解任したらこれから先どうすりやいいんだ！何なら今から揚羽会長に直談判しに行つて来る！」

柿崎の問い掛けに輝が答えると、フォッカーが即座に切り返していた。

「まず無理だな…あの会長は事前にアポイントを取らないと会えそうもない…輝のようなペーぺーから連邦政府のお偉方…揚げ句の果てには、自分の家族にまで事前のアポイントを強要しているらしいマトの連絡機が到着していた。

…

フォッカーの発言に輝と柿崎が絶句していると、アームド01にヤマトの連絡機が到着していた。

連絡機のゲートが開くと、中から坂巻、仁科、太助、土門、それに揚羽会長の息子である揚羽 武が下りて来た。

「何だ？ヤマトの若手連中勢揃いでビリした？」

「フォッカーが不思議そうな表情で呟くと、一同を代表して坂巻が切り出していた。

「少佐！俺達五人が手分けして、ヤマトクルー600人分全員の署名と血判状を集めてきました！」

「血判状って……お前らそこまでして……」

坂巻の発言にフォッカーが絶句していると、揚羽が切り出していた。

「少佐……親父は昔からヤマトの活躍を疎ましく思っていたのはござ存知ですね……」

「ああ……本来ならASS-1…今のマクロスの修復を揚羽コンシールンが独占し、対ガミラス戦に投入するはずだったのが、作業が遅れたおかげで中断の憂き目にあってしまった…そのうちにイスカンダルからのメッセージが届いて、南部重工で建造していたヤマトが出発したのはみんな知つての通りだ…要するにお前の親父さんの頭は、ヤマトに対する嫉妬心で一杯なんだろ？…」

「ええ……その事については親父に成り代わり謝罪します……」

揚羽が頭を下げるようとすると坂巻が彼を一喝していた。

「おい揚羽！そんなに頭を下げるな…さつきも言つたろ？が！お前はお前、親父は親父だつてな……とにかくこの件に関しては気に入るな！それよりも少佐、みんなで手分けすれば10万人分なんてあつという間ですよー早いとこやつて古代艦長のクビを繋げないと！なあみんな！」

坂巻の発言（と云つよつは演説…）を聞いた一同は頷き合つと、ア

ームド01の格納庫を後にして市街地へと向かつて行つた。

この様子を見ていたフォッカーは目頭を熱くしながら呟いていた。

「さすがヤマトクルーだ…古代もいい部下を持つたな…輝、俺達も市街地に行くぞ！」

「了解です先輩！あ…その前にこの事をブリッジの早瀬大尉にも知らせて来ます！」

「ああ！人数は多い方がいい…頼むぞ！」

第12話 ブラインド・ゲーム（その6）

同日 14:08 マクロスマインブリッジ

「冗談じゃないわよ！こんな要求つてありなんですか！？」
「そうですよ！どうにかなりませんか艦長！？」

メインブリッジでキムとシャミーが揚羽会長の発言に憤り、グローバルに抗議していた。

「しかし……あと7時間以内に10万人分の署名が集まるかどうか……」

グローバルが不安気に火のついていないパイプを握り締めながら呟いていると、未沙が固い決意をぶつけていた。

「艦長、私は可能だと思いますよ……ここで諦めている場合じゃないんです……私達がゼントラーディに捕らえられた時、古代大佐に“諦めるな……最後の最後まで信じていれば道は開かれる……”と励まされました……ですから私達も最後の瞬間まで諦めちゃいけないんです！」

未沙が涙混じりにグローバルを説得している所に、輝がブリッジに息せき切つて入つて來た。

「早瀬大尉！今ヤマトの坂巻大尉達がやつて來てるんですが、ヤマトクルー全員の署名を五人で手分けして、たつた30分で集めたそうです！」

「一条君、それ本当なの！？」

「ええ！だからやつてやれない事はないんです！あの会長の鼻を明かすには、みんなの力が必要なんです！」

輝の必死の説得に、ようやくグローバルも腹を決めていた。

「分かった！とにかく今からでもやつてみよう！早瀬君、君はキム君とシャミー君と一緒に市街地で署名活動に行つてくれ！もう既に森君達もやつてているはずだ…私もすぐに行く！それと万…の事を考えて、クローディア君とヴァネッサ君は残つてくれ…後を頼む！」

「了解…！」

同日 14:21 マクロス艦内市街地

輝、未沙、それにシャミーとキムの四人が市街地に着くと既にユキを始め、ユキの両親の浩一と晴美、ジードー達シャングリラチルドレン…その他大勢のロンド・ベルメンバーが署名活動を行つていた。その中にはミンメイとカイフンもあり、特にミンメイはサングラスもかけず、私服のままでいるのに道行く人々に大声で叫んでいた。

「ロンド・ベル司令並びに宇宙戦艦ヤマト艦長古代進さんの解任に反対の方…こちへに名前を書いてください…！」

そのせいもあってか、署名運動をしているメンバーの前は大勢の市民でじつた返していた。

輝と未沙は何とかミンメイの側に来ると、彼女に問い合わせていた。

「ミンメイ、どうして君が…」

「ホント……そんなに大声出したら歌えなくなるわよ…」

「輝……それに早瀬さん……今回の件は全て私のわがままから起きた事なの……あの分からず屋の会長をギャフンと言わせる事が出来るなら歌えなくなつてもいい……そう思つたらいてもたつてもいられなくて……」

「さうか……ありがとうミンメイ……よし……それじゃ俺も…宇田戦艦ヤマト艦長古代進さん…」

一方、よつやく市街地にたどり着いたロリー達スペイ三人は、じつた返す市民の姿を見て一様に驚きを隠せずにいた。

「な、何だこの混雑は…」

「分からん……何かの集会か?」

「前にも見たけど、大勢の男と女が混ざつてゐる…」

三人が呆然と立ち尽くしてゐると、コキの母である晴美が側にやがて來た。

「すみません!私の義理の息子になる予定のヤマト艦長古代進さんとの解任要求に反対する署名活動をしているの…お兄さん達、ここに名前を書いて下さいな!」

いつもの如くまくし立てる晴美に圧倒された三人は、仕方なく覚えたての地球文字でそれぞのの名前を書くと、晴美は一礼してその場を後にしていた。

三人はそんな晴美を見送ると、ある事に気付いていた。

「なあ……“『ダイススム』”って名前、聞いた事ないか……？」

「ああ……あの時の捕虜の名前だろ？それがどうかしたのか？」

「ああ……ちょっと気になつて……つておい！もしかしてあそこにある女……あの時の……」

コンダが指した方向に、署名活動に取り組んでいる末沙を見つけ、三人は呆然としていた。

「あいつらどうやって脱出したんだ……？」

「分からん……これも“プロトカルチャー”的力か……」

第1-2話 ブラインド・ゲーム（その6）（後書き）

前回、坂巻が“ヤマトクルー600人分……”と言つてましたが、本当ならこれくらいの人数がベストかと…

ヤマト本編で設定されていた“114人”では少なすぎて、何かあつた時に色々と大変じゃないかと思います。

（しかし当時のヤマトの制作者は何を考えてクルーの数を決めていたのか…）

次回、モンシアが署名活動に駄々をこねます…
その理由とは…?

第12話 ブラインド・ゲーム（その7）

同日 16:06 アルビオンMS格納庫

「ふざけるな！何で俺が署名しなきゃならねえんだ！あのミニスカねーちゃんの彼氏が辞めさせられようと、俺の知った事じゃねえ！」

アルビオンのMS格納庫でモンシアが署名用紙を前にコウを相手に毒づいていた。

「モンシア中尉！」の艦で署名していなのはあなただけなんです！とにかくお願ひします！」

「モンシア！いい加減ダダernerのはやめろ！今ここで古代大佐が辞めちまつたら、誰がこの難局を切り抜けるんだ！？」

「そうですよ中尉！」こは素直にサインして下さい！」

ベイトとアテルがモンシアに抗議し、周囲ではアルビオンクルーが事の推移を見守っていたものの、それでもモンシアは断固拒否を続けていた。

「いいか、大体ウラキの奴がガンダムで出撃したのがいけねえんだよ！揚げ句の果てにガンダムをゼントラー・ディとやらに破壊されちまつてよ！本当ならお前も一緒にクビになるべきなんだよ！」

「しかし中尉！」

「しかしも糞もあるか！いい気味だ、これでのミースカねーちゃんをギヤフンと言わせられるぜー！」

モンシアの発言に、コウは思わず腹の中が煮え繰り返っていた。

（サインを拒否する理由が森大尉だなんて… こうなつたらぶん殴つてでもサインを書いて貰おうか… それが元で退役するはめになつたつて構うもんか！）

「ウはそう思い行動に移そうとした時、二ナがモンシアの前に立ちはだかり、いきなり彼の頬に平手打ちを食らわしていた。この様子を見ていたアルビオンクルーは呆然とし、殴られた当のモンシアは憧れの二ナから受けた仕打ちに圧倒されていた。

「…二ナさん…」

「モンシア中尉… あなたは森さんがどんな思いで古代大佐を待つていたか分かりますか… あの人は、何ヶ月でも何年でも待つつもりだつたんですよ… それをあなたは…」

そう言つと二ナはその場で泣き崩れていた。そこへ今まで一部始終を見ていたシナップスがモンシアの前に姿を見せた。

「モンシア中尉… 二ナ君の気持ちも分かつてやりたまえ… いくらいこの前の件があるからとはいえ、森大尉の事を考えたらそのような事は言えないはずだ…」

「はあ… 分かりました艦長… 二ナさん… あんたにや負けたよ…」

モンシアはそう呟くと、「ウの持つていた用紙にサインすると一同から拍手喝采が沸き上がつっていた。シナップスはそんな一同に切り出していた。

「とにかく、非常要員以外は今からマクロスに行つて署名活動をしましたまえ… あの揚羽会長の鼻をへし折つてやらんとな…」

次回、いよいよ古代の運命が決まる…

果たしてどうなる…？

第1-2話 ブラインド・ゲーム（その8）

同日 21:15 マクロス艦内大会議室

広大な大会議室には、古代と揚羽会長の二人だけが相対していた。古代は揚羽会長をじつと見据えながら考えていた。

（あと15分か…果たして間に合つんだろうか…署名は集まるんだ
ううか…）

古代がそう思つていると、今まで黙想していた揚羽会長がおもむろに口を開いた。

「さて時間だ！古代艦長、君の処分は決まったな！」

「会長！時間はまだ15分あります！何故待てないんですか！？」
「確かに時間はまだある…だが今だに誰も来ないではないか？署名が集まらないのでみんなとっくに諦めてしまつたのだよ！」

「会長！自分はどんな状況にあつと、諦めるつもりはありません！例え残り一分一秒としても！」

古代が力強く切り返していると、クワトロを始めとするロンド・ベルのメンバーが大会議室に入つて來た。

「みんな…来ててくれたのか！」

「済まない…集計に手間取つてな…それで遅くなつた…」

古代の問い掛けにブライトが答え、アムロとベンケン、それにフオ

ツカーが山ほどある集計用紙の束を揚羽会長の机上に載せていた。それでもなお不敵な笑みを浮かべた揚羽会長は、ブライトに問い合わせていた。

「それで…結果は出たのかねブライト大佐…？」

「もちろん全員一致です…古代大佐解任要求に全員が“ノー”と言った回答がありました！」

ブライトの発言で、今まで余裕の表情を浮かべていた揚羽会長の顔がひきつり、慌てて机上の用紙をめくり始めてチェックを開始していたが、どれも古代を支持する旨ばかりが目立ち、中には揚羽会長個人に対する批判も書かれている始末であった。

「そ、そんなバカな事が…誰か一人でも賛成の人がいるはずなんだが…」

慌てふためいている揚羽会長の前に、その場にいた一同の中からモンシアが現れ、怒りをぶちまけていた。

「いるワケねーよバカ会長！大体な、どこの世界に歴戦の英雄をクビにしろって奴がいるんだ！？ 大佐はな、俺達ロンド・ベルの希望の星だ！」

モンシアの発言にロンド・ベル一同から拍手喝采が寄せられ、揚羽会長はますます頭に血が上っていた。

「ええい…貴様ら…全員この場でクビにしてやるつか………？」

揚羽会長が怒りに身を任せていると、クワトロが静かに語り始めていた。

「会長…あなたのやり方は横暴過ぎる…これだけ多くの人々が古代大佐を支持しているのだから素直に認めて頂きたい…その中にはあなたの側近も含まれているんですね…」

「な…何だと…」

揚羽会長が驚くと、側近の一人が前に出て辞表を突き出し、何も言わずにその場を立ち去つて行つた。

その様子を見たクワトロはさらに揚羽会長に切り出していた。

「もしこの結果に不満があるのならこのマクロスを降りても構いませんよ…どうせあと一日でリンボスに到着するのですから…」

「言われなくともそつさせて貰つ！貴様らの顔を見るつもりもない！」

そう言い放つた揚羽会長は、大会議室を出て行く前にクワトロの耳元で囁いていた。

「私はお前の正体を知つてゐるぞシャア・アズナブル…覚えてろよ

…」

「知つておいででしたか会長…ロンド・ベルの人間はみんなとくに私の正体を知つてますがね…」

クワトロの意外な反撃に何も言わず、揚羽会長はその場から退出して行つた。

「ありがとみんな…どうにかクビは繋がつたようだな…」

古代はそう言つと、ライトやクワトロ達と握手を交わし、ユキの側に来ると思わず彼女を抱きしめていた。ユキも涙を流しながら古代にそつと囁いていた。

「良かつた…あなたが辞めさせられなくて…」

「ユキ…君にも迷惑かけてゴメン…」

今にもキスしそうな雰囲気の二人に、フォッカーが咳ばらいをしながら呟いていた。

「あ……その……お前ら公衆の面前でラブシーンやるつもりか?
ここにはジュー達未成年もいるんだぞ……他でやれ！」

フォッカーのその一言で古代とユキは体を離し、思わず顔を赤らめると周囲はたちまち笑い声で溢れ返っていた。

第1-2話 ブラインド・ゲーム (No.8) (後書き)

気が付けば今回で100話目……
作者の下手くそな文章ながら、じつは愛読いただきありがとうございます。

これからもこの物語は続きますので、飽きずにお読み下さるこまか

次回、コウとケリイが久々の再会……

第1-2話 ブラインド・ゲーム（その9）

同日 21:46 マクロス艦内展望室

「ウチ二ナは、マクロス艦内の展望室で窗外に広がる星空を眺めつつ、先程までの出来事を話していた。

「とにかく良かつたわね…古代大佐がクビにならなくて…」
「ああ…あの人をクビにするなんて、あの会長何考えてるんだか…」
「ホント…でもあの顔見た？“このままでは済まさんぞ”って…」
…クワトロ大尉にまで凄んでたわよ…」
「ああ…でも大尉は軽く受け流してたけど？」
「さすが“赤い彗星”だけあるわね。」

ロンド・ベルのほとんどの者が、クワトロの正体がシャア・アズナブルである事を知っていた。二ナのような外部の人間でも彼の正体を知っているくらいであるため、それほど彼の知名度は高かつたのである。

「でもさ…あの時まさか二ナがモンシア中尉を殴るなんて、夢にも思わなかつたよ…あればなれば僕が中尉を殴つてたかも…」

コウの発言を受け、二ナはその時の事を思い出し、思わず顔が真っ赤になつていた。

「だつて…あの状況じゃああするしかなかつたのよ…私、人を殴るなんて初めてだつたから…とにかく中尉はショックみたいだつたけど…でも、私だつたから良かつたけどコウだつたら上官侮辱罪で訴

えられるわよー。」

「…………

二ナの発言に「ウは思わず押し黙っていた。モンシアを殴つて退役しても構わないとと思っていたのに、いざ他人からそんな罪名を言われるとは思つてもみなかつた。

そんな中「ウは後ろから肩を叩かれ、振り向くとケリイが立つていた。

「ようウラキ、久しぶりだな……」

「ケリイさん！お久しぶりです！…………つて言つよつビツヒリヒリ

…………？」

「“奴ら”……じゃなかつた……ゼントラーディとやらに捕まつてたそつだな……お前がいない間に、俺もロンド・ベルに参加するはめになつてな……」

「あの……ラトーラさんはどうしたんですか？確かにあの後結婚したつて聞いたんですけど……」

「ウの問い掛けに、ケリイは一瞬躊躇したものの、静かに語り始めた。

「ラトーラは……シーマの手の者によつて殺された……だから俺はシーマに復讐するため、ロンド・ベルに参加する事にしたんだ……」

「…………そつだつたんですか……あれ？ケリイさん……左腕が……ありますけど……？」

「ウがよく見ると、以前出会つた時に無かつたはずの左腕がある事によつやく気付いていた。

二ナはクスクス笑つと「ウにその理由を説明していた。

「実はね……ヤマトの真田副長がわざわざネエル・アーガマに来て、
“右腕だけでは何かと不便だから義手を作ろ”なんて言つて……た
つた一日で作ってくれたんですって……真田副長も幼い時に事故で両
手両足を失つて、それ以来義手義足だけなんの問題も無いそうよ
……」

「そうだったんですか……ケリイさん、使い勝手はどうですか?」

「ああ……悪くない……とにかく今まで何かと不便だったからな……そ
分これから先頑張るつもりだ……俺はシーマをこの手で討ち果たすま
で生き延びて見せる……」

第1-2話 ブラインド・ゲーム（その9）（後書き）

この話の後日談……

「ウ・ウラキ

「真田さんの義手義足つて爆弾なんだそうですが、ケリイさんの義手も、外すとライフルが現れたり、腕自体を飛ばせるとか武器になつて……」

ケリイ・レズナー

「そんな事ある訳ない！」

……ベタな寸劇でした……

次回、シーマ様再び登場！

第1-3話 暗礁空域にて用心！？（その1）

A · D · 2205 9 · 27 9 · 01 暗礁空域“茨の園”

暗礁空域　「これはかつての一年戦争…そして様々な戦いによって発生したコロニー及び艦船の残骸が自然に集まっている場所である。その中にある一年前の“星の屑作戦”的立役者だったネオ・ジオンのエギーユ・デラーズ中将が設置した基地“茨の園”では、シーマ率いる艦隊が次なる作戦に向けて鋭気を養っていた。旗艦リリーマルーンのブリッジでは、シーマが副官のコッセルから報告を受けていた。

「…………で、それは本当なのかい…ロンド・ベルの連中がこの空域に近付きつつあるってのは？」

「はい…連中は本拠地であるロンティオンに向かって、この空域を通るのが一番の近道と言つ事だそうです……」

コッセルの報告を聞いたシーマは持っていた扇子を口元に近づけ、しばらく思索すると不敵な笑みを浮かべながら切り出していた。

「フン…ここはとにかく小手調べと行くか……全艦に通達…直ちに出撃してロンド・ベルを牽制する！」

「了解しました！」

シーマの命令は直ちに通達され、準備が完了した艦は順次出撃していく。

同日 同時刻 ヤマト第一艦橋

その頃、古代とユキは一ヶ月ぶりにヤマトに帰艦していた。格納庫から第一艦橋へと向かう道すがら、古代は多くのクルーから熱い歓迎を受け、思わず目頭が熱くなっていた。

そして第一艦橋に着くと、艦長席エレベーター脇に掲げられている初代艦長沖田十三のレリーフに向け敬礼していた。

（沖田さん…僕は敵陣から無事に帰つて来ました…これもあなたのおかげです……）

そんな彼の元に第一艦橋メンバーが近付き、改めて帰還を喜んでいた。

中でも土門は涙を流しつつ古代の手を握り締めていた。

「艦長、よくいじ無事で…」

「土門…それにみんな…」の一ヶ月間ヤマトを…ロンド・ベルを守つてくれてありがとう…

返答する古代の目にも涙がうつすらと光り、それにつられてメンバーも目頭を熱くしていた。

そんな中、通信が入ったシグナルが点灯し、相原がそれを受けていた。

「艦長、アルビオンより入電…“これより先、暗礁空域につき、本艦とクラップ級巡洋艦五隻が先行する”との事です…」

「分かつた！シナプラス艦長によろしく伝えてくれ！土門！これより先、何があるか分からぬ…全艦隊に戦闘配備を命じてくれ！それから太田にユキ、この先ミノフスキーパーティーが濃い場所を通りかかるレ

「ダーニーに気をつけてくれ！」

「了解！！！」

矢継ぎ早に出される古代の命令を聞いていた島は、操縦桿を握りながら思っていた。

（さすがロンド・ベル司令だけの事はある……一ヶ月いなかつたブランクを全然感じさせない……それでこそいつもの古代だな……）

同日 9:25 アルビオンメインブリッジ

ロンド・ベル本隊より先行していたアルビオン艦隊は、暗礁空域に差し掛かるやいなやネオ・ジオン艦隊らしき反応を捉えており、アルビオンのブリッジではモニターを監視していたレーダーオペレーターのシモンが報告を始めていた。

「艦長！ 前方30宇宙キロにネオ・ジオン艦隊展開中！ 数およそ10隻前後です！」

「やはりな……連中がこの辺りで待ち伏せしているだろ？ とは思つていたが案の定……しかし数は少ないな、本隊はどこかにいるに違いない……総員第一級戦闘配備！ 各MS隊は発進準備を急げ！ それからモーリス、この事をヤマトに打電してくれ！」

「了解！」

シナプスは各部署に指示を出し、一息つくと思いを巡らせていた。

（……しかし、これまで異星人と戦つて来た古代大佐はどう思つているのだろうか……同じ地球人同士が争うこの星系の現状を見て何を感じるのだろうか……）

だが、その思いはもう一人のレーダーオペレーターのスコットの報告によつて焼き消されていた。

「敵、ザンジバル級巡洋艦が砲撃開始！ 当艦隊到達まであと30秒

！」

「そんなものただの脅しに過ぎん！無視しろー！」

シナップスの叫び声と同時に、リリーマルレーンが放ったエネルギー弾は艦隊をかすめ、同行のクラップ級巡洋艦5隻のうちアルビオンの前方に展開していた2隻・ナツソとエムデンが独自の判断で砲撃を開始していた。

「モーリス！ナツソーとエムデンに打電しろー！これらの位置が分かってしまう…直ちに止めさせる！」

シナップスがモーリスに指示していると、スコットがさりげて報告していた。

「砲撃第一弾、来ますっ！あと20秒！」

「パサロフ！直ちに回避！左15度転舵！」

「了解！左15度転舵！」

シナップスの指示のもと、アルビオン艦隊は回避運動に入ったものの、回避が間に合わなかつたエムデンはまともにリリーマルレーンからの砲撃を浴びて轟沈していた。

同日 9:31 リリーマルレーンメインブリッジ

「敵巡洋艦一隻、撃沈を確認！」

リリーマルレーンのブリッジでは、観測員がシーマに報告を入れていた。

「フハハハハッ！見たかい？連中は大慌てじゃないか！前衛艦隊があの調子じゃロンド・ベル本隊も似たようなもんさね！MS隊の発進準備が出来次第、さつと出撃してあいつらを蹴散りしてしまえ！」

シーマは指示を出すと、ソファでへつらぎながら黙っていた。
(…………私はみなみやうだねえ…………)

第1-3話 魔界領域にまつり用心!-? (やの2) (後書き)

今回の話は“0083”第5話を元にしておつまむ

これからも原作を彷彿とさせるシーンを描くと想つので、似たよつ
なシーンが出て来たら、ひとつもその場面を想像して下さるませ!…

うける事間違いなし!…

第13話 暗礁空域にて用心！？（その3）

同日 9:35 ヤマト第一艦橋

ヤマトでもアルビオン艦隊とシーマ艦隊の交戦の様子が捉えられていた。

「艦長！アルビオンより入電、救援要請です！既にクラップ級巡洋艦一隻撃沈されたそうです！」

相原の報告に、古代は躊躇する事なく決断していた。ブライトとの部隊司令引き継ぎの際、“ネオ・ジオンと戦う事になつても迷つてはいけない…”と申し送りされていたのだった。

「全艦隊戦闘配備！直ちにアルビオン艦隊に救援を送る！土門、主砲発射準備！」

「了解…でも艦長、相手は同じ地球人ですよ…」

「土門…迷つている暇はない…何もしなければ」ひらがやられてしまつ…分かるな……？」

「分かりました…主砲発射準備！」

迷いから解放された土門は、テキパキと各部署に指示を出していった。そんな中古代は、遙か後方に展開しているであろうゼントラーディ軍の動向が気になるのか、レーダー席のユキに問い合わせていた。

「ユキ、ゼントラーディ艦隊の様子はどうだ？」

「今所艦隊後方200キロ地点に展開中！速度変わりありません！」

コキの報告に、古代は思いを巡らせていた。

（ゼントラーーディの奴ら、俺達をプロトカルチャーだと思つて手を出して来ないようだ……だが、いつまでこのままの状態が続くんだろうか…？）

同日 9:37 マクロスメインブリッジ

「デルターイより艦隊所属全機へ！直ちに出撃してアルビオン艦隊を援護して下さい！」

マクロスメインブリッジでは、いつもの未沙らしい的確な管制指示が響き渡り、それを見ていたクローディアは合間を見て彼女に話しがけていた。

「いつもの調子に戻ったようね未沙？」

「そりや そうよ。いつまでも休んでられないから… それに一ヶ月も

【キ】さんに迷惑かけたから……」

未沙が恐縮していると、間もなく発進しようとしていたフォッカーより通信が入っていた。

『一からスカルリーダー！これより発進する。指示頼りますよ、お・
ば・あ・ち・や・ん・…』

フォッカーのその発言に未沙は思わず絶句していた。“おばさん”ならともかく、年寄り扱いされるとは思つても見なかつたからであった。

「ちょ… ちょうど少佐！ どういう事ですかっ！ ？ 人を年寄り扱いしないで下さい！」

『ジョークだよ早瀬！ なんせこの前の帰還パーティーの席でお前さん“浦島太郎の気分です”って言つたるうが！ それに下ネタじや、お前さん嫌がるだらうしよ！』

「少佐聞きましたよ！ 私がいない間、ユキさんを下ネタで困らせてたそうですね！ ？ この事を古代大佐には後で報告しますので！」

『いいじゃね～か！ これもユキに対する俺流の愛情表現だ！ あいつも分かってくれるつて！ んじゃ行きまつせ！』

そつ言づが早いが、フォッカーはさつと自機を発進させて行つた。

第13話 暗礁空域にて何が用心！？（その4）

同日 9:46 暗礁空域モンシアのジエガントクピット

「あ～つたく！敵の数が多過ぎだ！何とかなんねえのか！？」

モンシアは自機の「コクピットで叫んでいた。先に撃沈されたエムデン以外にクラップ級巡洋艦のうち残っているのは二隻のみで、その艦も中破状態でまともに無事なのは旗艦のアルビオンのみと言う有様であった。

『ぶつつくさ言いうなモンシア！そのうちロンド・ベル本隊から援護が来る！それまでもたせるんだ！』

バーニングの激励に、モンシアは溜め息をつきつつ切り返していた。

「……そりやそうですがねえ少佐……それよりウラキの奴は「コアファイターで出撃したのはいいが、どこにいるんですか！？」

『心配するな……ウラキは今ある所で索敵中だ……それともまた逃げちまつたと思ってたとか！？』

「……当たりです少佐……！……敵MS第一弾接近中ですゼー！」

モンシアが指した方向には、ネオ・ジオンのギラ・ドーガが大挙に来襲しつつあった。

しかしその時、攻撃を加えようとしたギラ・ドーガ部隊が突然爆発を起こし、それを見ていたモンシアは思わず呆然としていた。

「……何だあ～！？奴らいきなり爆発しちまつたぞ……一体何が…？」

『ヤツホー！ どうにか間に合つたみたい！ ヒゲのおじさん達大丈夫！ ？』

「やいフル！ ヒゲだけは余計だつづーの！」

相変わらず天真爛漫なフルに、モンシアが噛み付いていた。先程の攻撃は、フルとフルツーが駆る一機のキュベレイから放たれたファンネルによるオールレンジ攻撃であった。

モンシアとフルの掛け合いに、フルツーまでが加わっていた。

『まあ』 はうちらに任せときなヒゲ親父殿！』

「おいフルツー！ 俺はどーぞのアニメキャラか！ ？」

『いや… どちらかと言えば某ゲームに出てきそうなキャラだな…』

二人の会話に、ようやく追い付いた百式を駆るクワトロまでが加わると、それを聞いていたバーニングが機内で頭を抱えていた。

（……こいつら何考てるんだ…… 戦闘の最中だつてのに、よくそんな事が言えるもんだ… しかもあの“赤い彗星”まで…）

第1-3話 暗礁空域にてひる用心！？（やの4）（後書き）

劇中、クワトロが言っていた某ゲームのキャラとは、言わすと知れたあのロールプレイングゲームのヒゲ男です……

モンシアに赤い帽子をかぶせたら何となくあの男に似ていると思つたのは自分だけ……？

第1-3話 暗礁空域コアファイターの心！？（5）

同日 9:49 暗礁空域コアファイター「クピット

その頃コウモコアファイターを駆り、シーマ艦隊の正確な位置を探るべく暗礁空域を飛行していた。

高度をとりつゝも残骸に紛れて目立たないところにていたおかげで、敵からの攻撃にも逢つ事もなかつた。

（ネオ・ジオンの奴ら、暗礁空域のおかげで目立たな過ぎだ…とにかく正確な位置を早いところ掴んでヤマトに打電しなければ…でも仮に連絡出来たとしても攻撃出来るのか…ここからビビり見ても本隊までは100宇宙キロ以上あるぞ…）

「ウ」がコクピット内で周囲に田んぼを配りながら迷いを巡らしている、眼下の暗礁空域の隙間にシーマ艦隊が待機しているのを発見していた。

（いた！敵はザンジバル級巡洋艦を中心としておりそれが10隻前後…ロンド・ベル本隊からの位置、104宇宙キロ…10時方向…奴らに気付かれないよう暗号電で報告だ…）

その頃、コウモの暗号電文をキヤッチしたヤマトでは全主砲の発射準備が行われていた。

同日 9:51 ヤマト第一艦橋

『一番主砲発射準備完了!』

『一番主砲発射準備完了!』

『三番主砲発射準備完了しました!』

全砲塔からの報告が第一艦橋になされ、艦長席の古代は土門に発射命令を下していた。

「土門、全主砲直ちに発射だ!」

「了解!全主砲目標地点、104宇宙キロ先のネオ・ジオン艦隊に

向け発射!」

土門が発射ボタンを押すと、九門の主砲からエネルギー弾が発射され、遙か先のネオ・ジオン艦隊へと向かって行つた。

同日 9:53 リリー・マルーン・メインブリッジ

一方、リリー・マルーン・メインブリッジでは、なかなか進展のない戦況にシーマが次第に苛立ちを募らせていた。

「一体どうなつてるんだい!? 前衛艦隊を壊滅させられないなんて!」

「はあ……」んなはずではなかつたんですが…」

「ツセルが困惑の表情でシーマに言い訳をしてくると、観測員から驚愕の報告がなされていた。

「シーマ様! 高エネルギー弾反応多数、当艦隊に向かって来ます!」

「何バカな事言つてんだい！何かの間違いじゃ……」

シーマが言い終わらないうちに、遙か先から伸びて来たエネルギー弾がネオ・ジオン艦隊に突き刺さり、リリーマルーン以外の艦全てが爆発四散していった。

「本艦以外の艦は全滅です！」

観測員の報告にシーマは言葉を失い、茫然自失となっていた。

（一体、どうあんな遠距離から正確に撃ち抜く事が出来る艦と言えば……ヤマトか！？）

一瞬のひづけたシーマは直ちに通達を開始していた。

「……一旦撤収だ……“茨の園”に進路を取れ……」

同日 9:55 ヤマト第一艦橋

「ネオ・ジオンの残つた艦が戦闘空域から離脱の模様です！」

第一艦橋でユキが報告すると、その場にいた一同は安堵の表情を浮かべていた。

「戦闘配備を解除する……しかし、こつ何度もネオ・ジオンを相手にするのはどうかと思うがな……」

艦長席から古代が下りて来て、島と真田に切り出していた。

「俺もそう思った。同じ地球人同士が争うのはそろそろ止めないと
な古代……」

「島の言つ通りだ。今の我々にとつて重要なのは、全地球圏が一致
団結してゼントラーディに備えなければならないんだ。」

「ええい、それ何とかしなければならないのは確かです真田さん……
とにかく今から善後策を考えますので艦長室で打ち合わせしましょ
う。……島、後を頼む……」

「了解！」

古代と真田が第一艦橋から出て行くと、島が一言呟いた。

「……しかし古代も大変だな。あまり根を詰め過ぎて倒れなければ
いいが……」

第1-3話 暗礁空域にてひる用意！？（やの5）（後書き）

この話、ヤマト完結編をベースにしました。

完結編よりは距離は短いものの、遙か先から正確に敵艦を撃ち抜くヤマトの強さにはシーマ様も驚いた事でしょう……

次回以降、アルビオンに配属される予定の新型ガンダムを巡って、またもやモンシアがひと騒動！？

第14話 新型ガンダムは誰の物？（その1）

A · D · 2205 9 · 29 12 · 32 リンボス ネオ · ダ

カール宇宙空港

ネオ・ダカール……ここはリンボスの首都であり、南半球最大の街でもある。

ここにある宇宙空港は民間は元より、リンボス駐留の連邦軍艦隊の基地もあり、絶えず大勢の人々で賑わっていた。

そんな中、空港ロビー受付前では三人の男女が何やら揉め事を起こしていた。

「冗談じゃないわよ！何でこんな女と一緒に行かなきゃならないのよ！？」

「私だつて嫌よ！こんな分からず屋の小娘と宇宙に行くくらいなら残ります！」

「じゃあそうしなよ！？」

「こらこら……一人ともよしなさい……」

リンボス自治政府代表のアデナウアー・パラヤは、一人の女……娘のクエスと愛人のキャシーとの間で右往左往していた。

彼は翌日に迫ったネオ・ジオンとの秘密会合に出席するためにこの宇宙空港を訪れ、ついでに一人に「ロビー内を見せようと連れ出していたのだった。

だが、愛人の元に入り浸りでめったに家に帰って来ないアデナウアーに反発していたクエスにしてみればはた迷惑な話で、どうにかし

て邪魔なキャシーを追い出せるかを画策していたのであつた。

「あつ……痛いっ！あなたあ～クエスが私の足を踏んだのよ～」

「こらこらクエス、止めなさい……」

「アタシ踏んでなんかないしい～！」

クエスのとぼけた返事に、キャシーはついに堪忍袋が切れていた。

「もういい！私帰りますっ！」

キャシーはそのままスーツケースを転がしてロビーから外に出て行つてしまつた。

その様子を見たアデナウアーは、深い溜め息をつきつつカウンターへと向かつて行つた。

そのカウンターでは、ブライトの妻であるリライ・ノアが係官を相手に押し問答をしていた。

「正式な航空券ですよ！それに連邦駐留軍の紹介状だつてあるんですよ～？」「しかしですねえ…今度の便は一般客は乗せられなくなつたと…」

係官が汗を拭きつつミライに説明していると、アデナウアーが横から割り込んで來た。

「君、悪いが一人分キャンセルだ……ところで、あのご婦人の言つていた紹介状とは誰からのなんだ？」

「はい…連邦駐留軍司令のジョン・コーウェン中将からのだそう…あの三人様はロンド・ベルのブライト・ノア大佐の御家族だそうです…」

その係官の言葉を聞いたアーテナウラーはしばらく考えた後、おもむろに切り出していた。

「仕方ない……」「一チラシには借りがあるしな……それにロンド・ベル関係者ならなおさらだ……君、あの三人を乗せてあげなさい……それと一般客もだ……」

アーテナウラーの発言にその係官は心の中でひそかに困惑していた。

（……全く……これだから政治家ってのは『気まぐれなんだから……』）

第14話 新型ガンダムは誰の物？（その1）（後書き）

“逆襲のシャア”宇宙空港のシーンの再現でした。

ただし原作と違い、ミライ達親子三人をシャトルに乗せる事にしました。

それにもしてもアデナウアーって女性に頭が上がりず、愛人を引き止める事すら出来ない……

普通なら首に縄つけてでも引き止めるはずです。

次回、モンシアの暴走が止まらない……

第14話 新型ガンダムは誰の物？（その2）

同日 13:06 アルビオンMS格納庫

「二ナ、本当なのか？新しいガンダムが配備されるって！？」

MS格納庫で定例会議のためにマクロスに向かうシナバスを護衛するため、コアファイターの発進準備をしていたコウが、二ナからの情報を聞き思わず興奮気味に問い合わせ返していた。

「ええ、明日ロンティオンコロニーに着いてからの話なんだけど。今さっきラビアンローズのエマリー艦長から連絡が入ったの。」「エマリー艦長ねえ……」

二ナからエマリーの名前を聞いたコウは、首を傾げて何かを考えるようなそぶりを見せていた。

「どうしたのコウ？」

「いや……聞いた話によると、エマリー艦長は古代大佐の事をえらく気にしてるって聞いたから……」

「大丈夫でしょ、古代大佐は森さん一筋だから……それよりもそろそろ行くんでしょう？艦長の護衛でマクロスに……」

二ナがコウに聞いたそばからモンシアが横から現れ、彼女の目の前に顔を近付けて切り出していた。

「二ナさん！俺も行って来るぜえ！それより新型ガンダムのパイロットはどうぜんこの俺様だよな二ナさん？」

「あの中尉…その事に関しては…」

「おつと、その先は言わなくても分かつてありますぜ！んじゃ俺は先に行きますぜ！」

モンシアはそう言つと、そそくさとジHガンに乗り込み、一足先に出发して行つた。その様子をそれとなく見ていたモーラは溜め息をつきつつ思つていた。

（あのスケベ親父、何か企んでそうね…）

同日 13:36 マクロス艦内市街地カフェテリア

「なあ聞いたか？新型ガンダムがアルビオンに配備が決まつたつて……」

「おう、俺も聞いたぜ！一体どんなヤツなんだろ？俺も乗りて～よな～！」

いつものカフHテリアでは、ビーチヤとモンドが新型ガンダムに関する話題で盛り上がり、エルまでがうらやましそうな表情で会話に加わつていた。

「そうよね～！今回私達はほとんどビメカーック担当だし、出撃するのはHに乗るジードーやMK-に乗るルーバっかだもんねえ～！」

（現在の時点で、本来の搭乗者だったエマは副長に昇格してネエル・アーガマブリッジ勤務になり、ガンダムMK-はルーが搭乗していた…）

「仕方ないわよ…メカニックの数が足りないんだから…ジャンク屋経験者あなた達に頑張つてもらわないと…ね、バー＝イ？」

クリスが会話に加わりバー＝イに話を振ると、当の本人は椅子にもたれ掛かつて居眠りをしていた。それを見たクリスが呆れ果てている所に、モンシアが一同の側にやつて来てその新型ガンダムの件を切り出していた。

「何だ、お前さん達も新型ガンダムの話をしてたのか？ちよ「うどい！」これから新型ガンダムのパイロットをこの中から決める！」
「えつ…決めるつ…新型ガンダムのパイロットは必然的に僕じやないんですか中尉！？」

「バカ野郎！振り出しに戻つたんだよ！テメエがフルバー＝アンをぶつ壊したからな！一からやり直しだ！」

「ウの抗議にモンシアが言い放つと、その場にいた一同からもブーイングが浴びせられていた。

「何でモンシア中尉が決めるんだよ！」

「そうよ！決着は二年前についたはずよ！」

そんな一同の抗議を受け流し、モンシアはさらに切り出していた。

「とにかくだ！今からこの場にいる全員が参加だ…つておいバー＝イー起きろ！お前さんの探してた赤ザクがあるぞ…」

モンシアはバー＝イに耳元で怒鳴ると、彼は見事に“赤ザク”と言ふ言葉に反応して目を覚ましていた。

「えつ……ど」ですかつ……つて中尉へいい加減にして下さいよー！」

「やつと田が覚めたか！おいバー＝イ、お前さんも新型ガンダムに興味あるだろ？ザクばっかり追いかけないで、後学のために新型ガンダムに乗つてみたいだろ？が？」

モンシアに言い寄られたバー＝イはしばらく考えていたが、やがて結論が出たようであった。

「やつですねえー……たまにはやつらのものいいかもしれませんねえ……」

「よつし決まりだ！やつと決まれば……ついでにあいつらも誘つか……」

ちゅうどそこには、偵察任務から帰つて来た輝達バー＝ミリオン隊が店内にやつて来たのを見たモンシアが早速声をかけると、マックスと柿崎は快諾したものの輝だけが拒んでいた。

「い・ち・じ・よ・う・へ・へ・へ！部下がやる気になつてゐるのに、隊長のお前が参加しないとは何事かあへー！？」

「は…はい…じゃあ自分も…」

結局、輝も参加するはめになり、モンシアは一同を引き連れてカフエテリアを後にしたが、『既にガンダムパイロットだから』という理由で外されたクリスだけが一人ぽつんと残されていた。

（全くもう…みんな何考えてるのかしら……つてそんな場合じゃない…とにかくこの事を早瀬大尉に連絡しないと…）

第14話 新型ガンダムは誰の物？（その3）

同日 13:43 マクロスメインブリッジ

「はい、こちらメインブリッジです。」

メインブリッジでは、非番の未沙に代わりシャミーが管制業務についていた。未沙のいなかつた一ヶ月間、ユキが付きつきりで管制業務を教えたおかげで何とか業務をこなせるようになっていた。（ただし、多少の混乱はあるが……）

『……こちらアルビオン所属のモンシアだ……ってなんだ……この前の泣き虫娘かよ……』

モニターに写し出されたモンシアの姿を見たシャミーは、思わず顔をひきつらせていた。

（何しろ彼から受けた仕打ちがトラウマになり、少々男性恐怖症になりかけていた……）

「あ……あのう……何でしちゃうか……」

『これから俺以下6名で哨戒任務に出る！バルキリー6機をちょっと借りて行くぜ！それから、バーミリオン隊も連れて行くからよろしくな！』

「や、そんなモンシア中尉……っ！勝手にバルキリーを持ち出さないで下さ～～い！」

シャミーは半分涙目になりつつモンシアに抗議したものの、逆に彼から物凄い形相で反撃されていた。

『おい「ハーネ」これは上官からの命令だ！それとも何か！？またこの俺様に泣かされてえのかー？』

「わ…分かりましたあ…！」自由にビリウル…

シャミーは半泣きになりながら承諾すると、満足気な表情をしたモンシアの姿がモニターから消え、アームド01から計9機のバルキリーが発進して行った。

それと入れ違いにブリッジに未沙とクローディアが慌ただしく入つて来て、シャミーを聞いて詰めていた。

「ちよっとシャミー！何でモンシア中尉達を発進させちやつたの…？」

「だつてえ…あの飲ん兵衛中尉の顔が怖かつたんでもの…ふえへへん！！！」

未沙の叱責にシャミーはとつとつ泣き出していた。

未沙は呆れ果てながらも、何とかモンシアに連絡をとるつとしていたが相手側が通信機を切つているらしく、全然連絡の付けようがなかつた。

「ダメね、通信機を切られてる…全くモンシア中尉つたら何考へてるのかしら…新型ガンダムのパイロットを決めるのにバルキリーを持ち出すのかしら？」

「そんな事よりもどうにかして彼らを止めないと…私はロイに連絡するから、あなたは大会議室にいる古代司令に連絡して…」

「分かつたわ、頼むわね！」

未沙は大会議室にいるはずの古代に連絡をとり、端末を操作しながら思いを巡らせていた。

（どうして次から次へと問題が出て来るのかしら？」これじゃ古代さんも大変ね……）

第14話 新型ガンダムは誰の物？（その3）（後書き）

前回、モンシアが口にしていた“赤ザク”とは、15セガンダムに出て来たシャア専用ザクの事です。

バーニィがザクに憧れる理由の一つにこのシャア専用ザクの存在があり、その行方を探している訳ですが、実は物語中盤に意外な形で出て来るので是非お楽しみに……

次回、モンシア達のガンダム争奪戦が開始されますが、事態は思わぬ方向に……

第14話 新型ガンダムは誰の物？（その4）

同日 14:02 ロンテーオンクロニー近辺

ロンテーオンクロニーに程近い小規模な暗礁空域で、モンシア達による新型ガンダム争奪戦……正確には模擬戦が行われていた。条件は、二年前にトリンントン基地近辺で繰り広げられたコウのGP01（フルバーニアン換装前）と、モンシアのジム・カスタムとの間で行われた模擬戦と同じで、相手にペイント弾を先に付けた方が勝ち……と言つ方式で繰り広げられた。

今回は、開始からわずか三分でバーイイが脱落、続いてその一分後にはビーチャ、モンド、エルが脱落、開始から十分後には輝と柿崎が脱落していた。

結局残つたのは言い出しつペのモンシア、前回辛くも勝つたコウ、それにたつた十分で前述の六人にペイント弾を命中させたマックスであつた。

モンシアは残骸にバルキリーの機体を潜めながらマックスの戦いぶりを見て舌を巻いていた。

「マックスの野郎！なかなかやるじゃねえか！伊達にバルキリーのパイロットをやつてる訳じやねえな……」

モンシアが一人呴いていると、機内のモニターに映し出されていたコウの乗るバルキリーの識別信号が消えたのを見て驚愕していた。

「あのヒヨック子野郎までが……なんて奴だマックスの眼鏡野郎……あい

つは化け物か！？』

そんな事を呟いていると間近にマックス機の反応があり、慌てたモンシアは急いで自機を別の残骸に身を隠そうとした時、いきなり目前にマックス機が現れていた。

『わあ～～～つ！んなバカなあ～～～つ！？』

『これでジ・エンドですよ、モンシア中尉！』

マックスがそう言ってペイント弾入りのガトリング砲をモンシア機に向けた時、その場にいた全員に通信が入っていた。

『よ～しそこまでだお前ら！お遊びはそこまでにしろ！』の声と共に全機のモニターにフォックナーの姿が現れていた。

『ゲッ……フォックナー少佐……何でばれちまつたんだ……』

モンシアが思わず呆然としていると、フォックナーから叱責が飛んでいた。

『お前達なあ！ガンダムのパイロットを決めるのに何でバルキリーを持ち出すんだ！とにかく今すぐマクロスに帰れ！古代の奴がカンカンになつて怒つてるぞ！』

フォックナーの発言に、モンシアを除いた一同が思わず身震いしていった。

古代の裏の通り名である“鬼の古代”と書つのを知っていたからであった。

そんな中、マクロスにいる未沙から緊急通信が出されていた。

『……テルターリンボスの宇宙空港からロンティーオンロードに向かっている民間宇宙船が、ゼントラーディ軍に襲撃されているそうです！全機、直ちに救援に向かって下さい！』

『了解！スカルリーダーより各機へ！聞いての通りだ、これより民間宇宙船を救援に向かう！これより部隊を一つに分ける！輝！お前はビーチャ達を率いて民間宇宙船の護衛に当たれ！俺はモンシア、ウラキ、マックス、柿崎、バーニイを率いて敵の目を引き付ける！』

『了解！』

フォッカーの指示のもと、輝は直ちにビーチャ達に指示を出した。

「バーミリオンリーダーよりビーチャ達へ…これより民間宇宙船の救援に向かう！急いでくれ！」

『そ…そんな事言つたつて…』

『さうよー一条中尉！ペイント弾しか無いのこびりやつて戦つのよ…』

ビーチャとエルの抗議に、思わず輝は叫んでいた。

「お前達、何のためにブースターパック付きのバルキリーに乗つてるんだ！？ガトリング砲が無くてもミサイルがあるだろ？が！」

『あ、その手があった！』

「そう言つ事だ！おそれく本隊からも増援があると思つ！…急ぐぞ…』

『了解！…』

輝達の会話を聞いていたフォッカーは、自機の「クピット内で思っていた。

（輝の奴……一人前の指揮官らしくなつて來たな…そのうち俺を追

い越すかもな……（

第14話 新型ガンダムは誰の物？（その4）（後書き）

結局この勝負、フォッカーの介入がなければ勝者はマックスでした。
マックスがガンダムに乗っても、彼の天才ぶりは変わらないはず……

第14話 新型ガンダムは誰の物？（その5）（前書き）

場面転換がせわしないですが、平にご容赦を……

第14話 新型ガンダムは誰の物？（その5）

同日 14:09 ロンテー・オン・ローー空域、カムジンのバルスーシック・ピット

民間宇宙船“エウロパ”を襲っていたのは、カムジン率いるバルスーシック隊であった。彼は偵察と称して自分の部隊を率い、たまたま出くわしたエウロパを格好の獲物としていたのであった。

「いいか野郎共！このマイクローンの宇宙船を煽るだけ煽れ！そのうちロンド・ベルの連中がやって来る……その時を狙つて一網打尽にしてやる！」

『了解！！！』

同日 同時刻 エウロパ客室内

そのエウロパの客室内では、乗客達が恐怖に見舞われていた。バトルスーシックが近くをかすめる度に大きく振動し、シートベルトをしていない乗客は客室内を転げ回る状態であった。

「ちょっと船長！もう少し進路を右！そうすれば敵から逃げ切れる！」

クエスがその場にいなければ、船長に向かって叫んでいるのを見たブライトとミライの息子ハサウェイ・ノアは、ある思いが浮かんでいた。

(もしかしてこのナーボータイプ? センチメートルじゃなければ、こんな事は言わないはず……)

そう思つていろいろな方にクエスが飛ばされそうになり、通路側にいたハサウェイが彼女を受け止めていた。

「君……大丈夫?」
「ええ……ありがとう……」

クエスはそう咳きながら父であるアーデナウラーの方を見ると、彼は頭を抱えて恐怖のあまりに何事かを咳いているのを見て深い溜め息をついていた。

(…………つたく…………) それでも自治政府の代表かしら……情けない……

同日 14:12 ガンダム「クピット

一方、民間宇宙船エウロパを救うべくロンド・ベル本隊から、アムロの駆る ガンダムとブル&ブルツーの一機のキュベレイが先行していた。

アムロはコクピット内で状況を確認すると、ブル&ブルツーに指示を出していた。

「ブルにブルツー、準備はいいな!?」
『「いつでもOKだよ、アムロのおじちゃん!』
『おいブル! おじちゃんじやねえ、少佐だらうが!?』
「…………」

プル＆プルツーのいつもの掛け合いでアムロが呆然としていると、ようやくファンネルの有効射程距離に近付くとプルがまず先手を取つていた。

『よし、行け～～～！ファンネル達～～～！』

『それじゃウチも……行つて来い！ファンネル達！』

『それでは俺も……行け～～～！フィン・ファンネル！』

二機のキュベレイがファンネルを放つたのを確認したアムロもやや遅れてフィン・ファンネルを放ち、ゼントラーディ部隊に対してオールレンジ攻撃を開始していた。

同日 14:13 カムジン機「クピット内

それは突然の事だった。カムジンが率いる部隊のいくつかの機が突然爆発を起こし、しかもどこから攻撃して来るのかエネルギー弾の束が降り注ぎ、部隊をパニックに陥らせていた。

「一体どこから攻撃して来るんだ！ひょっとしてロンド・ベルの奴ら“プロトカルチャーの力”とやらを使つてるのか！？」

オールレンジ攻撃を知らないカムジンは、見えない敵の恐怖を味わつていた。するとそこにラプラミズからの怒りの通信が入つて來た。

『カムジン、なぜ勝手な行動を起こす！ボドルザー閣下はロンド・ベルへの攻撃は許可していない！直ちに帰還せよ！』

「……了解……」

ラプラミズからの通信が切れると、カムジンは部隊に撤退命令を出

すと想いを巡らせていた。

（……つたくラプラニアーズのババア……いい所で出て来やがつて……）

同日 14:18 マクロスメインブリッジ

カムジン達ゼントラーディ軍が撤退して行くのを、マクロスメインブリッジで見ていた古代は不思議な表情を浮かべていた。先程まで大会議室で今後の事について打ち合わせをしている最中にモンシア達の件を聞かされ、急いでグローバルと共にメインブリッジに移動していたのであった。

（その前に、シナプラスとヘンケンからの平謝りはあったが……）

「……何でゼントラーディ軍は撤退して行くんでしょうか？ 戦況は圧倒的に彼らが有利だったはずなのに……」

「おそらく彼らにも何らかの事情があるのでどう…とにかくひらりも撤退命令を出そう…」

「そうですね…それと民間宇宙船をマクロスに誘導するようにと連絡してくれ、ヴァネッサ君…それとモンシア中尉達にブリーフィングルームに出頭するよつことに伝えてくれ…」

「了解…」

矢継ぎ早に指示を出す古代にグローバルは思わず頭を下げていた。

「いや済まんな古代君…本来なら私が指示しなきゃならんの…そこまで頭が回らなかつた…」

「いえ…いらっしゃ出過ぎた事をしてしまつて…とにかく自分は今から民間宇宙船受け入れのため、アームドロ2に向かいますので

後の事よろしくお願ひします。」

そう言つと古代はメインブリッジを後にして、アームド〇二へと向かつて行つた。その様子を見ていた末沙はひそかに思いを巡らせていた。

（ロンド・ベル司令つてホントに大変なのね……古代さん大丈夫かしら？）

第14話 新型ガンダムは誰の物？（その6）

同日 14:30 アームド〇2格納庫

民間宇宙船エウロパの乗客はアームド〇2の格納庫に避難誘導されていた。ブリッジから下りて来た古代は、乗客の安否確認を行つていたブライトを見つけて問い合わせていた。

「乗客の様子はどうですか？」

「今所、怪我をしたり具合が悪くなつた人はいない様子だ。宇宙船の方も大した損傷も無いようだ。」

二人が話している所にミライ親子が近付き、それに気付いたブライトが声を掛けていた。

「ミライ…それにハサウェイにチューインまで…宇宙船に乗つていたのか？」

「ええ、あなたも元気そうね…」

「ああ、何とかな…そうだ紹介しよう。この度私に代わりロンド・ベル司令になつた、宇宙戦艦ヤマト艦長の古代進大佐だ…」

ブライトから紹介を受けた古代は、ミライと握手をしながら自己紹介していた。

「初めてまして、古代です…奥様の事はブライト大佐から聞いてあります。」

「ブライトの妻、ミライと申します…お話は主人から聞きましたが大変な思いをされましたね…」

そんな中、アデナウアーがやつて来てブライトに問い合わせていた。

「ブライト司令、久しぶりだな…誠に申し訳ないのだがロンデニオンロロニーに進路を変えてもらえないかね？」

「これはどうもアデナウアー代表…どのみちロンド・ベルはロンデニオンに向かうつもりでしたから……それから代表、私は今は副司令です。新しい司令はこちらにいる宇宙戦艦ヤマト艦長の古代大佐です…」

ブライトから紹介を受けた古代はアデナウアーに敬礼したものの軽く会釈されて、思わず面食らっていた。そんな中、クエスは古代の姿を見るなり思わず一目惚れしていた。

（ふうん…あれが歴戦の英雄、古代進か……割とイケメンだしカッコイイじゃん！）

クエスが思つていると、その場にいた一同のもとにコキがやつて来て古代に報告を入れていた。

「古代大佐、モンシア中尉達がブリーフィングルームに集合しました…すぐにお出で下さい。」

「分かった、すぐに行く…ではアデナウアー代表、私はこれで失礼します。」

古代はアデナウアーに敬礼すると、コキを伴つてブリーフィングルームへと急ぎ足で向かつて行つた。

その様子を見てクエスは思いを巡らせていた。

（何なのよあの女…私より歳食つてゐるのにあんなミニスカート履い

て……いかにも色氣で男を誘惑しそうじやない……バカみたい！）

第14話 新型ガンダムは誰の物？（その6）（後書き）

クエスと古代＆ゴキのファーストコンタクトでした。

実はこれ、“逆襲のシャア”におけるクエスとアムロ＆チエーンの立ち位置を変えただけのものでしたが、いかがだつたでしょうか？

次話以降、面白い展開があるかも…？

次回、モンシア達に古代がある処罰を下しますが、果たしてその内容は…？

第14話 新型ガンダムは誰の物？（その7）

同日 14:41 マクロス艦内ブリーフィングルーム

ブリーフィングルームでは、モンシアを始めとするガンダム争奪戦に参加したメンバーが古代から叱責を受けていた。

「しかしあ前達は何考えてるんだ！？特にモンシア中尉とウラキ中尉！一年前にも同じような事をしたと先程バーニング少佐から聞いたが、何故ガンダムにこだわるんだ！？」

古代の発言にも関わらず、モンシアは臆する事もなく平然と切り返していた。

「戦艦乗りのアンタにゃ分からんのさー。ガンダムってのは俺達MS乗りの憧れなんだよ！こんなヒヨッ子が乗るより、俺みたいなベテランが乗った方がいいのさ！」

「モンシア、お前大佐に向かって何て事言つんだ！いへらお前より年下でも上回なんだぞ！？」

バーニングが古代を氣遣いモンシアに注意したが、当の古代はバーニングを制していた。

「あの少佐、それはいいですから……とにかく新型ガンダムのパイロットの件に関しては、今まで通りウラキ中尉にやつて貰う事にする……これはロンド・ベル司令としての俺の命令だ……いいなウラキ中尉？」

「分かりました……古代司令の命令なら喜んで引き受けさせて頂きま

す！」

コウが古代に敬礼するのを見たモンシアは怒りの思いを巡らせていた。

（フン…あの熱血野郎、勝手に決めるな！いくじりースカねーちゃんの前だからってカッ口付けてんじゃねえ！）

そんなモンシアの思いも露知らず、古代は改めて一同に切り出していた。

「それはともかく、今度の件に関して全員それなりの覚悟はあるんだろうな！？」

古代の発言を聞いたビーチャ達は顔を合わせ、ひそひそと話し始めた。

「おい…まさか…」
「ひょっとして…」
「噂に聞いた…あれか？」

一同の顔を見渡した古代はひと呼吸置くと、ある処罰を口にしていた。

「お前達全員これよりノーマルスースを着用の上、マクロス艦内一周だ！」

古代のその発言に一同は仰天し、早速ビーチャが異を唱えていた。

「あ…あのう古代さん？まさかヘルメットまで付けろってんじゃな

いですね？」

「当たり前だ！……と言いたい所だが今日は勘弁してやる……それ
を付けて走つたんじや重いだろうし酸欠になりそだからな……と
にかくこれより30分後に開始するからな、早いとこ準備するよう
に！以上、解散する！」

第14話 新型ガンダムは誰の物？（その8）

同日 15:45 マクロス艦内市街地

モンシア達9人は、ノーマルスーツを着た状態でマクロス艦内を走り抜け市街地に差し掛かっていた。

市街地では噂を聞き付けた市民が野次馬と化しており、その中にはロリー達スパイ三人組も含まれていた。

「い……一体何だこの人混みは！？」

「分からん……また何かの集会か……？」

「いや違う……道路の真ん中を集団で走つてる奴らがいる……」

三人が目を向けると、ちょうどその前をモンシア達が走り抜けて行つた。

「……しかし、あいつらなんで宇宙服着たまま走つてるんだ？」

「分からん……これもやはり“プロトカルチャーの力”なのか……」

一方モンシアはと言えど、ほとんど最後尾を走つており、ビーチャとモンドによつて引っ張られている状態であった。

「……もうダメだあ～～～疲れたぞお～～」

「モンシアさん大丈夫ですか？」

「そろそろ……この9人の中じゃ最高齢なんだから……あまり無理しちゃダメですよ……」

「つむせえ……これでも俺様は……28歳だぞ……まだまだ……若い

……」

今にも倒れそうなのに、相変わらず口が減らないモンシアであった。そんな中、一同の目の前に飲料水を入れた箱を抱えたミンメイが現れていた。

「皆さんが苦労様！あと一息だから頑張って！これ飲んで水分補給して下さー！」

9人が各自好みの飲み物をミンメイから受け取つたものの、最後に受け取つたモンシアが彼女の手を握りつつ叫んでいた。

「ミンメイちゃん！アンタはいい子だ～～～！今度俺とデータよ～～～！」

モンシアのこの発言を聞いたミンメイは困惑し、さうに一同は頭の中でモンシアにツッコみを入れていた。

（アンタがそんな事言つても、ミンメイさんがデータしてくれる訳ないでしょーが！～～～～～～～）

回日 同時刻 アームド01格納庫

「す～いなあ～！バルキリーってこいつなつてるんだー！」

アームド01の格納庫で、クエスが整備中のバルキリーを見て喜びにあふれていた。傍らではアデナウアーがハラハラしながら娘の様子を心配そうに見てぼつりと呟いた。

「しかし…あの子がこんな物に興味があるとは思わなかつた…」

その発言を受け、案内役で付いていたフォッカーがアデナウアーに切り返していた。

「あなたの娘さんはパイロットのセンスがあるようです。さつきも「クピットに座つただけで動かし方が分かつたくらいですから…」「じゃあ次は、あそこにあるジエガンでも見て来る!」

「お~いクエス!あまり他の人に迷惑かけるなよ!?」

その場から走り出そうとするクエスにアデナウアーが声を掛けたが、当のクエスには届いてはいなかつた。

(何さ……人がいるからつていい父親演じて…バツカみたい!)

そう思つてゐるうちに、知らずに一般人立入禁止区域に入つてしまつたらしく、クエスの背後から女性の声が聞こえていた。

「そこあなた、これより先は立入禁止よ!」

「あ…すいません…」

クエスが振り返るとユキが立つてあり、ヤマトに帰艦するため既にタイトミニの制服からノーマルスースに着替えていた。

そんなユキの姿を見たクエスは、ふと浮かんだ思いを彼女にぶつけていた。

「……それよりもちょっと聞きたいんだけど…あなた、あの古代進とはどういう関係なのよ?」

突然のクエスの質問に、ユキは困惑しつつも当たり障りのない答えを切り出していた。

「古代大佐は私の上官よ……」

「そう言つ答えじゃなくて……さつき見たけど何であなたみたいな人が、あの人にべたついてるのよ……もしかしてイケナイ関係？」
「彼とは婚約者の間柄なの……別にやましい関係じゃありません……」

さすがのユキもこれ以上答えようがないと思っている所に、クエスを探しに来たフォックナーが声をかけて来た。

「お~いユキちゃん、どうした？」
「あ……フォックナーさん！ 実は……」

ユキはフォックナーにクエスとの間に交わされた話をすると、彼は笑い出していた。

「ハハハハ！ 何だそんな事か？ しかしユキちゃんもこんな小娘相手に大変なこつた！」

その発言にクエスは不機嫌になり、その場を離れつつ思いを巡らせていた。

（何よあの男まで……これだから大人つて……）

第14話 新型ガンダムは誰の物？（その8）（後書き）

コキとクエスのシーン…「逆襲のシャア」におけるチーンとクーンの立ち位置を変えてみました：

これがきっかけでロンド・ベルに対する不信感が芽生え始めるのは原作と同じですが、この先どうなる事やら……

次回、アナハイム本社でオサリバン常務と揚羽会長が会いいますが、何やら不穏な動きが……

第15話 ターニング・ポイント（その1）（前書き）

ティターンズのバスク・オムが初登場。オサリバン常務と揚羽会長と顔合わせしますが……

第15話 ターニング・ポイント（その1）

A · D · 2205 9 · 30 9 · 15 アナハイム本社重役室

「しかし、ここはあなたとお会いできるとは思いませんでしたな、揚羽会長……」

アナハイム本社の重役室で、オサリバン常務は揚羽会長と対面していた。

彼は古代の解任決議失敗の翌日、チャーターした機に一人乗り込みマクロスを離れ、グラナダの中心都市フォン・ブラウンに向かつていたのだった。

お互いライバル企業とはいえ、考え方が同じオサリバン常務とは何故か気が合っていた。

「私もですオサリバン常務……マクロスのフォールド失敗が無ければ、私はここにはいなかつたのですからな……」

「話は聞きましたよ会長……あのヤマト艦長古代進の解任に失敗したと言つ事を……」

いかにも興味津々のオサリバンに対し、その時の事を思い出していた揚羽会長は苦々しい面持ちで呟いた。

「全くロンド・ベルの連中は何を考えているやうにかく彼らを一泡吹かせてやろうと思つてな、あなたの元を訪ねた次第だ……」「そう言つ事ですか……実はあなたに引き合させたい男がいましてな……ティターンズ所属のバスク・オム大佐だ……」

オサリバン常務は別室にいたバスクを呼び寄せ、揚羽会長と引き合わせていた。

「初めまして揚羽会長…私がティーターンズのバスク・オムであります…あなたの噂はかねてから聞いておりますぞ…」

「ティーターンズ…あのエリート部隊か…」

ティーターンズ…元々は連邦軍の単なる治安維持部隊であったが、強硬派であるジャミトフ・ハイマンが代表になつてから、“エリートによる地球圏支配”を掲げてリンボス自治政府の大半の政治家を買収、さらには連邦駐留軍の一部の部隊をも支配下に置いて着実に影響力を増大しつつあつた。

（当然の事ながらこれに反発する者もあり、ヤマト、マクロス合流前のロンド・ベルもその一つだった…）

「私共の部隊ならば、ロンド・ベルを潰す事は造作ない…ジャミトフ閣下の命令があればいつでも動き出せますからな…ましてやあのヤマトには、私は二年前にひどい屈辱を受けましたからな…それはともかく、協力していただけますかな揚羽会長…？」

「もちろんだバスク大佐…資金面は私が引き受けよつ…」

そう言つと揚羽会長はバスクと固い握手を交わしていると、部屋の入口からシーマが入つて来ていた。

「ロンド・ベルを叩きのめす話…私も乗らせてもらおうかねえ？」

「シーマ・ガラハウ…ここに何しに来た！？」

シーマの発言を受けてバスクが彼女に詰問していると、オサリバンが間に入つて切り出していた。

「私が呼んだのだよバスク大佐……ここはとにかく、ティターンズとネオ・ジオンが手を携えて忌ま忌ましいロンド・ベルを叩いて頂きたい……」

オサリバン常務がそう発言した時、外から何か割れる音が聞こえバスクが外に出ると、そこにはコーヒーを入れたトレイを落としたアナハイム女子社員のポーラ・ギリッショウが立ち尽くしていた。

「貴様、今の話を立ち聞きしていたのか！？」

「い……え、私はただ……」

バスクに問い合わせられたポーラは恐怖におののき、思わずその場にへたり込んでいた。

「フン……話を聞いてしまったようだな……お前などこの場で始末してくれる……」

バスクは不敵な笑みを浮かべ、自分の配下の者を呼び寄せてポーラを始末しようとした時、一人の男が現れてバスク配下の男達に殴り掛けたり、彼らが怯んだ隙にポーラを連れ出して、その場を去つて行つた。

バスクはコスモガンを取り出して一人を追いかけようとした時、オサリバンに止められていた。

「お止め下さいバスク大佐……ここで騒ぎ立ててもまずいでしょう……」

「いや……しかし……」

「放つておきましょう……相手はたかが小娘だ……」

このオサリバンのいらぬ決断が、ティターンズの衰退に繋がる事に

なつとほの時点では誰も知る由もなかつた。

同日 9:33 フォン・ブラウン宇宙港

その頃、男の手によつて救い出されたポーラはフォン・ブラウン宇宙港に到着していた。

「……ここまで来れば安心だ……俺はここから宇宙に出るが、あんたはどうする？」

「あの……それよりもあなたのお名前は……？」

「ああ、失礼……俺は元ロンド・ベル所属、強襲揚陸艦ホワイトベイス元クルーのカイ・シゲンだ……」

「ホワイトベースって、一年戦争で沈んだ艦……その元クルーですか……？」

ポーラの問い掛けにカイは微笑みながら切り返していた。

「ああ……もつとも今は退役してフリーのジャーナリストをしているがね。そういうあなたの名前は？」

「アナheim・Hレクトロニクス、システムエンジニアのポーラ・ギリッシュです……それよりも私、オサリバン常務達の話を聞いてしまいました……このままここにいれば絶対殺されると思います……」「じゃあ一緒に来るか？俺はこれからロンティーン・オノ・ローニーに向かうんだが……」

「ロンティーン・オノ・ローニーって確かロンド・ベルの本拠地ですよね……私も連れて行って下さ……！ロンド・ベルには私の同僚が出向しているんです！」

「へえ、その人の名前は？」

「ニナ・ペーブルトン…一年前からロンド・ベルに出向しているんです。」

「そうか、なら話は早い！それでは行きましょうかポーラさん…」

カイはそう言うとポーラを伴い、ロンドニオンゴロニー行きの連絡機へと乗り込んでいった。

第15話 ターニング・ポイント（その1）（後書き）

ストーリーに関係ありませんが、来年4月7日にヤマトパート1のリメイク版“宇宙戦艦ヤマト2199”が公開決定…

旧作が最新の技術で蘇るのはいいのですが、その前に“復活編の第2部はどうした!”と思ったヤマトファンは数多くいるはず……
(作者もその一人…)

第15話 ターニング・ポイント（その2）

同日 9:32 ロンリー・オノ・クロニー内宇宙港

「こやあ～どうもありがと～。おかげで時間通り間に合つたよ～。」

ロンリー・オノ・クロニー内の宇宙港で、アーテナウラーがブライト達ロンド・ベルスタッフに感謝の意を伝えていた。

「いえ…我々は当然の事をしたままで…それよりも交渉の成功をお祈りしています…」

「交渉？一体何の事かね？」

ブライトの発言に対しアーテナウラーがわざと答えをはぐらかすと、横にいたアムロが切り返していた。

「自治政府代表であるあなたが、わざわざこんなクロニーに来るにはそれなりの理由があるはずです。交渉の相手はネオ・ジオン関係者…ですよね？」

アムロの指摘にアーテナウラーは思わず動搖しつつも、あえて平然とした表情で切り返していた。

「とにかく…公式発表があるまで、この事は内密にな～。それとクエスは君達に預けるからよろしく頼む～。」

「分かりました。ちょいちょい同じくら～の年齢の子供達と仲良くなつてこらよつなので」安心を。

アデナウアーがその場から離れ、出迎えの車に乗つて宇宙港から去つて行くとブライトはアムロに問い合わせていた。

「なあアムロ…どうして相手がネオ・ジオン関係者と分かつたんだ？」

「ただの勘定艦長…それより先程から古代大佐の姿が見えないが？」

「ああ、彼は新型ガンダム受け取りのため、アルビオンに行つたんだが…そのおかげで森大尉はおかんむりさ…何でも昨夜この口口一一でデートしようと約束したのに今朝になつてキャンセルされて、わざと俺の所に怒りのメールが届いた訳だ…」

その時の様子を思い出して苦笑するブライトを見ながら、アムロは思いを巡らせていた。

（……しかし古代さんも真面目過ぎるくらい仕事熱心だな…あまり熱心過ぎて森さんとの仲が悪くなるとロンド・ベルの士気に影響するぞ…）

アムロは古代とコキの仲については以前、島や真田から聞いているだけに、思わず頬らぬ心配をしていた。

同日 9:40 アルビオンMS格納庫

「いやあ凄いなあ～今度の新型ガンダムは！」

アルビオンの格納庫で、搬入されたばかりの新型ガンダムを見た口ウが思わず叫んでいた。

そのかたわらには、古代を始め、二ナとモーラ、それに二ナの後輩エンジニアであるミリィ・チルダーが新型ガンダムを見上げていた。

「どうですかこの新型ガンダムは？」

「もちろん氣に入りましたよ！それでこの新型ガンダムの名前は何ですかミリィさん？」

興奮覚めやらぬ口吻を尻日に、ミリィは落ち着き払った表情で説明を始めた。

「形式番号 M S A 0 0 1 1 S スペリオール ガンダムです。主要兵器として、一般パイロットでも扱える準サイコノコ 兵器のインコムを2基装備しています……」

「はあ……アナハイムも凄いもん作ったもんだねえ……」

ミリィの説明にモーラが溜め息をついてみると、れひこコイは説明を続けていた。

「実はこれだけではないんです……このU ガンダムはほんの一端なんです。今アナハイムの工場で、本体とも言える“アームドベース”を建造中なんです。大きさは全長200メートル程近くになります……」

「その大きさって……下手すりゃ小型艦艇並だな……」

ミリィの説明に古代は思わず溜め息をついていた。

「でもこのU ガンダム単体でも凄いですよね……いいのかなあ、自分がこんなのに乗つても……？」

「ウガ不安気に咳くと、古代はそんな彼を激励していた。

「大丈夫だウラキ！失ったGP 01だつて上手く扱う事が出来たんだ、今度だつて扱えるはずだ！」

「そうですね大佐！是非頑張らせていただきます！」

一人の会話を聞いていたモーラは二ナにそつと囁いていた。

「ウラキ中尉もなかなかのもんじやない二ナ？」

「ええ…これで二ンジンが食べられたらねえ……あ、そうそう…古代大佐！いいんですか、森さんの事をほつといても？」

突然二ナにユキの事を振られた古代は思わずドキリとしていた。何しろデータをすっぽかして任務に没頭していたので驚くのは当然であつた。

「あ、あのう二ナさん？ユキから何か言つて來たんでしょうか？」
「さつき私の所にメールが来ましたよ…“任務が終わつたら早く来てくれ”つて…」

「そうか…君にまでメールしていたなんて…じゃあ後の事はよろしくお願ひします…」

そう言つと古代は格納庫から一目散に走り去り、その様子を見ていたモーラは苦笑しながら咳いていた。

「ありや大変ね…森大尉に高い物ねだれそうだわ…」

第15話 ターニング・ポイント（その2）（後書き）

劇中に登場したS^{スペシオール}ガンダム…

『ガンダム外伝ともいづべき作品（……と言つていいのか？）』“ガンダム・センチネル”に出て来た物を登場させました。

このガンダム、ゲームの第4次スーパー・ロボット大戦に初登場した時に、『ウ』を乗せてそこそこ活躍させていたので、今作品でも登場させました。

物語後半、Sガンダムを『ア』にしたアームドベースが登場しますので、ぜひ期待を……

次回、アテナウラー・パラヤとネオ・ジオンの総帥が話し合ひのチーブルにつきますが、その人物に要注目！

第15話 ターニング・ポイント（その3）

同日 10:00 ロンティーオン市内高級ホテル会議室

「これはアデナウアー閣下、よくおいで下さりました。」

ロンティーオン市街地にある高級ホテル“コンコード”にある大会議室で居並ぶネオ・ジオン関係者のうちの一人が、アデナウアー一行を丁重に出迎えていた。

「これはどうも、皆さんお揃いで……」

「はい……それと実は、私共の最高責任者である方も来ているのであります。」

「……と言つと、もしや……」

アデナウアーが問い合わせるとその高官は別室にいるその最高責任者を呼び寄せていた。

「初めましてアデナウアー閣下……私はネオ・ジオンの総帥、パブティマス・シロッコです……アデナウアー閣下、わざわざ足労頂きありがとうございます。」

「いやあ～総帥いらっしゃいになるとは……これで交渉もスムーズに行くといつものです……」

アデナウアーがシロッコを称賛して交渉を開始していたものの、当の彼はニユータイプの勘でアデナウアーの本心を見抜いていた。

（フン……バカな連中だ……我々が本気で和平交渉に来たと思つて

るらしいな……いずれそのツケが大きかった事を思い知らせてやる……

…)

そんなシロツコの想いも知らず、アテナウアードは話を続けていた。

「停戦交渉に関する議決書類の交換並びに、小惑星アクシズ譲渡の代金を確かに受け取りました。代金の確認については、こちらにいる連邦会計監理局の監査官カムラン・ブルームが担当いたします。」

自治政府側から紹介を受けたカムランは、代金を確認しつつ思いを巡らせていた。

（……なぜネオ・ジオンの連中はこの時期にアクシズを手に入れようとするのだ……？）

同日 10:42 高級ホテル“コンコード”スイートルーム

リンボス自治政府側とネオ・ジオン関係者との秘密会談が終了し、シロツコはホテルのスイートルームで休息を取りながら想いを巡らせていた。

（バカな連中だ……あれで片が付いたとでも思っているのか……？アクシズさえ手に入ればこちらのものだ……）

そんな中、シロツコの元に作戦室であるナナイ・ミゲルが部屋に入つて来ていた。

「お呼びでしょうか総帥閣下？」

「ああナナイ大尉、私はこの後“連中”との交渉に出向く……またしばらくこの星系を離れるつもりだから後の事を頼む……」

「了解しました。後はお任せ下さい……」

返事はしたもの、ナナイはこのシロッコを余り快く思つていなかつた。

前回までの戦いで、ジオンにゆかりのある人物…ハマーン・カーンやエギーゴ・デラーズと言つた者達が軒並み戦死し、ザビ家直系の娘であるミネバ・ラオ・ザビの行方に至つては今だ分からず仕舞いの現状において、部外者であるシロッコがネオ・ジオン総帥である事に大きな不満を抱いていた。

そして、一年戦争で活躍したシャアも名前を変えてロンド・ベルにいる事も彼女の不満に拍車を掛けていたのであつた。

(この男ではいずれネオ・ジオンは終わつてしまつ……せめてシャア大佐がネオ・ジオンの総帥であつたなら、何も“連中”に頼らなくとも……)

第15話 ターニング・ポイント（その3）（後書き）

ネオ・ジオンの総帥を、パプティマス・シロッハにしてみましたがいかがだったでしょうか？

「ガンダム本編ではジャミトフ暗殺後にティターンズの総帥になつていましたが、今作品限でそういう設定をしました。

それよりも劇中に出て来た“連中”的正体……どんな組織なのかはまだこのまま明らかに出来ませんが、いずれ判明しますのでご期待下さいませ……

第15話 ターニング・ポイント（その4）

同日 11:05 ロンテニオンクロニー内草原地帯

「うわあ～！空気がおいしい～！」

クエスはミニバン型のエレカの窓から顔を出し、大地の息吹を感じ取っていた。ジュドー達シャングリラチルドレン、カミーコとファ、それにハサウェイがミニバン型エレカ2台に分乗して宇宙港から散策がてらここまで来ていたのだった。

「おいくエス！あまり窓から頭出すなよ！ケガするぞ！」
「ちょっとカミーコ！別に頭出したっていいじゃない！」

憮然とした表情でクエスに注意したカミーコに、助手席のファが彼をたしなめていた。

注意されたクエスの方も、憮然とした面持ちで座席に座り居眠りを始め、ハサウェイの方はカミーコにまた何か言われやしないかとハラハラしていた。

ファはその様子を見て、ハンドルを握っているカミーコにさつと囁いていた。

「カミーコ、さつきから機嫌悪そうだけじづかしたの…？」
「……別に……何でもないよ…」

カミーコは無難にファの質問をかわしていたものの、先程からある想いが浮かびつつあった。

(何だこの感じは……もしかしてこの「ロー」にあの男がいるのか……?)

カミーユがそう思つてゐる所に車の前を一頭の馬が横切り、思わず急停車させたカミーユはその一頭の馬に乗つてゐる一人の人物を見て呆然としていた。

「あれは……パブティマス・シロッコ……それにサラ……」

思わずカミーユはエレカから下りてシロッコを問い合わせていた。

「シロッコ！なぜお前がここにいる！？」

「久しぶりだなカミーユ・ビダン……どれくらい振りかね……」

「話をそらすなシロッコ！それよりもなぜ戦いを続ける！これ以上罪のない人々を苦しめるな！」

コスモガンを抜きつつカミーユはシロッコに問い合わせると、彼は馬上から不敵な笑みを浮かべつつ切り返していた。

「そんな事を言われても困るのだがね……我々人間は戦わなければならぬのだよ……人間から戦う意欲を取り去れば、後はただの人生に過ぎん……だから私はあえて憎まれ役をかつてているのだ……」

「だからって……これ以上愚かな争いを続けるつもりか！？」

二人の会話を聞いていたクエスは、次第にシロッコの独特的の理論に納得しつつあった。

(確かに……シロッコって人の言う事は当たつてる……そんじょそこの大人より、この人は頼りがいがあるかも……)

そう思つたクエスは、カミーゴがシロツコにコスモガンの銃口を向けるのを確認すると、彼に体当たりを食らわしてコスモガンを奪い、逆に銃口をカミーゴに向けていた。

「カミーゴーあんたちょっとセ「過ぎるよー。」

クエスの突然の行動にカミーゴはもぢろんの事、その場にいた一同を呆然とさせていた。

「クエス、何やってるんだよー?」

ハサウェイがクエスに近付こうとした時、物凄い轟音と突風が起っこり、上空から一機のホビー・ザクが現れていた。

そのホビー・ザクは一同の間に着陸し、「クピットから一人のネオ・

ジオン兵 ギュネイ・ガスが姿を見せ、シロツコに叫んでいた。

「総帥ー!」無事ですか!?

「済まんなギュネイ!……それよりもそこのお嬢さん……一緒に来るかね?」

シロツコに問い合わせられたクエスはしばらく考えた後、彼の話に乗る事にした。

「ええ、そうします!ロンド・ベルには嫌な奴がゴロゴロいるの

クエスはそう言つと、シロツコとサラと共にホビー・ザクの手に乗り込むと、ギュネイは直ちにホビー・ザクを動かして再び上空に向け飛び立つて行つた。

第15話 ターニング・ポイント（その4）（後書き）

この話、“逆シャア”の草原地帯でのシーンを再現、アムロとシャアの立ち位置をカミーゴとシロッコに置き換えました。

それにしても、劇中出て来たホビー・ザクはバーニイが見たらどう思ひやひり……

次回、ブライトとカムランが再会……ミライの現在の夫と元婚約者の対決が……

ブライト&カムラン

「「ある訳ないだろーがー！」」

第15話 ターニング・ポイント（その5）

同日 11:28 ラー・カイラム士官食堂

ラー・カイラムの士官食堂で、ブライトはカムランと10数年振りに再会を果たしていた。

何しろ一年戦争時、当時の所属艦であった強襲揚陸艦ホワイトベイスで操舵士を務めていた妻のミライの元婚約者と言つ事で、多少の緊張感でカムランを迎えていたものの、当の彼が何事もなかつたよう振る舞つているのを見てホッとしていたのであった。

「……実は」相談がありまして……誰に話せばいいか迷つていたのですが、このロンティーン・ロードにネオ・ジオン総帥のパブティマス・シロッコが来ているのです……」

「何だつて……それは本当なんですかー？」

カムランが散々迷つて相談しに来た話の内容に、ブライトは驚きの声をあげていた。

自分達の本拠地であるこのロードに敵の総大将が現れるとは夢にも思わなかつたからであった。

「それでカムランさん、シロッコとアーテナウアー代表達は何を話していましたか？」

「和平に関する議決書類の交換と、かつてハマーン・カーンの本拠地であった小惑星アクシズのネオ・ジオンへの再譲渡です……自治政府側は完全に和平が成立したと思い込んでいるんです……」

「そんな……地球本星政府と協議せずに勝手に話を進めるなんてどうこうつもり……」

ブライトが言いかけた時、ジュドーが慌てて土官食堂に駆け込んで来た。

「ブライトさん大変だあ～～～！」

「ジュドー、来客がいるんだ！少しばかり静かにしろ！」

「す、すいません！それよりも大変なんだよ、クエスがシロッコに付いて行つたんだ！」

「何だと！？本当なのか？」

「ああ！カミーユさんとシロッコが揉めてる時にクエスが急にカミーユさんの「スモガソを奪つてシロッコと一緒に行つてしまつたんだよ！“ロンド・ベルには嫌な奴ばっか”なんて言つて……」

ジュドーの話にブライトは思わず頭を抱え、改めてカムランに問い合わせていた。

「カムランさん、アーテナウアーレーベンの居場所は分かりますか？」

「代表なら先程ロードーを出て行きましたよ…停戦交渉の確認をするとかで…」

カムランが答えていたと一人の士官が近付き、ブライトに切り出していた。

「艦長、面会の方が一人お見えなんですが…カイ・シデンという方と女性の方がお会いしたいと…」

「カイが…分かった、ブリーフィングルームに通してくれ…ああ、それとヤマトの古代艦長に連絡を取つてくれ…私の携帯端末を使つてくれて構わないから…それと、メインスタッフをブリーフィングルームに集合させてくれ…」

「了解！」

ブライトはこの時、何かが起こりそうな予感がしていた。それは長年の経験から来る不安感がそつとさせたと言つても過言ではなかつた。

（…………何かが起こりそつだ…それもかなり大規模な何かが…）

同日 11:33 ホテルロンティオングルフエテリア

その頃古代は、ホテルロンティオングルフエテリアのテーブル席で疲労困憊しつつ一息入れていた。

アルビオンを出てから、このホテルで待ちくたびれたユキに散々拗ねられた揚げ句、市街地のブティックやアクセサリーショップをはしげしてユキの買い物に付き合わされたのであつた。

（はあ……疲れた……こんな事になるんだつたら初めからテートすればよかつた……おかげでいくら金使つたやら…）

そんな事を思いつつ、テーブル上のレモンティーに口を付けると、席を外していたユキが戻つて来ていた。

「お待たせ古代君。じゃあ行きましょうか？」

「くつ！？ 行くつてどこに……？まだ欲しい物もあるのか？」

古代は慌ててレモンティーを飲み干すと、ユキに切り出していた。

「うん…実はね、こここのホテル空室確認したら空いてるつてもよかつたら……今から……ね？」

ユキの思いがけない発言に古代は思わず呆然と立ち尽くしていた。

（ひょっとしてユキが欲しいのって俺…？……いくらなんでも昼間から……でも下手に断つたらさつき以上に機嫌悪くなるし……）

そう思いを巡らせている所に、一人の携帯端末に緊急のメールが入つて来ていた。

「ユキ、見たか？ブライトさんからの緊急連絡…」

「ええ、ロンド・ベルメインスタッフは緊急集合ですって……何かあつたのかしら…」

「分からん……とにかくラー・カイラムに急げ…」

「了解……」

ユキはそう答えたものの、何か物足りなさそうな表情で思いを巡らせていた。

（ま、いいか…）の埋め合わせはこの次の休暇の時に……その時は古代君に今日の分も頑張つてもらおうつと……）

第15話 ターニング・ポイント（その5）（後編）

次回、ジョン・ロー・ウェンヒジヤリット・ハイマンが登場……。ジョンの身に危険が迫る。

第15話 ターニング・ポイント（その6）

同日 11:46 ネオ・ダカール連邦駐留軍司令部

リンボスの首都ネオ・ダカール市内にある連邦駐留軍司令部の一室で、司令であるジョン・コーウェンがロンド・ベルから送られて来たゼントラーディ軍に関する報告書を見て、深い溜め息をついていた。

（しかし、これだけの大艦隊に太刀打ちできる訳がない……これは地球本星と協議したい所だが……）

コーウェンはそう思いつつも、地球の連邦軍総司令部との連絡手段が無い事を悔やんでいた。

実を言えば、この三ヶ月の間にネオ・ジオンとの交戦の激化おかげで通信施設が破壊されたままで、修理のメドがつかないのであった。

おまけに太陽系とアルファ星系とを結ぶ航路も、ゼントラーディ軍の出現のおかげで閉鎖されたままであった。

（……とにかく、ここはロンド・ベルに頼らざるを得ない……あのヤマトと新造艦のマクロスもいるしな……）

コーウェンが思いを巡らせていると、秘書官が部屋の中にやつて来ていた。

「司令、自治政府のドーリアン外務次官が応接室でお待ちです……」「ああ、すぐに行く。先に行つてくれ……」

秘書官が先に部屋を出ると、コーウェンは机上の書類を整理して外出ようとすると、室外からおびただしい銃声が聞こえていた。

コーウェンが急いで室外に出ると、血だらけで倒れている秘書官の脇にライフルを手にした兵士達が立っていた。

「貴様ら何をやっている！」

「ジョン・コーウェン中将……あなたを国家反逆罪で身柄を拘束させて頂きます……」

コーウェンが兵士達に叫ぶと、その中の一人がライフルを身構えたままで彼に切り返していた。

「何を言つか！ 反逆しようとしているのはお前達の方だ！」

毅然とした態度でコーウェンが反論していると、ティターンズ代表のジャミトフ・ハイマンが現れていた。

「ジャミトフ……これは一体どういつもりだ……？」

「コーウェン中将……この駐留軍司令部は我々ティターンズが管理する事になった……従つてあなたは本日付で駐留軍司令を解任し、身柄を一週間拘束させて貰う……愚かな真似をしなければ身の安全は保障する……」

「分かった……それよりもドーリアン外務次官だけは見逃してもらえないか……？」

「悪いがそういう訳にはいかん……彼女はカリスマ的存在だ……下手に見逃す訳にはいかないのでな、同じく身柄を拘束した……」

コーウェンはジャミトフの発言に怒りを表す訳にいかず、あくまでも平静を保ちながら切り出していた。

「分かった……」ほおとなしく従わせて貰つ……ただし、10分ほど時間をくれ……」「

「いいだろ?……」

部屋からジャミットと兵士達が出て行くとローウェンは手早く必要なものをまとめ、さらに携帯端末からロンド・ベル宛ての緊急連絡を入れていたが、ある思いが彼の中に芽生えていた。

（あの男、一週間ほどと言つたが……そう言えれば一週間後には州議会が開かれるはずだが……まさか彼らは………）

同日 同時刻 第2惑星跡アストロイドベルト

その頃、アデナウアー達自治政府関係者を乗せたクラップ級巡洋艦ロングビーチは、リンボスからワープして小惑星アクシズがある第2惑星跡アストロイドベルト空域に到着していた。

「ワープ終了!アストロイドベルトまで120宇宙キロ地点に到達しました!」

航法士官の報告にアデナウアーはぐつたりした表情でベルトを外し、ロングビーチ艦長のイートン・ヒースローに話し掛けていた。

「艦長……ワープはやつと終わりかね……」

「もう終わりですよ閣下……ワープに慣れないようでは地球本星には行けませんぞ……あのヤマトはこんなワープを何度も繰り返して地球とイスカンダルを一年で往復したのですからな……」

その言葉を聞いたアーデナウアーは思わず絶句しつつも、目前に迫りつつあるアステロイドベルト空域に目をやりながら呟いていた。

「まあ……ネオ・ジオンとの和平が結ばれるのだから……これくらい我慢しないと……」

アーデナウアーがそう言つたのと同時に、レーダー要員が報告を入れていた。

「艦長、前方50宇宙キロに艦影確認！」

「ほう……どうやらネオ・ジオン関係者を乗せた船のようだな……約束した時間には少し早い気もするが……」

「いえ……それがネオ・ジオンの船ではなく、ティターンズ所属のアレキサンドリア級巡洋艦なんです……」

「……？ 何でこんな所にティターンズがいるのだ？」

しかしぬるべく次の瞬間、ティターンズ所属のその艦は突然砲撃を始め、放たれたエネルギー弾がロングビークをかすめて行つた。

「な……何だ！ とにかく応戦だ！ 総員戦闘配……」

ヒースローが命令を下そうとした時、砲撃の第一弾がブリッジを直撃……さらに次の攻撃でロングビークは撃沈し、アーデナウアー達一行を含む全員が星屑となつた。

第15話 ターニング・ポイント（その6）（後書き）

劇中に名前が出て来たドーリアン外務次官は、「新機動戦記ガンダムW」に出て来たヒロイン、リリーナ・ドーリアンです。

今後物語の進行と共に、ガンダムWのキャラクターが出て来ますので是非ご期待を……

次回、ティターンズの魔の手がロンド・ベル一行に伸びる……

第15話 ターニング・ポイント（その2）

同日 12:04 ラー・カイラムブリーフィングルーム

「何だつて…アナハイムのオサリバン常務がティターンズとネオ・ジオンと繋がっているだと…おまけにその場に揚羽会長が同席していたなんて…」

ブリーフィングルームで、カイとポーラから一通り話を聞いたブライトは思わず絶句し、アムロが疑問をカイに投げかけた。

「しかし、どうしてカイさんはこの情報を掴んだんですか？」

「以前からオサリバン常務に関して黒い噂が流れてね、独自に俺が調べたらあの男は大分前からネオ・ジオンと密接な関係にあつたらしい。一ヶ月前の件…波動エネルギー・コンバータの製造ライン爆破事故も彼が関わったらしい…それに大量にあつたはずの在庫もネオ・ジオンに全て横流したそうだ…あの男はいざアナハイムを乗つ取るつもりらしいからな…」

「そんな…あのオサリバン常務が…」

二ナが今にも泣き出しそうな表情で呟くと、カイはさらに続けていた。

「…………とにかく俺は常務の行動を逐一記録しようと思つてな、出入りの清掃業者を装つて常務のいない時を見計らつて隠しカメラをひそかに取り付けた…これに今までの記録が残つてる…」

カイはそう言つと、スーツのポケットから記録の入つてゐるメモリ

「カードを取り出していた。

その時、ブライトの所持していた携帯端末にメールが入り、それを確かめたブライトの表情が険しくなるのを見た古代は彼に問い合わせた。

「どうしたんですかブライトさん？」

「ああ、大変な事になった……駐留軍司令のコーウェン中将が身柄をティターンズに拘束されたそうだ……その上駐留軍司令部も奴らに占領されたそうだ……」

この発言にその場にいた一同からどよめきが発せられ、カイは来るべきものが起こったかと言つ表情で呟いた。

「これで一連の件は繋がったようだな……それも一週間後に州議会が開かれると言つこのタイミングで……」

「カイ、詳しく話してくれ……奴らの狙いは……？」

「奴らは一週間後の州議会でクーデターを起こして、地球連邦からの分離独立を宣言……いすれ地球本星を占領して全地球圏の支配を囮論むはずだ……」

カイの爆弾発言にその場にいた一同からどよめきが起こり、古代はそれを制しながら切り出していた。

「とにかく、奴らの行動を止めるには我々ロンド・ベルが動かなければならぬようだな……今からでもここを出発して州議会のあるネオ・ダカールに向かわないと……」

「でも古代さん、州議会を囮指すのはいいけど、ただ占領するだけではティターンズやネオ・ジオンの連中と同じだぜ！それに議員達の中にはロンド・ベルや地球本星の事を快く思つてない奴らが大半を占めてるんだ……どーするつもりなんだよ！？」

ジユードーの問い掛けに古代が答えに詰まるとい、カイがある提案を切り出していた。

「なに、簡単な事さーさっき言った記録を見せればいいだけの事さー常務達の悪事を議員連中に見せれば納得するだろ?」

「しかしカイさん、誰がこの記録を見せるんですか?それなりの人でないと彼らは納得しませんよ?」

カミーユの疑問を予想していたのかカイは表情を緩め、ある人物の名前を挙げていた。

「幸いこのロンド・ベルにはカリスマ的存在が一人いる…一人は宇宙戦艦ヤマト艦長古代進大佐だ。何しろあなたは地球本星を何度も危機から救つた英雄だからな…」

「……カイ君、悪いが俺は英雄でも何でもない…それに政治家連中を相手にする度量もないしな…」

古代の答えをカイは思わず苦笑しつつ、ちらに切り出していた。

「まあ、あなたならそう言うだろ?と思いましてよ…それはともかくもう一人の人物なんだが…」

「私の事だろ?カイ君…」

カイがその名前を言う前にクワトロが切り出していた。

「さすがクワトロ大尉…いや…元ジオン公国軍エースパイロット、シャア・アズナブル大佐…その名前も偽名だと言う事はとっくに調べ上げてるんだがな、キャスバル・レム・ダイクン殿…」

カイの発言に古代は強い衝撃を受けていた。クワトロがあの“赤い彗星”ことシャア・アズナブルである事は聞いていたものの、一年戦争のきっかけとなつたジオン・ズム・ダイクンの忘れ形見である事実までは知らなかつたのであつた。

（それにしても…何故彼はダイクンの名前を名乗らうとしないんだ…何か深い事情でもあるのか…？）

古代が思いを巡らせていると、ラー・カイラムの当直士官が慌てふためいてブリーフィングルームに入つて來た。

「ブライト艦長大変です！今入つた情報で、アデナウアーレ代表達の乗つたクラップ級巡洋艦ロングビーチがアステロイドベルト空域で事故を起こして沈んだそうです！」

「何だつて…それは本当なのか！？」

「ええ…その事に関して……つてちょっとお待ち下さい…」

その当直士官の後ろから三人の兵士がいきなり現れ、その中のサングラスをかけた男が切り出していた。

「私は連邦駐留軍、第4警備中隊の責任者ナカツハ・ナカト中佐である！ただ今よつこにいるロンデ・ベル諸君の身柄を拘束させて頂く！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4770v/>

銀河伝説 鋼鉄の咆哮

2011年11月20日18時14分発行